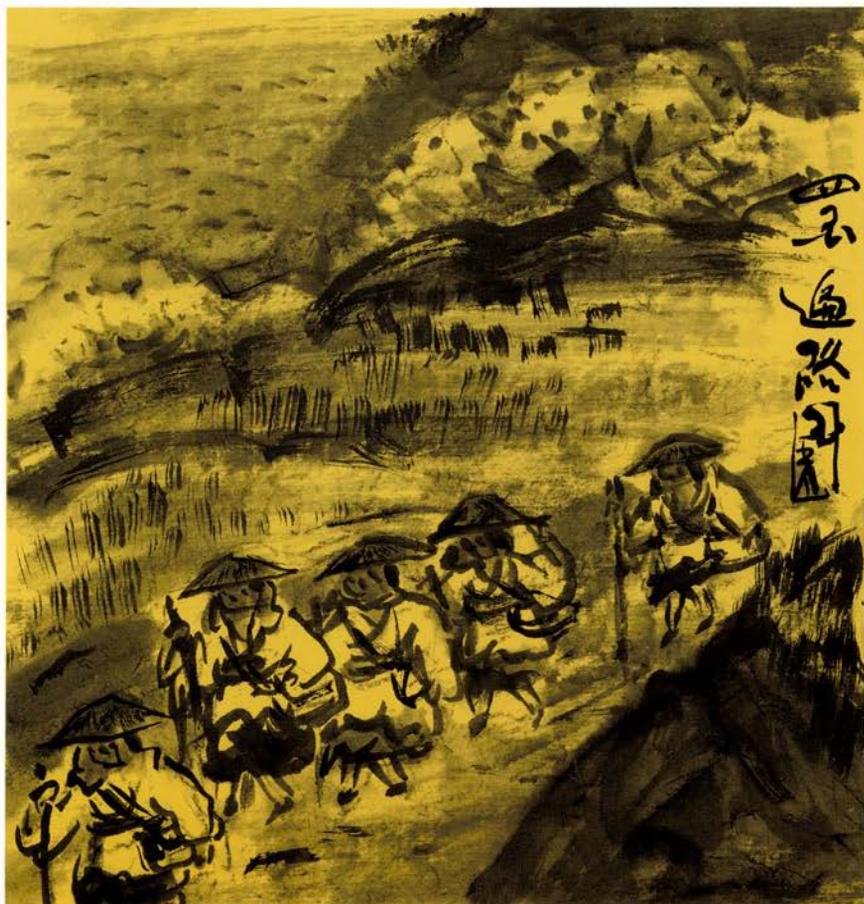


# 川柳塔

創刊大正十三年 通卷八〇三號



白川協加盟

No. 803

四月号

# 「川柳塚」300号記念川柳大会

とき 5月1日(日) 午前11時開場

午後零時半締切

ところ 堺市総合福祉会館(堺郵便局南側)

(南海高野線「塚東」駅 南二〇〇米・西一〇〇米)

おはなし 橋高 薫風氏

兼題と選者(各題2句)

「続く」 河内 天笑選  
 「足」 高杉 鬼遊選  
 「急」 小出 智子選  
 「化ける」 奥山 晴生選  
 「転」 天根 夢草選  
 「愛」 梶川 雄次郎選  
 「震える」 森中 恵美子選  
 「上」 中尾 藻介選

◎席題なし(投句拝辞)

会費 2000円(昼食・記念品・作品集)

賞 各題秀句集ほか

主催 塚川柳会  
 後援 川柳塔社

# 川柳サークル 卯の花10周年記念川柳大会

とき 5月22日(日) 午前11時開場

午後1時締切

ところ 高槻市現代劇場・文化ホール

(阪急「高槻市」駅・JR「高槻」駅)

おはなし 野村 太茂津氏

兼題と選者(各題2句)

「道化(ピエロ)」 河瀬 芳子選  
 「Tシャツ」 久保田 半蔵門選  
 「流れ」 奥山 晴生選  
 「犬」 高杉 鬼遊選  
 「男」 山本 翠公選  
 「罪」 永田 帆船選  
 「道連れ」 黒川 紫香選

◎席題なし(投句拝辞)

会費 2000円(昼食・記念品・発表誌)

高槻市  
 高槻市教育委員会  
 高槻市文化団体協議会  
 後援 (社)全日本川柳協会  
 川柳塔社

# ある色紙

西尾 葉

本社のも例会は、毎月七日と決めてあるが、会場や曜日の関係で、その前後になることがある。おかげさまで出席人数は百名前後の大盛況で欣んでいる。一年間十二ヶ月の皆勤はなかなか至難である。家庭の事情、本人の健康、その他の好条件が揃わないと一年間の皆出席はむずかしい。小学校の時、「俺は優等賞をもらわなかったが、皆勤賞はもらった」と威張っていた腕白者が居ったが、腕白なだけに元気が良かった。

さて、本社の皆勤賞のことだが、毎年その出席者の約半数が皆勤される。昨年もまた五十名に近い人数だった。洵に欣ばしいことである。その皆勤に対して御礼とお欣びとを形で現すのに、今までは

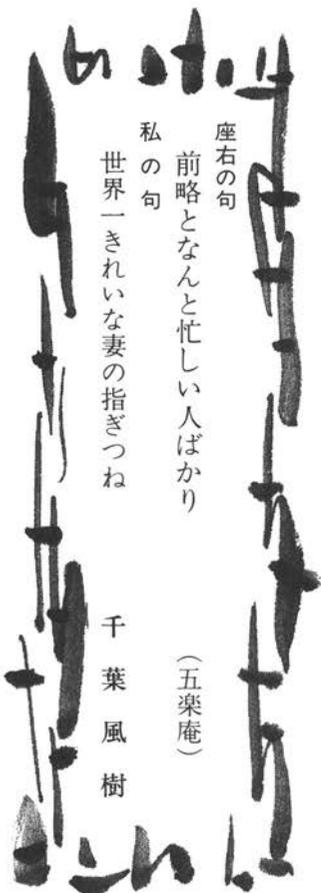
主幹の色紙をもらっていたことが前例になって、先の主幹の生々庵は、事務局の葉子さんを相手に落款押しに大童だったことを憶えている。私も主幹を受けてからずっと、その轍を踏んできたのであるが、五十枚近い色紙を書く労力の消耗が八十歳を越えてから目立って酷しく落款と遊印押しに家内との口喧嘩が情けなくなつて、今年の一月にお渡しする色紙を、常任理事会のお許しを得て、図書券にしようとして、大たすかりであった。

皆勤をされる方は、毎年大体きまつているが、中には主幹の色紙が目的だったという人もあつて、洵に気の毒なことをしたと思つている。それでそういう方には、句を指定して下されば、特別に書かせてもらう心算である。曾て俳界の人達と話したことがあつたが、雑誌を主宰する者の色紙は一枚金一万円、短冊は五千円と決めたことがあつたので、今度私もその例にならつて、色紙、短冊の値段をそう決めて、書かせてもらうことにした。

畏友小松園は、片っ端から色紙のある限り書いてやっていたが、案外残っていない。どうしたのだろう。

恩師路郎は、そうたやすく書かれなかつた。筆ペン、マジックペンなどをもつてゆくと、頭から見向きもされなかつた。あとへ残るからだと言つて自分の色紙などを大切にされた。

こんな話がある。ある立派な柳誌の作家に子供が出来た時のこと、柳友はベビー服だの祝金などを送つたが、その柳誌の主幹は、お祝いの句の色紙を送られた。後程その作家は祝返しの商品をそれれもつてこられたが、主幹の祝返しの品がなかつたので、そのことを柳友に訊ねると、「先生からは色紙をもらっただけだ」と言う返辞だったそう。今ならその主幹の色紙は〇〇万円もするだろう。だから所望されない只の色紙や短冊は、易々と他人にあげるものではないと思考した次第である。諒とされたい。



座右の句

前略となんと忙しい人ばかり

(五楽庵)

私の句

世界一きれいな妻の指ぎつね

千葉 風樹

# 川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ある色紙

西尾 栞 …… (1)

三婆さん

黒川 紫香 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 …… (4)

自選集

東野 大八 …… (42)

川柳の群像 八木摩天郎

橘高 薫風 …… (48)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (二十一二丁)

大空のころろ (40)

水煙抄

黒川 紫香選 …… (50)

秀句鑑賞 「同人吟」

新家 完司 …… (72)

水煙抄

山下 美津留 …… (74)

■エッセー 「芽を食べる」

林 荒介 …… (75)

銀河系

河内 天笑選 …… (76)

## 三婆さん

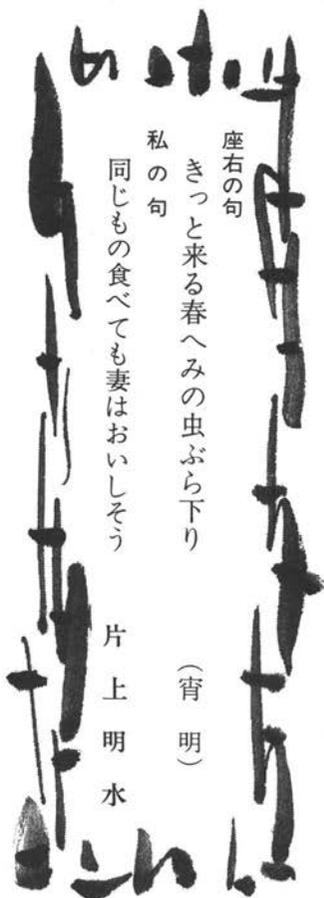
黒川 紫香

心に残っている三人のお婆さんがある。もう十数年も前になるが、職を離れて年金生活になった気安さんとまだ動ける達者な体をもて余し、水客君と共にリュックを肩にブラッと一週間余の旅によく出た頃拾った話である。

北海道は札幌より少し南にあるニセコ高原を訪れ水客君が見つけた昆布温泉、山の中には珍しい名だと泊った宿はそう小さくもなかったが、古びて修理も行届いていない建物だった。しかしお湯だけは豊かで岩に囲まれた浴槽も良かった。その岩風呂に勢いよく飛び込むと先客が居た。白髪の美しい老婦人である。びっくりして出ようとすると、

「まあまあお客さん、よくいらつしやいました。毀れかけた宿ですが、お湯が自慢で」と言いつつ湯の落ちる岩間を指して案内してくれたのは宿のお内儀で、七十に届きそうなお婆さんだが、愛想のよい微笑について誘われて混浴と洒落た。聞けば息子さんを戦争で亡くし後を継ぐ者もないので、店を閉めようと思いつながらも来て下さるお客さんとの対話が生甲斐でつづけていると、淡々とした中にも昔気質の一途さを見て語ってくれたのが忘れることのできないものになった。

苗香の花……………	八木千代選……………	(80)
初歩教室「弾む」……………	吉岡美房……………	(82)
「齒」……………	村田善保選……………	(84)
一路集「ビデオ」……………	宮本欣史子選……………	(84)
「はさむ」……………	竹治ちかし選……………	(85)
平成五年度 一路賞……………		(86)
各地柳壇賞……………		(87)
各地柳壇(佳句地十選/奥田みつ子)……………		(88)
■川柳「ほれ話」「川柳と映画・演劇」……………	田中正坊……………	(101)
三月本社句会……………		(102)
松村迷親子氏を偲ぶ……………	木村あきら……………	(106)
柳界展望……………		(107)
四月各地句会案内……………		(108)
■編集後記……………		(109)



座右の句

きつと来る春へみの虫ぶら下り

(宵明)

私の句

同じもの食べても妻はおいしそう

片上明水

青森の工藤甲吉さんに教えてもらって訪れた小泊は、津軽半島の北端で山を挟んで竜飛岬がある。最果てにしては明るい漁村で、最近、掘り当てた温泉もあり、太宰治の乳母が住んでいてよく訪れ、小説の中にも書いたというので港の隅で烏賊を焼いて売っていた老婆に聞いて見たが知らぬと言う。代りにさっぱり判らない津軽弁で人なつかしようにいろいろ話してくれたが判らなかつた。売れそうもない烏賊をいかぶすまを背にして焼いている姿を見て流石に遠くへ来たもんだと思つた。鯉節で名高い九州の南端、枕崎からバスで三十分の所に坊ノ津という山に囲まれた漁港がある。入り海になっていて坂ばかりの港町だが、非常に美しい。旅行案内書に「昔海賊が住み、密貿易が盛んに行われていたが、今でも面影の残っている家があり、頼めば当時の資料を見せ泊めてもくれる」とあつたので探して訪れると、留守を預かっているという品の良いお婆さんが出て来て気さくに泊めてくれた。いくつも部屋のある二階建だが、凡てが薄暗かつたので成程、海賊の住家だなと思ふ。突然の客なので食事には近所のおばさん達も手伝い、出された魚料理は新鮮で美味だった。夜、暗い灯の下で書物の遺品を見せてもらったが、別に明治以来の文筆家も興味を持って訪れたことが楽書帳に書かれてあつた。海賊の後裔とは言え、代々受けついで守つて来たお婆さんの顔の皺に過去を秘めた、かたくなな気品が漲っていた。

# 川柳塔

## 西尾 栞 選

香川県 故松 村 迷観子

幸せは還暦を過ぎ父とよび

爪ばかりのびて病勢はかどらず

百歳で花を咲かせる人もある

もつたない言葉が死語にならず生き

伊賀上野 芭蕉スパイを劇で知り

有難し三度の食事は有難し

米子市 林 瑞 枝

雪しんと森のほこらに絵馬を吊る

樵の巨木の森は少女を匿った

藪椿に恋して森が抜けられぬ

わたくしの火宅を守る姫の森

春なれば胸の森にもサクラサク

醸造みそ森のシヨパンの曲が好き

十和田市 斉 藤 荔

あくまでも白にこだわる雪が好き

高校は舞の海関出たところ

雪のんのんハウス苺はお人好き

今年こそ実ってみせます種子を選ぶ

少年の祖父で煙草をとめられる

孵化場はうらうらうらら春雛よ

日を追って娘が遠く遠くなる

右派と左派 日により夫婦入れ替わり

腹立つと食べない兄に食べる姉

恥ずかしいところを犬に見られたり

説教の好きな八百屋が好きで行く

怪我したと思う出費がたてつづけ

根雪にかかるくノックしている路の臺

あるときは自惚れ鏡に励まされ

母の知恵ちよいちよい便利な小引出し

長旅の終りにやさし母の郷

丁寧にあ拶されてフト淋し

ミニ缶ビールの飲み友達も出来て春

大阪市 本 間 満津子

竹原市 小島 蘭 幸

少しずつ広げる僕のテリトリー  
赤鬼になる一杯の酒である

ほっとする バレンタインのチョコが来ず

十二時が鳴ると元気が出る詩人

いつまでも良い子でいつまでもひとり

富山市 舟 渡 杏 花

ちよつとしたコツに騙されほとけ様

ドレス脱ぐ一途わかつて欲しいひと

失意の夜 あけすけの猫の恋

猫撫で声に飼ひ慣らされてゆくわたし

黒髪の男を過信する勿れ

大阪市 西 出 楓 楽

よよと泣く芸持つおんなには勝てぬ

金で済むことでかえつて難しい

母はまた出掛けるらしいカレーの香

糞虫の知恵も頂戴する同居

字余りも字足らずもある主婦の日々

下関市 石 川 侃 流 洞

陣笠で押し切るファッショ怖くなる

残業は屋台と妻の目よく見える

妻と娘の話題へはかない僕の位置

忘れましようの台詞で橋が渡れない

会者定離 椿が音もなく落ちる

鳥取県 新家 完 司

わたくしを隠してくれる雪が降る  
死んだ犬の舌のぬくさを思い出す

塩分も女遊びも控え目に

悲しいことも嬉しいこともないが酒

君知るや田舎の夜のまっくらけ

倉敷市 小野 克 枝

熟年のスタート亀の心意気

二つある答を抱いて迷い道

どこまでの仕度か母の長い帯

嘘ませて仲をとりもつ老婆心

出無精と惜しい一日閉じました

松江市 舟 木 与 根 一

半分は共に歩んだ八〇〇号

外米をいけるいけると言い過ぎる

隣より大きな犬を飼ってやる

まる腰の母を一番頼りにし

のんびりと休耕してます露のとう

松江市 柳 楽 鶴 丸

書初めに書くのが本当の年賀状

粗大ゴミの正確な腹時計

ダルマ百態 僕に似た顔もある

蛙のジャンプは昔と変らない

受験生月月火水木金金

米子市 林 荒介

耳底に水音がある里の森  
ジャンプしてそれから探す着地点  
妻が居てお袋が居る僕の部屋  
それぞれに鬼を大事に飼っている  
門灯を消したらははが帰れない

笠岡市 松本忠三

真剣に好きと言われた七十五年  
年寄の僻みわたしもその一人  
天下り役人風が吹き荒れる  
一厘がどうにもならぬ九分九厘  
子供の日何故父ちゃんも休めるの

藤井寺市 吉岡美房

落ちてなお激しく燃える寒椿  
善人で春だ春だに騙される  
節分の鬼がけなるい鬼瓦  
熱燗が相手独りの愚痴を言う  
晩冬と言わず春待つところろ文

鳥取県 土橋 螢

鶯と母の内緒を聞いちゃった  
しりとりがまだ終らない鶯よ  
涙腺が脆い女の封建性  
友だちに泊れとまれと雪が降る  
年金の額を比べている姉妹

豊中市 田中正坊

年にもう不足はないと言える歳  
年の功 見えないものが見えてくる  
父はまだ手捲き時計を持っている  
年寄りだから新しい服を着る  
消去法 消し忘れてたわたしの名

豊中市 安藤 寿美子

火をついでついでロウソクの歴史  
ともし火を一つ消してる寒の雨  
大阪の雪はびしよびしよと積る  
大阪の雪掻きちり取りで足りる  
くらがりで思い出せない合言葉

奈良市 天正千梢

きた狐 観光客に馴れきって  
神々の遊ぶ山なり大雪山  
精進いいのか阿寒湖晴れ渡り  
男臭い津軽三味線に酔っている  
雪つもる吊橋渡らねばならず

堺市 高橋 千万子

種袋中には背く種もあり  
付合いで来て退屈なプログラム  
先入感思わず電話きき違え  
さじ投げた医者にうなずく今日が来た  
邪魔者へ勇退と言うほめ言葉

堺市 板尾 岳人

父の樹にもたれ俸せだと思ふ  
悪戯がとっても好きな花吹雪  
涙もろい父の器が欠けている  
火の海にいつでも入るのは女  
薄い影 鳩尾あたりから消える

西宮市 奥田 みつ子

さりげなく栞はさんで返す本  
戻り寒老母の風邪声気にかかる  
ハチローの詩集ほのぼの母句う  
今年こそすこしうしろ太い縄をなう  
騒がしい風だ噂をしているな

島根県 小砂 白汀

ブライドが扶養家族と書かせない  
鬼瓦 春一番の笛を吹く  
海は春 鰯はすでに瘦せはじめ  
妻もまた老いたり毒舌聴き流し  
黄砂まで運んでおいて雪二尺

東大阪市 森下 愛論

乾杯のコップにスピーチ長すぎる  
やきとりの匂 鶴橋駅で下車  
輸入米酒になったよ舶来酒  
有終の美と申します肩たたき  
倦怠期あつたかいなと忌を迎え(亡妻七回忌)

今治市 矢野 佳雲

男として推されて渡る丸木橋  
わけ言えというから嘘を考える  
他人様の靴を揃えて置いて脱ぎ  
正直に生きて脱ぐもの何もない  
寝てる妻起こして音がせなんだか

美禰市 安平次 弘道

仮の世と悟ってみても金が要り  
葬列や来世のことは思うまい  
善人の真似がしたくて花をかう  
求人率下がると増えるホームレス  
ガン告知 神が数える持ち時間

廿日市市 林野 甦光

春の湖に浮世離れた貸ポート  
花のある道をスキップして下校  
うしろ指恐れていては歩かれぬ  
遠回しに言い訳してる女癖  
恋人の待つ玄関で蹴躓き

島根県 堀江 正朗

雨音に負けまい僕は点字打つ  
戦盲も春感じさす庭の風  
感謝して追ってる音に妻がいる  
戦盲を笑って耐えることに慣れ  
いちにちを真つ暗闇の日の長さ

島根県 堀江芳子

八〇一号 初心に還れと諭されて

耳鳴りの中から掬う春の音

旅ごころ わが家の湯舟溢れさす

酒減って年かと思ふ夫見つめ

二三步をさがってほめる犬嫌い

京都市 都倉求芽

「母」の披講涙押さえて聞いている（八〇〇号記念大会）

真四角に座って眼鏡光らせる

ルビ振ったように仕事かゆきとき

読ませたい人は読まない投書欄

楢山への地図継ぎ足して継ぎたして

伊丹市 榎谷寿馬

柁に鯛を刺した人の業

ボウダラの味に千二百年の京都

寒鰯の脂を妬む鯛と烏賊

写経する心経の字にある狂い

誇らしげな宅急便にある驕り

松原市 小池しげお

他人さんに決めて貰った齢にする

まだ僕の名前が残る設計図

妻だから言いたいだけを聞いてやる

走り書きみかんが一つのせてある

牡丹雪 酒の肴はなくてよい

奈良市 宮口笛生

大物になるだろうまい嘘をつく

人生にリーチかかってからの日々

何曜日関係の無い人となり

旅にいる老人会は金持ちで

町になりそれから雪が積もらない

尼崎市 春城 武庫坊

大会が終り日足が伸びてくる

祈願するお不動様を持つつらら

回り道やっぱり温い風に逢う

カタカナ辞典にまだ残ってる夢さがす

冬木立背にライバルと握手する

尼崎市 春城 年代

眼底に万華鏡見るまか不思議

捨てることに専念しても荷が重い

手袋をはめると本心影もない

公園の樹がおかつぱをゆさぶるよ

なだめすがめつ私の眼に棲む阿修羅

倉吉市 奥谷弘朗

念願の窓で春の足音聞いている

人間も悟りすぎると馬鹿になる

迫力の点で合格点やれず

慌てずに腕を組んでるへそ曲り

幸せを他人にあげる人に成る

堺市 楊井二南

寢屋川市 稲葉冬葉

軽口をたたいて急場凌がせる

夫婦仲 一言半句も出ない姑

右顧左眊寄る年波は争えぬ

申し訳ないほど似てる孫の顔

にっこりと構えられては手が出ない

愛玩犬抱いて眠りを深くする

救急車助けの神の音で来る

同性と合わぬ女のプロフィール

迂闊さが後の祭りのレントゲン

ばついちの娘に笑顔返り咲く

和歌山市 福本英子

大阪市 河井庸佑

美しいお辞儀をくれたスニーカー

敵にだけ回したくない人がいる

口癖の勿体ないでうとまれる

切替えの出来ぬ頭を疎まれる

怒るのを止めて人間失格す

利口振り馬脚を出しただけのこと

でこぼこの芝生へ雪の思い遣り

こだわりがこんな話こじれさせ

歳とった分だけ増える旅仕度

裏腹な格言ひとり悩ませる

八尾市 宮西弥生

熊本市 永田俊子

上役の手が届かぬ仕事をする女

一生を走り続けて芽が出ない

三月の花束軽くはない赴任

陽当たる日待つ葉牡丹の渦の芯

まわり道 近道などして春の道

札束で消す大物のスキヤンダル

若者に一步二歩ゆする不整脈

ぬるま湯の中で反旗の色が褪せ

ふりむけば老母はいつも祈りもつ

疑心暗鬼のぞき眼鏡を持っている

大阪市 津守柳伸

高槻市 川島諷云児

竹多彩 鈴虫寺のお説教

仮面などいらん親からもろた顔

積雪が誘う旅情の兼六園

ああ不運天の試練と受け止める

竹筒の酒しのばせて露天風呂

何時までも明日がある気でした不覚

豪雪へ話題豊富になる湯宿

晴耕雨読 田辺聖子の本が好き

健康が取り得て花のスケジュール

すいとんを知らない嫁と住んでいる

名古屋市 越村 枯梢

これがわたしです 化粧落して三面鏡  
齡という相手と四つに組んでい

落日や今日もわたしを積み残し  
ちぎれちぎれのいのちつないで傘寿

餓死もよし 腹中きれいにして置こう

砂川市 大橋 政良

プライドのぼろぼろ落ちる髪を梳く  
雪は嫌 嫌と雪国出られない

悪玉の偽装している糖衣錠

おとぼけの色を溶いてる絵の具皿

つぎこぼす酒から嘘の匂する

松山市 白石 春嶺

新聞が日暮れの便で着く離島

買い替えをのばす我慢がいま美德

分校にさく入入学式がない

尊厳の森から神の水が湧く

お隣へ付かず離れず丸く住む

松原市 玉置 重人

涙腺の弱さ善人だと思ふ

来世紀視野に入れてる万歩計

権謀術数 自分の足を食べている

婦唱夫随おんなじ薬飲む食後

舶来のコメでごはんが光らない

寝屋川市 江口 度

ブルドッグだけがにつこりしてくる  
職安に旅の話は落ちてない

美人には信用されている鏡

心まで見透かされそな鼻眼鏡

犯人をほくそ笑ませるモンタージュ

米子市 石垣 花子

夫の忌を覚えてくれている花茗荷

沖の絵に光って見える夫の汗

住みついた猫が寝そべる無人駅

草笛で老人会は赤トンボ

笹竹の嘘に空しさだけ残る

米子市 田中 亜弥

笑いこらげて若さ一つを取りもどす

母の背に大きいコタツしてあげる

老妻へ愛のひと言いいもらす

神さまのおこぼれ酒を回し飲む

五分五分の嘘で極楽にも行けず

米子市 野坂 なみ

パスポート 夫より親友を連れてくる

日めくりの分厚いうちに旅しよう

亡母に逢えば花嫁からの話する

冬籠りされど耳目のフル回転

万両がたしかに今朝の赤い雪

米子市 青戸田鶴

真冬日がゆるみ肩から力ぬけ  
季節はずれの音でもぬくい冬火花  
ジェラシーがたまる鏡の裏側に  
稜線が霞む黄砂はここまでも  
生きている限りがらくたよくたまる

米子市 寺沢みど里

旅かばん持てば波立つものがある  
幼子に嘘の尻尾をつかまれた  
眼鏡わすれて自分のメモが読み取れぬ  
卒寿越す母のうつろも慈悲だろう  
早春を揺する多情な雪の嵩

米子市 政岡日枝子

驚くほどの事件もなくて雪つもる  
驚きは案山子が一番ひどかろう  
漬樽に驚く早さで季がめぐる  
幕が上がるとみんな主役の顔をする  
どんでんがえしの刻を幕はみのがさぬ

米子市 菅井とも子

魅せられた人を冬山帰さない  
赴任地で友に恵まれ老いてゆく  
白米に慣れ外米に身構える  
桜桃の土産炬燵に届けられ  
一人旅自信無くして辿り着き

米子市 澤田千春

踏まれてる雑草に陽ざしがあつたかい  
今日も雪 亡母にかけたい糸電話  
背筋伸ばせと今日もきびしい父の風  
追伸を酒の力を借りて書く  
蛙の子めがね替えても蛙の子

米子市 新正子

国会のまだまだ若い民主主義  
悪いもの見たかも知れぬ目を洗う  
兄ちゃんと言われて我慢させられる  
蟻である証に靴がちびて来た  
この角を曲ると分かる夕ごはん

米子市 川上より子

春を懐に雪しんしん見ています  
お人形ごっこのように孫の世話  
短くもぬくもる夜の雪見舞  
プライドよお前は大切な杖だ  
スカートの短い頃が花の候

米子市 光井玲子

海峡を越えて旅人蝶になる  
老樹なお火の粉を防ぐ心意気  
百合に似たくて背伸びするニラの花  
ふだん着で本心だけで生きている  
もう無理はするなと亡母の声がする

臘梅と深い約束して初春に

米子市 白根ふみ

おだやかな大寒ふとん干しそびれ

鬼も福も一人で仕切る豆の数

ひとねむりしたらいたずら心湧く

健保料払うばかりで有難い

米子市 中井ゆき

おぼれぬようわらを一本はなさない

サンマルコ バッグ押えて肩のこり

沈丁花 知らない路地に誘われる

夕ぐれをポチの尻尾についてゆく

長すぎる袖をうっかり編んでいた

米子市 茂理高代

無意識のうちに受け身になっている

ときめいているのに誰も気が付かぬ

俄雨 私の余生狂わせる

逢いたいと電話の声も春や春

雪の夜の一灯残す塾の子に

米子市 金山夕子

亀がだす力だあれも見えていない

不況にも強い女のアイディア

ばかばかりしい嘶求めて裏街へ

光らない血筋で揺れるイヤリング

砦のそばに犬も小鳥も居てくれる

焚火する何か思いを伝えたい

青森県 田中叶

他人事のようにワイパー動くよに

逆らわず首のほくろを見えています

父であることにうつつすらとつもる雪

トイレまで聞こえる妻と娘の笑い

弘前市 村田善保

母と子の対話が弾む兎小屋

退院の夢へ千羽の鶴も舞う

温かい嘘で病床励まされ

補聴器で余計な噂聴いてくる

言わないで良かった本音抱いて寝る

弘前市 蒔苗果林

カーリング雪のゴールが笑い壺

蘭玉と亡き子と遊び夜が更ける

何気ない妻の話ももう春で

鯨のよな噂叩いてから放す

鏡見て作った笑窪夫を待つ

黒石市 相馬一花

子が親に甘えて親も子に甘え

豪雪にコレステロールまで食われ

男性に彼女一人が何故もてる

嫌な奴来ると糯藁着せて褒め

丹精のリングゴについた最高値

旅立ちを迎えて悲し別れ雪

弘前市 小寺花峯

この指に止まる子供が見当たらぬ

雪の降る夜でも僕は泣きませぬ

浴槽につかつて結論もてあそぶ

妻の背を見て耐えること知りました

弘前市 岡本花匠

無器用で波に乗れない男の譜

以心伝心 波乗り越える夫婦舟

さくら波に酔うとき遅い北の性

振り向けば愚かなことよ胸算用

老眼鏡行方知れずの笑い種

十和田市 阿部進

バイトする妻にきびしい不況風

火も凍るような寒波がやってくる

金よりもっと大事な妻が居る

潮焼けが海の男の誇りでず

抱きしめてやりたい人は他人妻

五所川原市 對馬一閃

着こなして黒を素敵な色にする

胸たたくほどに力も金もなし

口癖は出世してやる泣上戸

抜擢のライバルにある底光

歳月が恩讐越えて再会し

まっすぐに見つめるだけの雪だるま

やるせない葉書一枚雪しんしん

ポストまでやたらに雪が降り積る

雪帽子朱の欄干のラブひとつ

雪吊りの枝のせつない物語

黒石市 千葉風樹

畦道を真つすぐ駄へ歩いてく

縦糸を静かに落ちてゆく枯葉

朽ちてゆく案山子の齢はまだ四十

外へ外へと吹き出したがる血小板

稲の花まだまだ愚痴は言い足りぬ

弘前市 浅田隆樹

一日がこんなに速いひげを剃る

酒断つと亡父が夢に現われる

目にゴミが入る合格発表日

本当に好きなのはチョコも渡せない

雪景色 昨夜の君が嘘のよう

十和田市 小笠原敏人

窓に降る雪は絵になる詩にもなる

この冬は寒さと雪の返り咲き

この空は津軽は雪と読める人

除雪車のオペレーターは風邪も除け

しんしんと詠んでるような雪でなし

弘前市 中山雅城

核家族 犬は横座に鎮座する

良心得買って下さい無人市

上層を狙えば地下に落ちて来る

名産は地元の口に合っている

月からも見える名所の桂浜

弘前市 一戸ツネ

おしゃべりな鴉に厨のぞかれる

他人の通夜 吾に重ねてかしこまる

豪雪がシベリア弁で落ちてきた

人情に溺れて泣いた真人間

家家の愚痴をからめた軒つらら

大和高田市 岸本豊平次

歩きつめた人生をまだ万歩計

老妻のスーパまでの万歩計

托鉢の草鞋の素足に舞う小雪

三寒で霜やけ四温でむず痒い

楽しみはひとりで山野歩くとき

西宮市 門谷たず子

初節句の客によばれる桃の花

囲まれて母という名の有難し

心も骨も乾いて寒の水うまし

親離れ子等には子等の春休み

ポシエットに詰める不安とパスポート

姫路市 人見翠記

法隆寺斑鳩の里は賑わえり

四十年昔の着物が似合う齡

水仙もヒヤシンスも土を割る

ためられて盆栽育ちの人悲し

沈黙が嫁の心を動かせる

高石市 浅野房子

六十からの手習い趣味の域を出ず

水車軋みながらも波静か

厳しくて少し華やぐ春の雪

こりもせずラストチャンスを待っている

春うらら昼寝の果ては不眠症

大阪市 大塚節子

大ゴミ日やっぱり何も出せなくて

ランドセル靴も揃った春よ来い

駆け上る二階でハタと何をする

遠い海から来た蛤よ雛の膳

餅の名も桜 鶯 母の忌よ

寝屋川市 岸野あやめ

喝采を浴びた日からの芸の虫

遣い方知らねば毒になるお金

角界は世間の狭いところらしい

憂い抱き黄砂の中に佇ちつくす

本家には言うに言えない貸しがある

宝塚市 丸山 よし津

疲れ切ったポストを洗う春の雨

残り布の中から亡母が顔を出す

開き直って老いと向き合う年になる

何気ない言葉に含む毒の針

コンピューターで動くビルにも朱の鳥居

島根県 西村 早苗

すき間風ことごとこと何か煮え

春陽気ひとときを酔う絵画展

何回も聞かすその愚痴母も齢

遠くから見るものそれは造花です

風さやか春のロマンの独楽となる

島根県 榎原 秀子

雪分けて掘った白菜鍋の味

土曜休業またもうっかりけつまずき

聞き上手になるより他にない話

この溝を埋めたらのんびりゆける道

掃き寄せる今日も昨日も落椿

出雲市 尼 れいじ

深呼吸たまにはしたい笠地蔵

景気良い話にのるなとヤジロペー

あの雲は私が吐いた溜息だ

爽やかな朝を救急車が走る

外米に混じるかも知れぬ榎を蒔く

出雲市 吉岡 きみえ

いい人と仲良くなってカルタ取り

野地蔵をふたりで拝むご縁坂

母さんの部屋でくつろぐかつぼう着

小寒 大寒 暦通りに雪が降る

今に見ろいまに見ている樹が育つ

出雲市 園山 多賀子

平均寿命越し体調が狂い出す

五年後の約束にあるとつおいつ

なんのなんの百歳までの余命表

深読みをし過ぎて橋が渡れない

懺悔録みたいな自分史書いている

島根県 松本文子

ハッピー着て町おこしにも駆り出され

友の忌に花のごとくに雪の舞う

ほろほろと酔うて禁酒は考えず

眼鏡の奥からあの人が消えた街

吠えなくなつて人間嫌いになつた犬

出雲市 久谷 まこと

満ち足りているから今日もお腹空く

はじめから疑っている尖つた目

また一つ捨てて戻つた欲の皮

幾度のチャンス掴まぬ無精者

悔しさに握つた拳どう晴らす

出雲市 石倉 芙佐子

白い巨塔に売られていった花畑  
乙女座の愛が負担になってくる  
春の風おとりに使う虞美人草  
縄抜けをじつと見ているお月様  
うちの娘も一人娘のかぐや姫

鳥取市 岩原 喬水

身に沁みる情け老骨よろめかせ  
潔白な俺とヒラメの腹白い  
ハラハラの親にかまわず子は喋り  
色即是空ヤッパリ金の欲ぬけぬ  
窓際で無駄な努力はせぬ欠伸

出雲市 板垣 草丘

雪かきをしても新聞だけの日も  
職安のやりとり切なさそうな妻  
手紙書く八方美人のくだりあり  
夏みかん皮さわやかな揮発性  
いとこ会これぞ原住民だと思ふ

出雲市 竹治 ちかし

亡父までは生きる予定の青写真  
気付かない暮らしの音を知る病  
お互いに折れてくれれば許す胸  
子の居ない家に残っているローン  
憧れた自殺もせずに健康茶

出雲市 島 祥庵

制服を着れば時代に疎くなる  
治そうと努力をしてる胃の病  
下駄の音隣のじいさんやって来る  
お悔みに来たのに尾を振る犬がいる  
じいさんですつと生きたい皮ジャンパー

出雲市 岸 桂子

振り返る答の出ない橋ばかり  
母に出す手紙優しい字をえらぶ  
ポケットの石が邪魔する子の昼寝  
砂に書く唯それだけの愛だった  
男下駄 主は戦に行つたまま

出雲市 伊藤 寿美

ビデオから亡父の軍歌を聞く法事  
子が戻らぬ過疎に今年も梅が咲く  
妻の愚痴ゆらゆら聞いている柳  
終章のパズルが一つ見つからぬ  
ピエロになる人がいなくて揉めている

島根県 佐々木 鳳笙

落人の哀話が絡むかずら橋  
五木でも寝ず赤城でも寝てくれず  
体温計振ってやっぱり行く仕度  
暮れなずむ野良梵鐘のタイムミング  
鍬の柄が過疎の夕日へ黒く立ち

大年の飛躍へ歩幅整える

鳥根 加本 義良

ワntenボずらし余生を焦らない  
孫が跳ねセーターが跳ね雪が舞う  
椅子とりが下手で役から降ろされる  
出世せぬ犬が遠吠えばかりする

鳥取 松下 かつみ

何かある男が一人昼の酒  
輝きが消えないうちに啖阿切る  
嘘ひとつ不治のカルテを慰める  
雪あかり風が童話を売りに来る  
輪の中でなかとばすの細い影

鳥取 両川 洋々

これ総理 君も外米食べてるか  
パンサイヘタルマお前も泣くがよい  
ゼネコンの金庫も空だ不況だな  
相打ちは覚悟解散してしまえ  
雪おんな喜ぶ雪が降り止まぬ

鳥取 林 露 杖

立春や銚子二本の誕生日  
白梅にとおき怒みの悔いおもつ  
深々と地蔵の膝に雪が積む  
裸木の月の雫を抱く眠り  
七回忌亡母への手紙書けぬまま

倉吉 野中 御前

寄せ鍋だ肩の力を抜きなはれ

鳥取 土橋 はるお

胃カメラの結果に内緒つきものだ  
知らぬが仏 外米を食べている  
焼酎を飲んでなんにも考えぬ  
焼酎党の総裁がつとまらぬ

鳥取 江原 とみお

男の顔だ小細工はしていない  
ぬるま湯でよからぬ事を考える  
安心は地獄の沙汰をきいてから  
骨董屋の芸術論を拝聴す  
神さまに変わって酒をのんでいる

鳥取 羽津川 公乃

努力した答を持って卒業す  
起床ベル鳴ればまどろみ深くなり  
犬公方も顔負け狂喜ベツト熱  
夫唱婦唱たのしく喧嘩やっている  
酸欠の不安はないが寒い家

コシヒカリの列へ昭和史を手繰る  
明日は明日三面鏡をよく磨く  
檀山へあと十万歩あるだろう  
羽根ぶとん深く沈んで鳥になる  
これ以上怒ると山が動きだす

鳥取県 山根八重

炒り豆の花の命をいとおしむ  
コーヒーの豆から恋が芽を伸ばす  
不作でも手にはしっかりと肉刺ができ  
不器用な女が通る七曲り  
この坂を越えたらきつと春になる

鳥取市 西原艶子

雌ばかりだったと知らずインコ飼う  
バーゲンと見えないように晴着着る  
くちびるの寒い日歌をくちずさむ  
心臓が母の命を奪いそう  
咳をする日にも逢いたい人のいる

鳥取市 美田旋風

あいまいに答えて味方また減らす  
あの女によく似たコケシばかり買う  
お役所で仮面を脱げば叱られる  
遅咲きの花はわが家に向いている  
六法をかじると勇氣出なくなる

鳥取県 幸家單車

部下のない私は犬を供に連れ  
目的も結果も知らぬ影法師  
専門は博士 常識音痴です  
少女の胸に可愛い内緒秘めている  
仲良しの姉妹恋人うばい合っ

鳥取県 鈴木公弘

詫びて済むことなら詫びる子の育ち  
悪い噂は先に流したほうが勝ち  
ゴリラではないです僕の写真です  
不景気な風に押されて飲み屋まで  
寒いから背中に宝くじを貼る

和歌山市 堀端三男

陽溜りで吹雪のテレビ見る紀州  
自己反省尾振る犬でなかったか  
旅立ちへ老母が選んだ陀羅尼助  
三步前進二歩後退の処世術  
ライバルより少し高価な品を選ぶ

和歌山市 垂井千寿子

子を救うための勇氣は溜めてある  
妥協せぬ勇氣が一人部屋の隅  
焦点の合わぬ眼鏡で嫁を見る  
春の音溢れて母の電話口  
優しさだけ似ればと願う雛祭る

和歌山市 木本朱夏

灯をともし寒いおとこの肋骨へ  
身の上が似ている寒い肩を寄せ  
若いというただそれだけの武器がある  
楷書から草書へひとを変える酒  
一杯の水のうまさよ旅終る

和歌山市 松原寿子

うすいてのひら受話器の余韻だいて満つ

走る血がおさまってより筆を取る

一途だからきつと哀しみ澄むだろう

まぐれでも叶う約束皿に盛る

心に灯を点す言葉へ賭けてみる

和歌山市 桜井千秀

正当防衛 口では口で応えよう

歯に衣を着せて話が噛み合わぬ

痛いほど自分抓ったことはない

先々を勘繰り出口塞がれる

道具屋のおっちゃんどこも仏頂面

和歌山市 福井桂香

莓大福うわさ話などしよう

脚色のうまい女にくたびれる

よく吠える犬から先ずは手懐けて

まつ青な空へ言う事なにも無し

よく光る眼をいつも鍛えねば

海南市 三宅保州

見たとおり描いても名画にはならぬ

村長もサインもらっている女優

火鉢にも余生があつた植木鉢

見逃しの三振だけはしたくない

酒ちびりちびり仮面が溶けてゆく

阪南市 坂口公子

突然でがたがた震えてる朗報

一步退く勇氣と一步出る勇氣

この辺で鳴いても見たいいほととぎす

一駒へ溜息つかすいぶし銀

身ぬぐいをすませて軽し春の船

有田市 松井かなめ

吠える吠えない犬は相手を見て決める

後家の相言われ四十路を夫婦する

ストレスの解消法にバッグ買う

入会したて役押しつける老人会

その場限りに言うたつもりが当てにされ

和歌山市 宮口克子

さり気なくさり気なくすることがコツ

本筋に入る区切りの熱いお茶

その前に誰か忠告しておれば

生かされて生きて迷わぬ方がうそ

迷う事ないはず多分未練だね

和歌山市 田中輝子

泣き止んで綺麗な面をとり戻す

誓詞読む性善説を信じてす

消極的になると冷たい風の向き

淋しさ哀しさひとり芝居にもう飽きた

激しさを過去形にして語っても

和歌山市 青枝鉄治  
無記名へたつぷり本音書いておく

白旗を気楽に振って無位無冠  
吐すえて貧乏神と手を握り  
素うどんを注文すれば念押され  
玄関の靴が躡を言いふらす

和歌山市 山田高夫

華やかな夢は未完のまま終る  
騙されておこう許せる範囲なら  
飯の世と思えば楽に生きられる  
聞く耳はもたぬと父は聞いている  
子へは母 夫へ妻を盛り分ける

和歌山市 細川稚代

氷点下ぬくい手紙をふところに  
病床へ訃報を告げにゆくつらさ  
小半日遊び相手をして上げる  
一通話の電話心凍らせる

広島県 田村新造

稜線が燃えてでっかい陽が沈む(興安嶺逃亡記)  
鈴蘭の丘逃亡の群れつづく

馬ばらす手付きさすがは元砲兵  
六月の大地 馬鈴薯まだ食えぬ  
目には目で逃けた報いの銃殺刑

広島県 藤解静風  
川柳塔も妻も私も同じ齡  
寝がえりを打てば隣も咳をする  
独り食う飯は独りの味がする  
太っ腹とみるか頓馬とみるかだが  
終止符はゴミの袋に詰めてある

竹原市 森井善居

以下余白 敵には知られないように  
会者定離 白いハンカチ何時も持つ  
チャレンジの日々 若者にまだ負けぬ  
生きざまのすべて閻魔に見て貰う  
春そこに負けてはおれぬ冬の戦

呉市 横田英詩

蓮の花泥を嫌って咲けますか  
峠道今度は老母を負う番だ  
晩酌が待ってる道草せず帰る  
大きめの祖母の財布を覗きこむ  
男なら女難の相と言われたい

竹原市 時広一路

雨雲がとても嫌いな万歩計  
一日は一日夕暮れもう近い  
平凡な幸せ影法師が二つ  
楷書しか書けぬ私のジョークです  
評判の味と合わない僕の舌

兄弟姉妹 年経る毎に密になり  
竹原市 岡本清水

名前負け福寿多市で恵まれぬ

厳冬も果樹黙々と春仕度

リゾート発進 村変貌の道拓き

生活に期日締切りある活気

竹原市 石原淑子

泪ポロポロ 北風さんのいじわる

悪魔君 親の重さを想うなり

好きなこといっぱいして欲し夫の靴

積む雪やメルヘンの国芋囲い

春風に押されてハードルとびこえる

竹原市 岩本笑子

進化論 夫の頭が薄くなり

ホップ ステップ ジャンプ 青春真つ只中

枯葉一枚流れる川のあるかぎり

灯台の真正面にある夢だ

同姓同名御近所同士妻同士

倉敷市 田辺灸六

耐えてこそ亀の歩幅にあるゆとり

人を知る前に自分を知るダルマ

較べてはいけない人にある運命

疑心暗鬼肚の底から笑えない

童心は鎮守の森に置いてある

竹伸びるうれしいことを節として  
岡山市 川端柳子

笑い方あだこうだと学んでる

このとしになってと思うことばかり

優しい手紙プライベートにも触れてくる

残雪や元氣印の義弟逝く

岡山県 山本玉恵

落葉焚くだあれも寄って来てくれず

子蛙の望みをきいて呆けられず

つつましく生きた小さな母の背な

まだ命に未練が有って竹を踏む

老いの絵皿にとかし足りない夢の彩

岡山県 小林妻子

立ち往生ばかりが続く拳骨だ

正義感ばかり拳骨主張する

男泣きする拳骨もあるだろう

拳骨よそろそろ歳を考えろ

時どきは拳骨という置き薬

岡山県 矢内寿恵子

煩惱を捨てると温い絵にはまる

家中の和音父居て母がいる

ありったけ灯点してひとり居る

歳月や傷つけ合うて生きている

オクターブ下げて平和の輪にとける

悔いひとつまだ返されぬ恩のこる  
岡山市 井上 柳五郎

助言され女の知恵に怖さ知り  
長幼の序 句座にもあるを胸しまう  
てっぺんの風は弱音しゃべらない  
老化する自慢のように語り合い

岡山県 萩野 鮫虎狼

踏み台になって満足そうな父母  
自分史に美談を一つ書き加え  
肝心な所が消えているページ  
失業の僕にバイトの妻が居る  
ワープロの字に本心が見透かせず

岡山県 岩道 博友

完走は年末来るまで妥協せず  
不人情 車内で失言大き過ぎ  
目立たない隅っこに居た努力賞  
友情の酒と一緒に春探す  
一善の法話の後でカラオケす

岡山県 池田 半仙

尺貫法 明治の脳の複雑さ  
健忘症昨日期限という不覚  
鳶が舞う何を探るか雪の原  
損得は無視真実を主張する  
黒眼鏡変身用具かも知れず

如月の梯子を昇っていく素足  
岡山県 嘉数 兆代賀

川底の石もチャンスを狙ってる  
良妻賢母のかたちで五十年過ぎた  
世渡りが下手で神さま仏さま  
いぶし銀になって逝きたい終の旅

八尾市 宮崎 シマ子

梅満開駅舎のストープ消してある  
頼まれ仲人引き受けるのは梅の頃  
二階にもミシリと音がして朝に  
夢の中 亡母の子供でいる私  
いとしさ口惜しさで見る母の老い

八尾市 山下 美津留

よくはずむ毬親切の輪を広げ  
鉄骨が明日を变える空へ伸び  
保険証のコピー送れとスキー場  
塵塚を除くと古代甕り  
芝居だと気付いた妻に噛み付かれ

八尾市 高杉 千歩

夫婦だなあ風のように通じ合う  
亡母逝きて瀬戸の大橋遠くなる  
よく曇る眼鏡二つで生きている  
土日連休 明日へのばそと言うとれず  
迷いみち野仏さまにもうとまれる

八尾市 吉村 一風

母の国知らぬ夫も子も孫も

じつくりと今日振りかえるひとり酒

春一番幸せの種土へくれ

冬の虹妻に呼ばれて外へ出る

熱爛はいいなあ父と子の話

大阪府 靄山 隆

キリストに叱られそうな夢を見る

残菊の二つ寄り添うフルムーン

傷心の友に戻ってきたジョーク

ときめきがつづく新刊書をひらく

男性の領域内にいるつもり

八尾市 片上 英一

受験日を明日に控えた夜の母子

出離子にのって華やか高座の灯

夢の中となりは無論妻じゃない

また電話すると機中の人になる

追憶の彼方へラジオ深夜便

唐津市 田口 虹汀

毅然たる態度入社 of V サイン

婿殿の態度 姑上機嫌

リベートと言うにはチョイと太すぎて

A型で女のように曖昧で

曖昧な返事見合の座が白け

唐津市 久保 正剣

OLの気ままな旅の裏ビデオ

カーブミラーに未練の顔が追つて来る

艶歌嬢々あの娘も愛に飢えている

パロディーで風を虱の会と書く

なるようになって困ったことになる

唐津市 仁部 四郎

迷い蝶やはり独りで死ぬらしい

二ヶ所ほどビニールハウス蝶の窓

紅白の梅花従え兵の墓

紅白のタイツ揃えたおカルチャー

紅白に分けて社長の大訓示

唐津市 山口 高明

契約の取れぬお昼はカレーパン

不況には強いと志願自衛隊

幸せが過ぎて明日が怖くなる

仕出し屋のお節で初春の幕をあけ

都会派の兄とは住めぬUターン

唐津市 浜本 ちよ

残念会大げさにして期するもの

生きるための金はそんなに要りません

あり余る家事があるのに退屈し

引きこもる主婦にドレスの用は無し

横縞もたてじまも好き着物好き

岸和田市 芳地狸村

曼茶羅にいまも生きてる中将姫(当麻寺)

おみやげに中将餅がうけている

普茶料理舌がよろこぶ薄味

ことわりの電話に勇氣出している

エリートの道がきびしい突然死

岸和田市 島崎 富志子

虚栄心 老いとは別のものらしい

まとまらぬ商談相手は酒がする

気の弱さ仏の面をつけたがる

あわてまい米のない時期生きてきた

大きい字拾い読みして知る世界

岸和田市 原 さよ子

春風邪に物憂いままの日が過ぎる

レントゲンに医者の言葉を待つながさ

失敗談身に覚えあり笑えない

家中に回覧孫の答案紙

もう恋に出会えそうない皺の数

岸和田市 高須賀 金太

桜さえ見れば飲みたい日本人

全山さくらより一本のさくら

ロートルの散りざわ桜とはゆかず

外米に城は渡さぬ杜氏の唄

風を聴くどこか亡父の声に似て

岸和田市 岩佐 ダン吉

旅の風ならば自分を晒せそう

流れ玉によく当てられる僕である

また渚消して開発などと言う

近道が好きで迷ってばかりいる

人類を追放されるまでは飲む

香川県 木村 あきら

肩書にスリ寄ってくる花名刺

玄関で愛想振りまく犬張子

厄介な話も論吉ケリを付け

バラ色の夢はもうない八十歳

金婚で妻に嗜好が似てしまう

香川県 成重 放任

おいこらと名前を呼ばず三十年

夜明けまであの事ばかり気に掛り

竹割ったような気性にほれ直し

竹藪をつついたばかりに狙われる

生活を支えた父の力瘤

香川県 川崎 ひかり

医学書を読んで心配また増える

味方だと信じた部下の足払い

もたれ合う人といさかいくり返す

Mサイズ横に私のLサイズ

居酒屋でふる里自慢して帰る

香川県 新川 マサエ

髪染めてバーゲンあさる幸を買う

竹藪がそろそろ隣を征服する

占いを信じた羊ついてゆく

くじやくさん昨日も今日も飾り立て

しめ飾り無事故誓って新春へ翔ぶ

香川県 山地 マツエ

竹の子が近づく春へジャンプする

運命線いいねとママの手を握る

不覚にも力を抜いたゴール前

いい風に逢えそう友をたずねよう

銀行の暦が一つ老いの部屋

香川県 工藤 吟 笑

サッパリと片付けたのに孫が来る

空色で大きく明日の絵を書こう

良いように頼むと明治座を外す

高砂の謡いに合わず裾さばき

良い嫁で若者島に住む決意

横浜市 菱田 満 秋

ビールスが人間様をてこずらせ

起きている時間を人生だと思ひ

異常ない診察の掌を洗われる

駐車料千円 賽銭は五百円

季の移ろいを追うていて歳をとり

静岡市 安本 晃 授

春時雨 焼けぼっくりに出る花芽

安らぎをほしくてひとり花野ゆく

小春日へあてどなく翔ぶシヤボン玉

不束な鞆が噂の街で跳ね

ひたすらに待つ駅裏の女傘

西条市 片上 明 水

乳母車他人が押すと余計泣く

叛旗振る片手で人の数を読む

ふるさとの空広過ぎる奴唄

裏町の酒を喜ぶ友を連れ

母を呼ぶ部屋は一日陽が当たり

今治市 越智 一 水

墨すればすり百彩の魅力秘め

墨すれば心が和む彩和む

森からの手紙淋しい曲ばかり

歳かいな寒の野菜がうまいぞな

おふくろの介護を徳と受けとめる

町田市 竹内 紫 鏞

イヤホンを外さず詣る万歩計

十年日記 関節はみな鍛えねば

十年日記 問診むきの表つくる

十年日記 嘘の齢にも筋通す

十年日記 金婚と喜寿大書して

生駒市 北山悟郎

この僕に立派な足跡残してる

戦傷の過去忘却に辛い酒

ほとぼりが冷めても心とがってる

道草が思わぬとこで拾い物

戦傷と肺癆乗り越え茨道

松山市 谷 真風

しつかりと掌を合わせると血が通う

煮こごりが好き亡父に似て亡母に似て

四角四面の白い箱だよ俺の城

老骨もまだ浮く力 風呂の中

子等遠し少し淋しい冬の雨

富山市 酒井 輝

出る杭にならず根を張る年の功

日記帳ノートに決めてから続き

ハナハトとアカイアサヒに深い溝

裏切って正義の使者になる議員

不況風庁舎素通りして賞与

静岡県 藺田 猿 杏

一言で言えば談合 永田町

高い木で育つ可愛い七ツの子

大ジャンプ頼れるものは自分だけ

犯人の心動かす母の声

引きしぼる矢に乗って行く天の国(ある弓友の死)

寝屋川市 柴田 英壬子

不知火の火の女性想う春の宵

夢のある老いのホームに要る資金

言訳につまんで山椒かんでいる

願掛けた記憶とげ抜き地蔵尊

かまきりの緑の瞳義眼めく

寝屋川市 平松 かすみ

母さんの形見で作る肌布団

字画から福を貰っているそうな

声だけはそっくりさんの伯母が逝く

塩漬けのおなすも株も胃に悪し

ライバルのスタミナ切れを待っている

高知県 赤川 菊野

観光へ坂本竜馬生きている

桂浜 坂本竜馬と名月と

足し算の下手な男にある人気

チンと鳴る音にも慣れて共稼ぎ

イエスノーはつきり言うて土佐女

高知県 北川 竹 萌

納得がいき老めがね仕舞いこむ

鍬の柄をすげ替え八十の春を待つ

ごめんねと一言わびる勇み足

江田島で回顧の戦見て帰る

旅帰り一夜で時差をとり戻す

高知県 小澤 幸泉

尼崎市 田中 薫

お久しぶりの師は年金でボケ始め  
大雪にふるさとの街よみがえる  
生きることに騒がしきかな五十年  
残り火を集めて春を待っている  
卒寿逝く悲しみ安堵冬の庭

羽曳野市 榎本 吐来

もう齡と朝の鏡に言い聞かす  
一旗揚げる小さい旗を持っている  
雨天決行 幹事に下戸はおりません  
何処にでもいそうな顔の殺人鬼  
テレビニュースとなる大阪の雪化粧

羽曳野市 田中 透太

定年の顔を鏡に見せておく  
文学を語る貧しい眼鏡拭く  
脇役の人生だった父の靴  
フルムーン駒子の駅で降りてみる  
關病のベッドに柳誌届けられ(大腸の手術)

羽曳野市 吉川 寿美

味噌汁の匂 病夫のいない朝  
酸欠の街をやっぱりぬけられぬ  
結び目をほどくいけずな神がいる  
飛べぬから円周走りつづけている  
逃げて来た足跡ばかり悔いばかり

バラ赤くあわれ秘すべきことありて  
しんしんとひと恋しくて着ぶくれる  
歩いても歩いてもひとりの夜明け  
自動点火の虚しい朝の激み  
涙拭わんとて生まれ来しことか

藤井寺市 福元 みのる

三面鏡見えぬ一面こそ自分  
晩年と言われる歳で手柄なく  
黨員の造反昔なら斬首  
ダイエットし過ぎて生理まで止まり  
無料バス貰う頃から腰痛め

藤井寺市 中島 志洋

仲直りすれば頼りになる味方  
なりたくてなった訳ではない幹事  
春うらら日本列島花に酔い  
下積みが不満抑えている無口  
青い鳥探しあぐねて古希の春

豊中市 吉田 あずき

義理チョコに方程式が書いてない  
中心が日本と錯覚してる地図  
ライバルの貧乏ゆすり見てしまふ  
別姓のまま二次会三次会  
封を切る須臾のときめきこれも春

豊中市 辻川慶子

立春へロケット打上げ成功す  
春風が心やさしくしてくれる  
人生も花もいろいろ私小説  
妹の元気に負ける桃の花  
灯を消して迷う心が燃えてくる

今治市 野村京子

修羅抜けて母に似てきたにぎり飯  
シヨパン聴く妻と言う字を捨てている  
B面でとろとろ長湯しています  
雪しきり人嫌いする北の駅  
ゆず風呂でいのちの重さ軽さなど

富士宮市 渥美弧秀

鉛筆でなまえが書けて障害児  
振上げた拳が孫の瞳に圧され  
夕焼けの富士に尽きない童歌  
詩に生きる暁までをペン冴える  
陽の出富士しばし全身吸い込まれ

奈良市 米田恭昌

雪国の左遷仲間で飲む地酒  
食前にワイン飲むよな柄でなし  
子も巣立ち小津調ばりの老夫婦  
祝い箸 鯛の目玉に睨まれる  
福寿草 還暦なんてまだひよこ

奈良県 長谷川春蘭

己が身を己が守りて冬ごもり  
余生とは四方の繋がり芽吹く銀  
臘梅の香に佇めば鳴る時報  
譲られて座席のぬくみ旅小春  
春の宵オブラート反る生けること

河内長野市 井上喜醉

土壇場のしぶとい首が芸を見せ  
さわやかに大地育てる森の水  
運の良い人生でした今のとこ  
せせらぎへねじ伏せられた春の雪  
スッポンの商法知らぬコンピューター

松山市 宮尾みのり

同じ血を分けて世渡り上手下手  
詳細はつなぎ合せて第三者  
晴耕雨読甘い甘いと草が生え  
パチンコで儲けた話ばかり聞く  
丸腰で生きた強さは内に秘め

東大阪市 崎山美子

足もとにある幸せに気づかない  
近くまでお越しの節はを真にうける  
欲に目がくらみきっちりだまされる  
誤解だと気づかぬままに平行線  
母さんの笑顔家族をほっとさせ

守口市 森川まさお

裸木を余生の模範として眺め

仏壇に声かけてから飲みに行き

乗り継いで古い国名残る駅

アンパンよ腹が空いてた少年期

みな留守で氷枕が干してあり

神戸市 山口美穂

明治生まれ老母の頑固をもてあます

拗ねてみても老母ではつまらぬお茶にする

胸が無口にしてる冬の雨

胸に一物もつてお酒を注いでいる

車車車 老いにきびしい歩道橋

仙台市 川村映輝

九十の働き初めは雪を掻く

八十は坂九十歳の山峡し

百万円の敬老祝は弾みすぎ

悔しさは寝たきりのまま年重ね

天才でないから努力を蓄積す

宇部市 平田実男

借用書ばかりで実印悲しませ

青リンゴ艶のないところが魅力

フルムーンあちらも奥様がリード

四十年まだ命ある句が出来ず

また元の二人になった縄電車

大阪市 神夏磯典子

ミナミで比べる新調の春の服

平均的暮しへ嬉し花吹雪

盆梅展 梅のところに洗われる

エプロンをつけて自分の顔が出来

用心を重ね重ねてきた命

大阪市 北勝美

図書館で寒さ知らずの雪の午後

早春のおふくろの味若午芳

露の臺 味をわからぬ不仕合せ

蟹の膳 醜く食べる老いの箸

区役所に敷居なくなる自動ドア

大阪市 井上白峰

子らの幸 親は礎石に耐えている

隊列を離れた蟻も定年か

飽食の皿は知らない芋の蔓

サヨナラを言うには惜しい手の温み

老い二人ただなんとなく日が暮れる

大阪市 藤田頂留子

雪つれて諸国漫遊する寒気

減税のききめそろそろ八重桜

オリンピック景気もジャンプしてほしい

土と火で見事な壺の名コンビ

世の中に出たいでたいと埋蔵品

大阪市 榎本 落児

男なら我が死に顔も見たいもの  
心あるから人が好きです嫌いです  
アリバイが完璧すぎて焦臭い  
職人の目が職人の仕事みる  
監査では適正でした使途不明

大阪市 上田 柳影

七歩の詩そんな相手にまだ会えず  
景気浮揚へ首ながながと待つて冬  
杖ついて歩きなさいと妻真顔  
八十三をまだ生き伸ばすりハビリ  
この親にしてこの娘ありいと優し

大阪市 板東 倫子

雪しきり花屋で春の彩を買う  
柱時計止って誰も気がつかず  
色即是空もうぼちぼちと悟らねば  
自我捨ててあとはお手々の鳴る方へ  
またたきもせずに寒夜の星凍る

大阪市 中西 兼治郎

心臓麻痺死ねたらそのとおり死に  
医者のお娘がお寺へ御良縁嫁ぎ  
人の性善とこの頃言つとれず  
入院をしてもローンは容赦せず  
風呂に行くシャボンを出せと言う明治

大阪市 大野 武太

検算は孫にまかせる申告書  
愛犬も扶養家族にしておこか  
輸入米昔の胃袋しつている  
飽食のはて外米と騒ぎたて  
軽々と三十八キロ湯にひたる

富田林市 松本 今日子

白いから何でも盛れるカレー皿  
私にもこんな時ありへその緒よ  
はつきりと言うとこ貴男病人や  
寺好きとデイスコが好きで物別れ  
喪服着て出かける用あり正月に

富田林市 片岡 智恵子

決意とは裏腹無為な日が過ぎる  
日記の文字あしたの糧となるページ  
習うより慣れよと筆を持ってみる  
渡り鳥遅れる仲間庇いつつ  
煮えきらぬわたしを嫌う影法師

富田林市 池 森子

情熱はあるかと雪が降りしきる  
平凡な日々を嬉しいことにする  
母さんを越えた日 鶴は真正面  
躍動したのは幻のわたし  
梅干しと母のむかしを語り継ぐ

京都市 松川芳子

飲む飲まぬ一錠に迷う不眠症  
年重ね重ねて悟る夫婦愛

神経をピリピリさせているカルテ

古い物捨てる勉強しています

母さんの寝顔へ許し乞うている

京都市 山海友熙

盲人のころをしかと指で追う

派出所の留守 京案内の姪人形

梅古木 花凜とおたっしやで

白梅の香りや無口とも思ふ

春を待つ華燭 快気の日をめぐる

西宮市 西口いわる

遠巻きの騒ぎの中に受験の子

丁寧にリボンをかけているいくさ

雨の日は雨の仕事のあつた亡母

手の中にあれば自由も玉でなし

風花へ大事なひとを見送りぬ

西宮市 秋元てる

あるがままに見える眼鏡を買いました

寝台車 山頭火の旅など思い

旅仕度 母は羽ばたきして出かけ

子守唄 故郷のよさ(節)に似てしまふ

仲直り程よく風呂が沸いている

姫路市 大原葉香

折込みの嵩で曜日が分かる朝

姿見が正直すぎて怖くなる

コンパクト女自信をしまい込み

梵鐘の情けに触れて澄む心

少年が素手で掴んだ金メダル

姫路市 丁坪サワ子

お迎えは何時でもと言ひ医に縋る

稚子さま紀子さまお疲れフラッシュ攻め

雑踏の中で見付けた貧美学

受験の子かかえて抱く不発弾

母と子の会話入試のことばかり

姫路市 中塚遊峰

端溪の硯で下手な風信帖

残り物食べておごらぬ亡母だった

肚の虫おさえ隣保の輪の中に

働けた余韻の風に生かされる

傷一つかくして温い人間味

吹田市 山本希久子

冷たい雨激しく生きた父の葬(二月十四日父死す 3句)

大会が近づく父の死が迫る

こんな時どういたしましょうお父さん

生家にはだあれも居ないねぎ坊主

梅だより老猫一日家を出ず

吹田市 井上照子

師の温みしみじみ想うレモンティー  
豆を撒く男の声を真似て撒く  
たまにワインたった一人の夜が更ける

惚けなんて言われたくない眉をひく  
この年でチョコをあげたい人がいる

吹田市 瀬戸まさよ

子の名前子がつけられぬこの矛盾  
真つ黒なカラスよ恥じることはない

死を想う生きていく意味なお想う  
よく当たる予感いい時悪いとき

伊丹市 山崎君子

ダイエットうどんそろそろ飽きてくる  
日記帳何年振りか雪の文字

寒見舞 雪の散らつく日曜日  
雪まつり一度は見たい老父の旅  
鬼の豆雪降る庭にとんでくる

堺市 黒田真砂

友見舞う逆にはっぱをかけられる  
仲の良い友達みたいな老夫婦

七十になっても恋し母のまり  
夢見が悪かったと思う一日へまばかり

臨時収入夫に内緒でブランド品

茨木市 堀良江

思い出のまた降り積もる雪の街  
無駄に年取らぬ優雅な物腰で  
美しい声でいけずなことを言う

父のように敵として金の背文字  
しゃべらないから美しい人形

宝塚市 中田純次

捨て聖 一遍讀え南無阿弥陀  
歴戦の軍靴水筒捨てきれず  
螢雪の夜々母上は優しかり

咳ばらいしていさかいをたしなめる  
年輪を刻んだ皺のいい笑顔

唐津市 筒井朴竜

風倒木活かすバス停ログハウス  
余命表シグナル黄の酒タバコ  
無農薬野菜は虫の試食済み

子のビデオ出稼ぎ父へ故郷便り  
闘病へ負けじと母の車椅子

柳井市 弘津柳慶

年賀状が来たのに死亡通知が来  
議員手当無駄な時間を空にする  
減税など年金者には無縁なり

ハガキ値上げ筆不精にはありがたし  
情けなやパンツのひもを取り替える

羽咋市 三宅ろ亭

連休の過多 人心を倦ましめる

一陣の強風 長橋渡る羽目

昇級の試験へ恥も我も棄てて

郵便の来ぬ日ある種の虚脱感

岡山県 花田 たい志

ひっそりとゴミと一緒に愚痴も焼く

後ろ前にシャツ着て少しボケたかな

造反を叱ればわが身がやせ細る

家庭でも使途不明金不和のもと

唐津市 浜本 義美

人間が植物じみてくる老化

老人に荷が苦にならぬ乳母車

寝不足に法鼓の遠音睡魔呼ぶ

一枚のカルテにいのち左右され

岸和田市 福浦 勝晴

調査までされての縁組けうとくで(嫁入り)

近道を通って慌てて蹴つまずき

開店の花輪に星の雫して

春まだし濃霧に煙る常夜灯

岸和田市 古野 ひで

丹念に眼鏡を磨く風邪の父

順番がちがうと老母泣きくずれ

逆縁のお通夜に言葉見失い

幾久し老いても嬉しい銀世界

岸和田市 三輪 通彦

手助けも年金だけの粹の中

肩書がとれば糸の切れた爪

匿名にすれば手強いアンケート

陽の光 知らずに育つハウス物

岸和田市 田中文 時

昔なら翁と言うに未だ勤め

衣装選る妻に同伴生欠伸

ガレージに父の自転車子のヨット

私がついてなければ妻過信

堺市 柿花 紀美女

世の動きどうあれ大地春の音

ほろ酔いの父の青春聞いてあげ

面つけぬ素顔で生きるゆとり持つ

失いしもの遠のきて日向ぼこ

堺市 一瀬 福一

メイクアップ落せば母の顔が出来

功なった人なり忍の字を好む

うす化粧気付かぬあなた憎らしい

赤いもの女と決めた世が恋し

堺市 近藤 豊子

初日さす部屋に父は父らしく

クラス会タイムスリップして更ける

「愛の讃歌」うたえばはたちの頬のいろ

かまくらとカラオケルーム似て楽し

新妻は給料袋へ腰を折り  
しまい込み今いる時に出てこない  
お通夜でめったに逢わぬいとこ会  
父入院家族も猫も自立する

大阪市 寺井 東雲

六十の時計早送りはさせぬ  
衝動買ひ一つの乱と引換えに  
熟年の恋だとうに見抜かれる  
はぐらかすときのおんなのずるいあこ

大阪市 渡部 さと美

強烈に自己主張する文鳥も  
いつからか手のりすっかり人ぎらい  
日の目みる豆炭 七輪 森の保護 (アフリカ)  
楊貴妃も淀君もいるフアンタジー

大阪市 町田 達子

黒電話 家宝になるまで使います  
制服に背すじ伸びたり一年生  
風の色変えて入学御曹司  
銭湯へ行くのもうとし風呂呂洗う

大阪市 松尾 柳右子

見せかけの笑顔で恐い事を言う  
御先祖を電車の棚へ忘れて来  
幸福の頂上において拗ねている  
勿体なや勿体ないとポロの山

大阪市 清水 利武

トイレ順いっととき赤ちゃん腕の中  
人間だけが許されており紙おしめ  
愛は果敢に圧力釜の豆のつや  
お好み焼きふたつ返事で友が寄り

大阪市 清水 絹子

父の脛細うなつても逞ましい  
ふた世帯上下の距離を保ちつつ  
若むきに賽の目に切るニューサラゲ  
足ばやのホームにうどん屋が匂う

東大阪市 安永 暁子

米と露の共同演習はどこ  
裁決の声に入院考える  
税務署へ小遣い還付申告に  
長生きの税も出来そう長寿国

和泉市 岡井 やすお

なつかしい風に出会ったこの街で  
寒いわね市場で会う人合言葉  
年積り嫁姑の字が消える  
高血圧 父と母から譲り受け

貝塚市 行天 千代

俺の趣味財布はたいて夢を買う  
お隣の寡婦何故か今日は派手  
ワープロに人の情けは打たれない  
昭和一桁もう老人という皆

和泉市 西岡 洛醉

吹田市 岡本 吉太郎

病院は寿命のばさず死期のばす

返さぬとわかっていても娘には貸し

かんじんなこと酒になってそつと言ひ

老いぬれば呆けてピンチをうまく逃げ

河内長野市 植村 喜代

地が割れて天が凍らす無情かな

戦争が食べる笑いのない子にし

金余り一足跳びに来た不況

ほしい娘へバーゲン攻めになるポスト

吹田市 栗谷 春子

痛いこと遠い耳から聞いてくる

お出かけの祖母のうす紅見のがさず

じやんけんで一番風呂かしまい風呂

起きあがり小法師がだいぶしんどそう

守口市 結城 君子

面かえて会う人がある応接間

お隣の犬に留守番また頼み

ホームステイ母国の嫉と共に来る

克蘭ケが気の毒そくに嘘をさく

寝屋川市 堀江 光子

亡き母に吉屋信子の愛読書

急逝に返さぬままの本があり

美しい姉より妹先に嫁く

白梅の一枝最も似合う墓

吹田市 茂見 よ志子

転職の挨拶状が今日も来る

女坂下りゆるりと参らんか

長風呂へコードレス置くひとりの日

これしきの用事悲しや手に余り

茨木市 藤井 正雄

風邪の子にたこ焼き買いに戻る道

留守番にことさら寒い雪が降る

均等法おしゃべりだけは格差大

ライバルの情報高くつく屋台

川西市 松本 ただし

終章の色選りかねる絵の具皿

負けたとは思わぬ妥協の線を引く

いくつものメジャーを持った年の功

悪いところ有るのか無いのかどっこいしょ

箕面市 椎江 清芳

地に還る落葉淋しい冬の音

意地張ったあとでこっそり飲む薬

主治医から酒か命か念押しされ

島捨てる決意鈍らす青い海

交野市 福崎 しげお

一輪の花が和ます無人駅

鈴付けて馬に稼がす観光地

核の無い空夕焼けのすばらしさ

一万歩足りない夜は竹を踏む

今年また同じ桜を見て通る

芦屋市 黒田能子

春風に肩のバットをはずします

花の下みんな仲良くなれそう

面かぶり踊りの中に一人いる

西宮市 瀬尾六郎太

納沙布岬返せ還さぬ鎧蟹

寛永の雑喉屋文衛門が旨き酒 (伊丹)

吟醸酒 麴杜氏もロボット化

立行司 帯刀切腹覚悟あり

宝塚市 吉田笑女

まだ其処へ亡父母も居ました夢うつ

子等のこと思ひめぐらす風の夜

バブ入れて独り溢れる湯に浸る

道幅を狭めて長い立話

枚方市 海老池洋

お早うお休み鏡に言うて独り住み

この橋を渡るなつかし国訛り

美しい誤解をくれた彼女の目

乱と治のいつまで続く夫婦坂

豊中市 滝北博史

父母の墓思い出させる雪の朝

姑がそつとそろえた嫁の靴

中心にゼネコン汚職国の渦

下手な唄お得意先をよろこばす

福寿草 父の笑顔にまた会える

豊中市 三宅つえ子

余生まだ炎えるものあり竹を踏む

亡母の掌がなつかしく今日も水仕事

赤い布これは地蔵のよだれ掛け

箕面市 岩津ようじ

車椅子 元全日本チャンピオン

はらわたの中見るカメラ追うテレビ

水兵の墓は港の見える丘

病院が死にたい人で溢れてる

大和郡山市 坊農柳弘

惚れました菜の花畑の君の笑み

ハリハリの鯨の代役豚の鍋

精いっぱい咲いて零れて彼岸花

沖繩へ夏を誘いに一人旅

東大阪市 指宿千枝子

目を閉じて生きているのを実感し

赤ちゃんのあぶくむずむず歯が生える

姿見にドレス中まで見透かされ

踊り子を描いてもドガは越せぬだろ

鳥取県 さえきやえ

年金のおかげで春の種をまく

玉ねぎを切った涙にしておこう

古傷を忘れさせないタブレット

犬嫌いこれから先もきらい抜く

悪い点似ても可愛いわが子かな  
母だつて女たまには恋もする  
旅空が自分の姿映し出す  
正直な鏡が秘密しゃべり出す

鳥取市 春木圭一郎  
武田帆雀

読み深い棋士から先にみかんむく  
名門の血筋で筆も弁も立つ  
ストーブを焚いて碁敵待っている  
真夜中の電気の紐はこの辺り

鳥取県 石谷美恵子

食卓の無口を花が和ませる  
嘘よねえあれから胸に降る粉雪  
世の平和散つた蕾の上にある  
結果では負けたいくさに悔いはない

倉吉市 淡路ゆり子

夕焼けが美しすぎて動けない  
甘い事言つて年寄り鴨にする  
話もなくて夫と一日手内職  
花言葉信じて花の種を蒔く

鳥取県 津村八重子

人生のドラマを長い詩につづる  
老いることなど悲しまず月あおぐ  
味噌汁も煮えて平和な朝がきた  
野仕事のゆとりを好きな趣味に生き

甘すぎる脇を固める嫁がいる  
悪魔やら原子力やらいる戸籍  
安心せい不況百年続かない  
安心と油断はとつても仲がええ

鳥取県 田村きみ子

美しく老いたいなどと仄かす  
年金を杖にときどき旅をする  
菜の花がもう咲きました地藏さま  
夢霞筆の走りに見る挫折

鳥取県 乾喜与志

仏さまの証か愚痴がいとおしい  
叱られて可愛がられて今日がある  
老いにも春を持って来た露の臺  
花の咲く春を信じた種である

鳥取県 石尾かつ乃

一くぎりついて我が家のティータイム  
生きている幸せ豆腐手のひらに  
磨いて磨いて孫の宝は石だった  
坂登る とつても空が青いから

鳥取県 西浦小鹿

目をあけてみる夢がある汗流す  
つなわたり悲しい方へかたむきぬ  
淋しくて自分の影を抱きよせる  
泥酔のなかに自分の海を見る

座禪して感情線の修理する

鳥取市 西村 黙光

暖冬へ生理不順の木芽花芽

自分にはとつても甘い後ろ指

猿芝居他人が手ほどき受けに来る

鳥取県 乾 隆風

諍いへ馬鹿になるのも芸の内

酒もタバコも女も伏せて嫁を取り

冷やめしを食った社長の手は温い

欲張りの草がなかなか抜けません

倉吉市 野口 節子

物差しの長いお人で衆が出来

あしたへの備えに縄を緋い続け

子の巢立ち点になるまで立ちつくす

二人三脚運命の波も共に受け

鳥取県 上田 俊路

新宮の闇のしじまに神を見る(伊勢初詣)

ざりざりにならぬとやる気湧いて来ぬ

ざりげないジョークに托し本音吐く

プライドが古い帽子をぬがせない

倉吉市 最上 和枝

しがらみに堰かれて流れややこしい

信じ合う切符二枚が老いていく

露の臺春の切符を抱いている

雪景色ややこしい物みな隠す

そこまでの距離を渡れぬ二重橋

鳥取県 黒田 くに子

夢ばかりつんで思想は欠伸する

雑草の花もたしかな命持つ

米の飯こんな宝を忘れかけ

鳥取県 西川 和子

ゆるやかな坂でいい汗かいている

時間割どおりに行かぬ主婦の今日

言いたくはないが言わぬとだめになる

不景気に繕い物が多くなる

島根県 藤原 鈴江

今にしてこれが幸せというものか

振り返る事のみ多し老いならん

お喋りに一刻ストレスあずけよう

余生にはと思つた針箱手にあまり

出雲市 板垣 夢酔

古里に涙欲しがる山や川

ごめんなさいこれが言えずにもめている

頼る気のない子に親は看取られる

丁寧な言葉の先にトゲ光る

出雲市 小玉 満江

沖繩の海へ飛びたて千羽鶴(五十年忌)

悲しさは寄る辺ない身の違い著

真夜中のこむらがえりでとび起きる

マスクした人に挨拶されて冬

出雲市 小白金 房子

大物へ集う魚拓の墨をする  
汚染され泡ふく蟹のひとりごと

快復へ喜ぶ老母の七分粥

玄関に並ぶちいさな子の躰

出雲市 富田 蘭水

一杯の酒が術後を甘露にす  
ひたすらに生きよう日記嘘もなく

腎石も降りたら宝にしてやろう

ネクタイを変えて老いの身燃えつづけ

和歌山市 岩本 美智子

子との距離だんだん遠く初氷  
憎しみも怨みも流す水鏡

手鏡へひよつとこをして慰める

黒い服似合う女の小さい嘘

和歌山市 玉井 豊太

大正のおとし子ご隠居に並ぶ  
子のごとに血相かえた鬼になる

結局は妻と相談して祝儀

リモコンが緻密で余所見してられぬ

和歌山市 田中 みね

付き合っただこそ浅いが無二の友  
札束を数える指にある活気

ちよつとしたスリル貴方とティータイム

お言葉の中に顔出す出世欲

和歌山市 池永 正雄

十万の眼が躍り出すキックオフ  
石垣のすき間選んだ頑固な芽

将来の大物もいる保育園

週末は尺取りのごとやってくる

和歌山市 堀畑 靖子

ユニフォーム万年補欠だった父  
わたくしの力量知ってから無口

子が抜けた舞台主役に返り咲く

ダイエツトすすめる医者も肥満気味

倉吉市 米田 幸子

あの世には神も仏もあるらしい  
意地張って見ても流れにさからえぬ

助け舟出して夫婦でもめている

厄介なことは忘れたことにする

広島市 森田 文

メリーちゃん長いざるそばもてあます  
喜んでもらえたかしら串団子

落ちついて自信溢れるうちの犬

貫禄の不足を髪の色にする

和歌山県 西口 忠雄

かというて泣きつく訳にゆかぬ顔  
ゆらゆらと揺れて乳房は男切る

塀越えて検察億のカネさぐり

鋼持つススキ死んでも人を切る

七尾市 松 高 秀 峰

また一戸灯が消えてゆく過疎の村

過疎の村 時計がわりの昼のバス

ワンカップ夫婦でのんで鬼は外

香川県 永 峰 伽名子

夫婦して禍福あざない共倒れ

ベッドサイドの生活も慣れてさわやかに

名に似つかぬ暴れん坊の春一番

鳥取県 太 田 幸 枝

考える間もなく五人産んでいた

怒った顔見せぬ亡姑が恐かった

免許証私の顔だ汚されぬ

岸和田市 藪 野 けい子

近道に犬が邪魔して遠回り

追放の酒から逃げて乗るタクシー

兄に似る人と出会った地下の街

大阪市 小 糸 昭 子

年輪を上手く刻んだ顔の皺

廃線の中からドラマ始まった

うちの猫 子を産んでから威張り出し

豊中市 江 口 明 光

進んでる時計持つてる母の朝

道徳と言う一線の立ちくらみ

鼻歌で降って来たかとジャンプ傘

豊中市 井 上 直 次

書き初めにいぬ 犬 戌 と筆太に

元旦にわが家のリストラ議論する

雪もよし嵯峨野に湯豆腐ある限り

和歌山市 北 山 好 笑

お浄土で必ず待つという亡夫

笑う日もあろうと生きてきた孤独

好奇心だけ持ち続け女坂

鳥取市 前 田 一 枝

羽根布団 白鳥も鳴く夢を見る

白内障 眼帯が取れしわ目立つ

流れ玉 正直者によく当たる

「川柳塔」八〇〇号記念句集

集句 旅 人 麻生路郎

夫婦 福 寿 草 麻生葭乃

編集・発行 川 柳 塔 社  
定価一五〇〇円（十二四〇円）

★ご注文はなるべくグループで、2冊以上のご注文は送料不要、10冊以上の場合には送料不要の上、1割引で頒布いたします。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のくまろ

(40)

橘高薫風

同号に当時鋭敏の松丘町二氏が「郷土作家かほる」と題して、小編ながら作家論を掲載している。麻生路郎の周辺で、後の須崎豆秋と双璧をなすような個性的な柳人高橋かほるを、ここで紹介しておきたい。

松江は嫁ヶ島の見える、湖に乗り出して架けられた料亭の座敷での句会、路郎選の兼題「花道」の地位に選ばれたのは、

花道は相合傘の幅に出来  
であつた。理屈抜きの芝居好き、観るだけでは承知が出来ず、眉を引き鬘をかぶり自ら舞台上に立たねば気が済まぬほどで、しかも女形の役柄をこなす。今も現役の楊井二南氏が立役をつとめ、味のあるコンビであつたらしい。

八千代座へ十月に来て蚊に喰われ

唄本を口に蛇の目はひろげられ

菊の露口三味線にとけてゆく

など芝居や芸事の句が多く詠まれている。それというの、かほるさんは芸能人の居住者が多かった島の内のぼんちであつたから、その環境や境遇が大きく影響したに違いない。

町二氏も、

「かほるさんがおつとりとした古典的な味わいと渋い色気に洗練された都会の色調の佳き調和をたたえた周囲と、生活に後顧の憂いがない境遇とが、かほるさんの詩魂に影響するがままに影響した」としている。

大阪は轆かれかけてもよい所

蔵の戸を開けて母親せきをす

掛茶屋の猫今月はみもちなり

おちよやんはあつちを向いて銭を出し

囲われて本家のおかず聞いて見る

逢戻りおこぜの骨がのどに立ち

三味線の皮の白きも春らしく

「囲われて」や「逢戻り」は大正時代の句

であるが、後者は後の豆秋の有名な句、

骨立てたまま二次会へついて行き

の原形のようにも受け取れる。

ポプラの樹わさびに見えて冬になり

うどん屋で子持は遂に坐らされ

失恋の影がピアノにまぎまぎと

辻うらが出そうに思うもなかなか

踵から出て自動車の黒い色

これらの句も大正時代のものであり、町二氏も「かほるさんの句の一つ一つについての説明は、たとえばヴァイオリンにじっくり合わせてヴァイオリンの箱を造るようなものですから、ここでは述べませぬ」と全面的に容認理解しておられる。

桜の宮うるしに負けた人に会う

身一つになつておならをよく落し

キューピーの頭と枇杷とまちがわれ

上敷の鉾を押しする病み上り

貧乏の姿子供に子をおわせ

子の寝顔酒の肴になつてくれ

春の海マッチをすれば消ゆるなり

新聞は今日の日づけの酒の粕

花電車牛が引いたら動きそつ

町二氏は「若し人人が『変幻極りなき現在』の熱烈な新への動向を考へる時、これらの作品は余り長閑すぎる」とでも言いますならばかほるさんは答えて「川柳は私の顔です」と申しましよう。「顔の造作は神様でも変え得ない」と。結ぶ。

路郎先生は戦後出版した門下生の合同句集

『私達』に物故者かほるの句を掲載された。

月見草地球は丸いものらしく

待ち合せ帽子の型を折り直し

# 白選集

水粉千翁

山葵どのさかな冥利に尽きまする  
力こぶやっぱり理屈抜きの艶  
お望みというなら樹の隅で乾す  
助けられました拳骨食いました  
灌木の絶妙雪の花ひらく

児島与呂志

根来坂桜盛りの灯がともしり  
生きている幸 孫の手を借りる  
関東煮ぐつぐつ煮えてる花吹雪  
花見酒 都会で見せない顔に会い  
足かばう日々々とに角生きて居る

八木千代

神の巢を借りて卵をあたためる  
巢立つまで卵に保険料が要る  
抱きすぎて卵を潰さないように  
流れの音に耳を預けている卵  
孵ったら黙って旅に出すつもり

正本水客

両岸に桜の白が盛り上がる  
桜の一枝がある無人の部屋  
きざなお花見に車の二三台  
散りしく桜をふんで行くぜいたく  
春の名残りに桜散ってくる露天の湯

小西雄々

一日を生きて一つの福つかむ  
光るもの身にはつけぬが妻達者  
甘い物すぎだが爛が呼びに来る  
札幌へ腕くみなおす水面下  
気が散って罨に気付かぬ冬の蝶

高杉鬼遊

弟よ母にこの世の話せよ  
トメ焼香させて頂く老いの肩  
デパートも深いお辞儀をしてくれる  
消費税ごときに余生いじめられ  
議事堂をよぎる大きな黒い影

工藤 甲吉

おもんみれば一行だけの我である  
風呂敷の大き過ぎるも気がひける  
郵便は来たが中身は請求書

ふふふ、うふふ、ふふふ、うふふと焦らされる  
あつたかいコーヒーがいい吹雪の日

金井 文秋

紐のある限度で風に広い空  
雪解けを待つ樹木の芽も老いの身も  
運も実力、掴む備えがあつてこそ  
健康が戻る兆しかよい目覚め  
内戦で命粗末にされる国

波多野五楽庵

さらさらと砂のところが指を洩れ  
鉛筆を咬む癖がある医者  
指の指  
吐きの泡が時々出る蛇口  
見抜かれてからが淋しい老後です  
かたつむりの母もやっぱりかたつむり

辻 白溪子

肩組んで歩けば怖いものがない  
美しい構図でポスター旅へ呼ぶ  
屋台まで寒さを我慢して歩く  
芸のない下戸が食後の湯へ浸り  
女医さんが誤解しそうな口をきく

橘 高薫風

松村迷観子氏を悼む  
大鳥の羽搏くやはや姿なし  
風神の袋から出た春の風(風 四句)  
風博士ラムネの玉を鳴らしおり  
風巻いて韋駄天となる独楽の夢  
飽食の国へ来て風腐るなり

野田素身郎

招待をされ乗せられて買わされる  
軍歌うたつて気合いをいれて大掃除  
テレビアニメの一休さんに教えられ  
風邪の床から寒中見舞状  
日曜かそうかと年金暮らしなり

遠山可住

お茶漬はしまつやおへん京女  
お隣も静かな余生雪しんしん  
見つかるまで探す一円のいのち  
祖母の鍋お湯がほんまにやわらかい  
かたくなに生きて明治の灯が消える

野村太茂津

飢餓戦線俵べばうまいタイライス  
日本のめしも最後かてんこ盛り  
味はとも角お米は安い方がよい  
細い手が外濠埋めに忍び寄る  
心激しく怒る感動あるうちに

待つこと久し四十五年の詩の宴  
ぜいたくに慣れ節約の気になれず  
政治貧困 不況 事件 事故多し  
大事に大事に言われて歳の事思う  
ひとすじに氣力貯える花の春

藤井明朗

日本一の塔を毎日拝む幸

松川杜的

修業大師の笠勿体なくも鳩の糞  
南無大師七度唱えて冬の天  
朝参り馴染の顔も減って来た  
過去帳の白紙の日にもナムアマミダ

小林由多香

もつれては解いて夫婦の糸つむぐ  
欲深い願いに神も目をそらす  
他人さまの晴れ着にケチをつけたがる  
酒値上げ休肝日でもつくろうか  
いい顔になるかもしれぬ鏡拭く

藤村 女

春の陽に産毛が光る子の笑顔  
月さえてひとりに惜しき春の宵  
母と娘と猫とじっくり春の宵  
月おぼろ言いたい事がまだ言えず  
傘寿とや節目の歩み整える

賞められている背を抜ける隙間風  
細川丸 碇を下ろす癖がつく  
ひしひしと爪先上がりになる不況  
先生もいや学校もいやコンピュータ  
外米の試食 美味しい顔でなし

有働芳仙

老い二人笑いの絶えぬ日が暮れる  
愚夫賢妻目覚まし時計が鳴っている  
許す気の電話をつなぐ子の謀反  
たまに街歩くと知己にでくわせる  
商魂も下落 饅頭小さくなる

恒松叮紅

パチンコ屋 取るな泣かすな今日米寿  
膺懲の銃まで九条宣わす  
ハイテクの無理押しつけて肩叩き  
奪い合う財なく子等の仲の良さ  
立板に水ああ井戸端の妻なるか

大矢十郎

妻のねじ揃えた靴は外へ向け  
我慢とは美しきもの冬木立  
大望も欲も持たないうどん好き  
無位無冠寒い時には頬かむり  
ユーモアのかけらも持たず理に強い

月原宵明

黒川紫香

よく聞いた話でんたと取り合わず  
定年扱いで辞めさせられている不況  
お見限りですかとお内儀酌ぎながら  
春です、ね小川の鯉も動き出す  
おっぱこのつづきが聞けぬままに逝き(迷観子氏逝く)

植村客遊子

停年も間近 老父の背の丸み  
ペンチもう恋のしぶきの春を待ち  
エンマから見れば極楽住みにくし  
強い子と言われ泣けない注射針  
避ける気の居留守とわかる電話口

小出智子

窓開けて雪を見るのも久し振り  
三つ目の抽斗にある絵空事  
こめかみのネジが弛んできたらしい  
少女の頃とおんなじ雪が降っている  
近いから海遊館にまだ行かず

西田柳宏子

これ以上失うものもない強さ  
氷山の一角ゼネコン曝かれる  
政財界背負うたようなコップ酒  
極楽はわが家とあんな言えますか  
マスコミがプレッシャーかける金メダル

(前月分) 西田柳宏子  
反省をするよりしびれに攻められる  
泣く笑う欠伸もします生きてます  
相談に乗るより叱言先に出る  
捨て犬の情けに飢えてついてくる  
名人芸継ぐ人もなく惜しまれる

## 全日本川柳群馬大会

とき	6月12日(日)午前10時開場
ところ	高崎市文化会館
宿題	第一部(事前投句・5月10日締切) 「躍る」佐藤曙 光選 「競う」唐沢春 樹選 「人生」岩井三 窓選
出句先	各題2句、無記名、封筒に住所・氏名を 明記、出句料1000円を同封、左記へ 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11 ステップイン南森町702号
宿題	第二部(当日出句・正午締切) 「旗」米沢苦郎選 「器(うつわ)」田中寿々夢選 「育つ」細川聖夜選 「美」安藤富久男選
会費	3000円(昼食・記念品代共)

全日本川柳協会大会係

川柳太平記 (191)

川柳の群像

# 八木摩太郎

東野 大八

殿馬場の名もふさわしい堺奉行所跡の堺市旧庁舎は、戦災のために今は消え去ったとはいえ、明治25年の頃の建築としてはモダンなものであった。しかし、時代の推移で腐蝕し、よくもこんな処で執務しているなあ、と危なげられるような廢屋であった。

路郎先生のおく来られた頃の市役所は昭和5年ごろで、この頃、泉州日日新聞に連載された先生の隨筆『堺の横顔』は私(摩太郎)には永久に忘れられぬ記念塔である。

「私(路郎)の半身が事務長(堺市立公民病院)となつて間もなく、社会課の八木君がひき出しから原稿の一綴りをとり出して

「これを出版したいと思つているのですが序文を書いて頂けませんか」といふ。一読するまでもなくそれが歌集であ

ることがわかつたが、「歌集の序文を私に書けというのは、いささかおかしい。人ちがいであるまいか」と相手の顔を見ると大真面目だ。「私でよければ」といつてすぐに請合つてしまつた。

頼む人も頼む人なら請合つ人も請合つ人である。せんざい屋が酒屋に序文を書かそうとされているようで、この歌人、よほどの変り者にちがいないと思つた。しかし、市役所の中に早稲田を出たという均クンが一人や二人いたとて別に不思議はないはずだ。歌人晶子女史を生んだ堺市のことであるから、この均クンの処女歌集に私は次のような序文を書いた。せんざい屋の提灯持を酒屋がしたような序文とはこうである。

(注)この歌集は『環境』と題をつけて昭

和6年3月に刊行された。この本に路郎はやや長い序文を寄せているが、その一文を要約すると次のような意味になる。四角な机で日夜計數に煩わされてゐる人々も、その四角な机を象牙の塔と観じて夢をみる人にすればその環境はおのずから別になる。僕が生活に即した川柳を詠んでいるのも二三人が四の現実をそのまま受け入れていたのでは無味乾燥の人生になる。奈良の街々にひびき渡る大仏の鐘の、余韻じようじようたる実体こそが、歌や句のこころだ。

仕事の関係だけでなく、こんなことから均クンと私は殊の他親しくなつた。遂には市役所でできた川柳会の世話方まで引受け、彼自身も盛んに駄句りはじめた(以下略・泉州日日新聞・昭和6年12月・麻生路郎)。

その頃の議員協議会室は、川柳句會場にあつてられ、中々の盛況であつた。河盛市長も、歳暮という柳号であつた。路郎先生の居られた堺市立公民病院は、創立当時は多難な経営で院長自らが市会で答弁これつとめる始末だつたが、川柳詩人の路郎先生もその矢面に立たれ、敵も味方も等しく耳を傾けさせた。新聞記者の猛攻撃も談笑のうちに一蹴されて帰る人が多かつた。十数紙を数える新聞社も、その道の先輩であり、川柳に徹した人でなけ

ればこうもいくまいと思つた。

長くなつたが、以上は『川柳雑誌』昭和31年3月号誌上における摩天郎の『春秋雑筆』の抄文である。昭和5年ごろの路郎と摩天郎の運命的出会いである。路郎42歳、摩天郎28歳。

本名八木均、明治35年3月4日堺市生れ。早大法科卒業後、堺市役所に奉職、その後大阪府庁に勤めて停年だが、さきの路郎との出会いから川雑一筋に歩き、路郎句集『旅人』葭乃句集『福寿草』の編集に当る一方、富田林の富柳会を育て、昭和49年12月には、堺市大仙町の仁徳陵広場に

ふるさととは大仙陵のあるところ 摩天郎の立派な句碑を建立している。

この句碑といへば、彼の曾祖父八木栄次郎が明治22年村井村村長の折、私財を投じて村内の灌漑事業に尽したほか、仁徳御陵の濠を二重から三重に増築して農業用水の確保に努めるなどにより、明治35年に藍綬褒賞を下賜されている。そんなゆかり深い大仙陵だけに摩天郎の感慨は殊のほかのものがあつたにちがいない。この仁徳陵といへば

公害を吐けと仁徳のたまわず 摩天郎の句は感銘深い句として好評だった。

「摩天郎氏は、地元の名門旧家だけに堺市のここあそこに土地があつて、その借地人から、こんな時代に安く借りていては心ぐるしいので値上げを申ししたが、この人はそんな心配をせず商売に励みなさい、ととり合わないという風変りな御仁でもあつた」(不二田一三夫悼文)。

むかし、この摩天郎なる柳号に、大いに関心をそそられた筆者は、初対面の折の長身とその堂々たる鼻梁に含羞を潜めた風貌に圧倒され、さこそと頷いたが、一三夫いわく、

「氏の雅号は路郎先生が名づけ親だそうだった。路郎先生と飲み歩いている時、先生に雅号をつけて欲しいと頼んだところ、ちようと堺宿院のカフェー、摩天楼の前だったので、

『摩天郎にしとけ、わしの郎一字をやる』昭和6年2月だったそうである。氏の身長は一九〇ぐらいあつたのではないか」

古い川雑誌に、彼自身、「八木家の顔」なる一文を書いているが、それによると「僕が顔を出したら相当ムリがきく時がある。理髪した時と平素の顔がガラリと変るせいで、家内にいわせれば平常が悪いからや」とある。

平成四年二月長女徳子の女婿の浅村寛元浅村実業社長の手によつて『八木摩天郎遺稿集』が発刊された。B5判布張り三百二十頁の豪

華美本で、土師半六、我堂武夫、河盛安之助の元市長三人に、中島生々庵元川柳塔社主幹の序文がついている。

その内容は堺史誌ともいうべき歴史・人物・風土・名蹟を縦横に描き出した力作の総集である。摩天郎の愛郷のまごころ溢れる、その郷土史的各編には自作の川柳とともに、堺市民たらずとも魅惑充分である。

摩天郎は昭和55年4月2日死去した。享年76。その十三回忌に捧げられた豪華な供花であらう。彼の著書は、路郎と摩天郎両者の生涯の出会いのくさびともなつた歌集『環境』をはじめ『古川柳に詠まれた堺の人々』『堺の川柳散歩』『堺古今詩藻集』『堺つれづれの五冊を数え、今回の遺稿集は第六冊目というわけだ。このテラックスな万端の刊行印刷に当たつたのが川柳塔社同人河内天笑というのも深い柳縁を感じさせる。この刊行を記念して平成4年4月には天笑の肝入りで発刊記念句会が賑やかに開かれていた。

遺句集収録の『摩天郎句抄』から

喜寿金婚おかめひよつとこ屠蘇を酌み  
鍵かけぬままに故郷の母は留守  
川柳に生きて心の灯をともし

▼次号は「小田二十貫」

# 柳籠裏三篇研究 (二十一丁)

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮  
瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人  
八木敬一・七久保博

鈴木倉之助 故岡田 甫

252 うっかりと豆腐屋六ツでござります 孤声

紀内||伊達綱宗が高尾のもとに通っていた時、高尾の情夫島田重三郎のつかわした浮世渡平に日本橋で喧嘩をしかけられた。渡平は殺されたが、綱宗もあやうく難をのがれ、京橋の豆腐屋へ立寄って休息し、その札として豆腐屋に伽羅の下駄を与えたという。この話は當時巷間に流布していたとみえ、豆腐屋―伽羅の下駄の句は多い。

また、綱宗が陸奥守であったことから、六ツ等と掛けた句も多い。

主題句も、その際、時を聞かれて豆腐屋が陸奥守に對してうっかり六ツ(陸奥)と呼びつけにしてみましたという趣向である。

明六ツを打ツと御立と三つらいひ 一五八  
六ツを打時に高尾八床へ来る 篇二五

八木||阿達義雄『川柳花街風俗』に、六ツは明六ツで午前六時。陸奥との同音を忌んだ綱宗の近侍は「明六つ」を「明けろく」に変え「明けろくを打ったか」と聞いたが、豆腐屋には最初のことか分らず、暫くして分ったものの陸奥の守に對して「むつ」の音を憚らず、うっかり「六つでござります」と答えてしまったのは大失策であった、と。

岡田||どうも阿達氏のもつて回つた解のように思ふ。

253 牽頭の女房八野へ出した死人ト 五閑  
紀内||不明。「野へ出した死人ト」とはどう

いうことが?

西原||『俚言集覽』に「野に棄られた死人も同前||野へ出した死人とも云」とある。

タイコ氏は毎日遊里等で面白く、悲しく、そして粹な生活を送っているに比べ、その女房殿は、あわれ、野に棄られた死人も同じの有様であると。

「タイコもち遊んだ末がタイコもち」と川柳点を引用して先日落語家が演っていたが、家庭人としては価値0に等しいから、女房殿の苦しみ、哀れさがひとしおである。

女房子のあるとは見えぬ太鼓持 明六松2  
鈴木||西原氏に教えられました。

岡田||滑稽本の作者十辺舎一九は、カン辯が強く、その肖像画を見てもしかめっ面、芸人のピエロ役的人(落語家など)は、うちへ帰れば無口で冗談一つ言わぬのが多い由。

254 がん首を山もりにしてせなあすい 萬夫  
紀内||煙草をすうにしても、きせる・煙草入・すい方にまで気を配る江戸っ子に對して、いかにも無骨な田舎者を評した句。

手の内でせなあふきから廻す也 一五六  
ほつべたをすばめてせなあ吸つける

西原 贊。キセルへ煙草のつめ方が山盛り。  
佐藤 同前。その下卑た動作をおちよくった  
わけであらう。

鈴木 西原氏説に贊。

岡田 贊。

255 上ミ下ではだかへ今の木村入り 狸声

紀内 立行司、木村庄之助を詠んだ句。

上下ではだかの中へわけていり 二〇二四  
上下と裨並ぶいてんき 二二三三

句の「今の木村」は、大阪冬の陣で、若十  
二十三歳で和睦の使者として、徳川方に単身  
乗り込んだ木村庄門守重成をふまえて使われ  
ている。

西原 贊。重成は、香までたき込んでいるの  
に。

鈴木 贊。

岡田 木村庄門守は、鎧甲の敵軍へ上下で入  
つていった。そこまでを述べぬと、「今の木  
村」のウケが利かず。

256 四角なたまご香ムと見て高尾産ミ 如雀

紀内 長唄「吉原雀」にある「女郎の誠と玉  
子の四角あれば晦日に月が出る」という文句  
をふまえた句。

女郎でありながら、情夫島田重三郎に操を  
立てて、綱宗に殺された高尾。母親はきつと  
四角い玉子を飲む夢を見て、孕んだのであろ  
うとの句。

西原 贊。これほどの高尾が生まれる時に、  
定めし、母親の受胎に変わったことがあつた  
であらう。それが、丸くなく、世にもふしぎ  
な四角の卵であつたらうと。

八木 贊。礎稿の方が良い。

岩田 礎稿贊。「四角な玉子」は誠を言うた  
めに出したもの。

四角なる女郎にふつとかい当り 宝九松  
これは諺かと思つていたら、礎稿のいうよ  
うに「吉原雀」とした方がよいようだ。

岡田 同。

257 春の日のたらぬハ花の本意也 高砂

紀内 春の日が短いのが花の本来の姿である  
というのであるから、夜桜礼賛の句ではなか  
らうか。吉原仲の町の桜。

西原 贊。「春日遅々」という語がある。だから  
礎稿の如く「一日」とみるのはどうか。むし  
ろ「ゆく春や」のように、あつという間に春

が過ぎてしまつという「季節」と考えたい。  
即ち「三日見ぬ間の桜哉」で、忽ち散つてし

まう桜。しかし人々に惜しまれることこそ花  
の本意であらうという、擬人化した俳諧的な  
作句と思つ。

瀬川 前説贊。鑑賞する日数の足らず、人々  
から惜しまれるのが本意というところ。

佐藤 西原説で大体よいと思つが、春の日は  
暮れるのが遅いというのが、一般の常識であ  
つたらしく、これを「春の日永」という。見  
事に咲き誇つた桜は、その永い春の日もなお  
足らぬ思いで、咲いているというのではない  
か。一夜過ぎれば風に散る果敢ない命であれ  
ば、一日の時間が少しでも長い方がよいわけ  
で、そこに、花の本意があるというのであろ  
う。

鈴木 佐藤兄説に贊。

岡田 同。

### 川柳塔社常任理事会（3月1日）

▽寺田甚一（岸和田市）八十田洞庵（大阪府）

高瀬霜石（弘前市）3氏の同人推薦を承認。

▽本間満津子句集『銀髪』を川柳塔社発行名  
儀とすることを承認。

▽川柳塔碑基金の現況について報告あり。

▽古希記念合同句集のPRについて検討。

▽本年度の川柳塔勉強会の素案を発表。

# 水煙抄

## 黒川紫香選

和歌山市 古久保 和子

焚火背で困んで他愛無い話

おみくじを何度引いても吉の寺  
夕焼けをすべり台から眺めた日  
陽当りが良くて番犬らしくない  
解凍をした愛少し水つばい

鳥取県 土橋 睦子

透き通る春の小川に恋を消す  
病名をナースに聞いて叱られる  
煎餅をバリバリ噛んで考える  
太陽の恵みで白い飯を食う  
春の旅味覚の宿を予約する

今治市 塩路 よしみ

熊本県 大川 幸子

青春のまつただ中でジーンズ穿く  
他人には言えない愚痴を妻が聞く  
聞こえない振りして聞いている本音  
むかし昔の話が好きなの自在鉤  
重ね着をゆっくり脱がす春の風

名古屋市長 藤井 高子

和歌山県 杉山 精子

小鳥チチと春の序曲を唄い出す  
みどり児の瞳にわたし映ってる  
胸の谷あたりに春の風をよぐ  
手の届く枝には花がつきにくい  
チンと鳴る料理に王様慣らされる

漆黒の髪に触れてはならぬ恋  
色褪せた虹を今でも抱いている  
しあわせな音でグツグツ鍋煮える  
思いつく出の中のあなたは光ってた  
やさしさに触れると回る風車

摂津市 木下道子

心臓マッサージ奇跡は起こらないままに

白い杖残して父の一人旅

黒粹に父がはにかむベレー帽

ジーパンで晴着に負けぬ心意気

特急の窓に夕陽がすべり落ち

香川県 萬沢 翠

お別れのドアは邪険に閉めないで

手鏡に美人美人と言ひ聞かす

ふつうの顔してライバルと会っている

敵の中にどうも夫がいるらしい

湯呑のふちにあなたの飲んだ粉ぐすり

富山県 高畠五月

信号機 過疎のわらべが見上げてる

温泉の素でふたりのフルムーン

ジャズソング古典にいとむ祖父の咳

雪解風 旧友会の便りくる

馴れそめはだんだん畑草いきれ

富山市 島 ひかる

硯箱 亡父の便りが欲しくなる

雪とけてわだかまり解け春の午後

春はあけぼの少女のような恋をする

モンパリーを唄い桜の土手を行く

恋人のように息子に従いてゆく

広島市 流 奈美子

免許証忘れた朝の身の震え

指相撲もう勝負師の顔でいる

温もりを探すか風が孤を描く

象の目に似た自画像でお気に入り

道草のおかげ野草の名を覚え

豊中市 石川 勝

チャップリンに負けない父のボロ靴よ

リトグラフ別に欺した訳でない

聖書手に一層ふかくなる迷い

閉め忘れた窓から夢が逃げてゆく

気の重い日のトーストはまっ黒け

宝塚市 永田 暁風

金ピカの枢車と春の陽を頒つ

春が逝く忘れられない言葉とともに

ほどいてくれる人を想って男結び

手踊りの笛が聞こえるダムの底

男をさうかがう埴輪に似たる目の女

尼崎市 児玉 歌子

三本の指に入って隙がない

やんわりと包んで妻の座を守る

木の芽どき娘も淡い恋をする

充分な距離でゆっくり取る眠り

ちよっという男に注いでいる梅酒

尼崎市 田 辺 鹿 太

音信が絶えて久しい貨車の雪  
本当に好きなお方は秘中の秘  
ゴシップの海で溺れるイヤリング  
男ぎらいの風が香水匂わせる  
転落の動機となった或る詩集

尼崎市 山 本 す み

顔パスの効く友達に誘われる  
よい返事ポストへ温い音で落ち  
手袋を片方なくす春のうつつ  
借りた本朱の傍線が引いてある  
明け暮れを掃いても掃いても散る落葉

藤井寺市 高 田 美代子

大切な友達に逢う切符買う  
回り道気になることを確かめに  
葱一本を刻むわたしがいらしい  
退屈をする暇がない予定表  
冗談でないから困るアイラブユー

静岡市 沢 田 き ん

いたずらな風に時どき騙される  
旅立ちへ必ず入れる保険証  
鬼ごっこしてる枯れ葉の吹きだまり  
言い訳が必ず着いてくる遅刻  
この家を出たら噂が立つだろう

出雲市 原 章 峰

花束をいっぱい投げて鎮めさす  
カチカチに景気が冷える棒グラフ  
病人のことを廊下で聞いている  
お彼岸に亡母と門限まで話す

久留米市 鶴 久 百万両

逢ってはならぬひとと画廊でめぐり逢う  
やがて四月 大地は愛の彩に萌え  
南北朝のはなしを父にまたねだる  
義姉さんのようなひとなら見合います

尼崎市 森 安 夢之助

気心が通い合ってる孫と犬  
助手席の妻久方の厚化粧  
やる気だな螺旋階段駆け登る  
床柱に触れると亡父の貌がある

尼崎市 長 浜 澄 子

口外はせぬ約束が胃に溜る  
黄色いリボンあなたの愛を待っています  
包みこむように女の目が許す  
結び目が絡み悲劇を繰り返す

尼崎市 的 場 十四郎

晩酌で愉快に笑う父が好き  
春の髪若さにゆれるイヤリング  
掌にのせていききたい孫一人  
心機一転 二浪の絵馬が起ち上がる

鳥取県 奥谷彩子

雪道を急ぎ込んで来るいい話  
妻の唄一緒に回す洗濯機  
幸せを詰めて袋を重くする

気がつくとう母の仕草を真似ていた

西宮市 菊池 トミエ

寄り添って老いた根っこが生きている

鯽の眼が私をにらむ大根だき

仲直りしたくてみんな鍋囲む

雪囲い華麗に咲いた寒ぼたん

和歌山市 山口 三千子

ちくはぐなままで夫婦という絆

握手した手の温もりを抱いている

落ち込んだわたしへ亡母は夢枕

お手玉をころがし過去へ走馬灯

熊本県 岩切康子

落ちてゐる絵馬掛けてやる入試願

主婦に徹して頭脳乾き出す

同居して心の違い邪魔をする

あなたとの違いわかってさびしい日

尾崎市 尾宮弘治

さよならの手紙ポストに来て迷う

出稼ぎの夫の背に手を合わす

新聞を配って美味い朝の飯

句碑に来て明りを貰う苦吟の日

尾崎市 野瀬昌子

皿の絵を浮かせて てつき並べられ  
下戸なりに一芸持って愉しませ  
ゆとり等なかつた母の日向ぼこ

五十回忌電話しきりに行き来する

寝屋川市 富山 ルイ子

春風にそむかれてからの人嫌い

馬鹿になつて世を渡ろうか恙なく

故郷土産ミニ傘作り頼まれる

若いからと用事あれこれ頼まれる

唐津市 山口 ふさ子

病気などではおれない程多忙

真冬日に布団の干せる有難さ

海苔を取る手のかじかんで冬の海

他所行きのために作ったよな入れ歯

鳥取市 植田 一京

片目つぶって幸せごっこしています

冗談に乗せて告白してしまふ

子育てにはめる言葉を惜しまない

シナリオの通りにならぬ恋の道

旭川市 朝倉大柏

神も仏も薬をくれない時がある

たまに持つ小金にこけてばかりいる

週休二日欠伸ばかりをして暮れる

転ばないうちは石にも気付かない

京都市 本莊 福子  
住宅地図坂の上とは読みとれず

起こされてはるかに遠い駅で降り

寝返れば見慣れたしみのあるくらし

ボタンひとつ落ちてラッシユは終りかけ

西宮市 山本 義子

まっ白く米洗うのは懺悔かも

投かんし返事くるまで大の字に

厳冬のなかロウバイに春をみる

遠近の眼鏡でこの世つかいわけ

西宮市 牧 潤 富喜子

二ん月の空形相を変えたがる

暖冬に慣れた椿へ今朝の雪

ふと亡父とエスカレーターで擦れ違う

置き傘で濡れずに帰る雨男

西宮市 古 谷 ひろ子

文盲の母に習った物の味

ポイントを押さえる妻に敷かれとく

金利落ちフルムーンの旅もめている

栄転が心弾むと限らない

富山市 鍋 谷 富士子

ランナーが孤独と闘う長い道

水漏れのリズムカルな音響く厨

厳寒を生きる始発の白い息

人の意見こねまわして天の邪鬼

再会が二人を結ぶ赤い糸

何気ない言葉の針が突き刺さる

今だから笑い話で語れます

元氣出せ亡母の遺影に励まされ

香川県 辻 上 よしみ  
今治市 野村 清美

金魚鉢買うまで壺で仮住まい

一枚に億を抱いてた宝くじ

焼香の流れに心清められ

ぽっかりと覚めて埴輪のうつろな目

静岡市 永 倉 柳 華

難聴へつい大声になる対話

口答えしても夫に感謝する

杉花粉いやな予感の春の使者

温い手で目隠しされた日の喜劇

唐津市 山 門 タ ミ

にっこりと譲ってくれた席温し

お二階が一寸気になる別世帯

赤ちゃんをあやす看護婦二人して

右左 点滴の人眠ってる

和歌山市 森 茜

恋はもう遠く安らぐ人の棲む

力みすぎているデパートのアナウンス

道普請何してるやら掘り返し

あらたまり娘に相談の冬の駅

枚方市 森本節子

東京都 清原悦子

この人の言葉信じて賭けてみる  
一番長く住んでた家をあとする

大の病院 私の病院 先ずさがす

菜の花を浮かせ春のお雑炊

鳥取県 中西智恵子

出合いにも別れた日にも春の雨

愛の種まいて芽生える恋の花

一輪の花であっさり愛を告げ

ここだけの話へのつた欲の皮

香川県 堤くに子

金のいる話に力ない返事

お茶漬けで心満ちてる夫婦箸

パパの方が緊張してる試験場

理屈だけ聞けば立派な社会人

河内長野市 大西文次

過疎化して落穂を捨う人もない

公園の花はベンチへ向けて咲く

夜遊びに出たまま犬が帰らない

マニキュアをしている指でつまみ食い

東京都 山口新子

肩が凝るシヨルダーバッグに深いうつ

初春や先ずふる里に手を合わす

想い出のどこまで消せるインク消し

電線のほどよいたるみ皮下脂肪

世の裏を知らない主婦で終わりそう

人事と思えぬ事をふと案じ

お花屋に並んだ花で春を知る

子の夢はやはり私の夢になり

福岡市 井崎ミサ子

久しぶり歌う伴奏ハーモニカ

一日の反省日記と対話する

ラジオには勝手にしゃべらせ読む新聞

あんれまあ再生料理に出る人氣

神戸市 向井泰子

紅白のおまんじゅうよき日なり

紫の着物は亡母と会う時に

平和だな水平線がよく見える

聞き流すゆっくり耳の掃除する

貝塚市 池田寿美子

時刻表 桜が散ってからのこと

生つばを呑むブラウン管のグルメ旅

チューリップの芽に思わず声をかけてみる

棺追うて波乱の過去に冬日和(母逝く)

大阪市 亀井円女

仲良く生きてべべも私も共白髪(愛するチワワへ)

嘘の無いお前のその眼素適だよ

偏見か盆栽に見る人のエゴ

いつの間に親を越えたか娘の意見

新潟県 高野 不二

止まっているのもある時計屋の時計

相談にあっさり言える第三者

テレカードやっても電話かけて来ず

夕飯のおかずも話している電話

酒田市 永澤 裕子

哲学をひとつ固持する自尊心

子の方が金持ち外車乗りつける

おついでに言われて寄ればいつも留守

花日より三寒四温のこちら雪

高槻市 守先 伸子

子等巢立ちもとのふたりに春息吹く

お札くる指むなしくもうれしくも

嫁った娘とメニユーを交わす電話口

特急で来いと真夜中の電話

大阪市 勢理客 トミ子

苦労した人の話は的をつく

躓いて悩んで橋を渡りきる

四年ぶり浪華に雪が降りつもる

玄関ではらりと払う春の雪

高槻市 芦田 静江

退職の花道亡妻の灯がゆれる

モーツアルト老いらくの恋楚々として

まねき猫三寧坂に無駄を買う

破れ傘叱られにゆく羅漢寺

静岡市 小木 久子

さよならをかくるく言って振り向かぬ

少しおどけて悲しい話聞かす友

冬木立ひそひそ話聞いている

静岡市 片平 静代

春風に誘われ翔んだシャボン玉

雛人形飾ると春が訪れる

大泣きをするのも幼児の自己主張

西宮市 亀岡 哲子

引き摺った鎖で犬が駆け抜ける

こころもち顎を上げたら青い空

美しい夕陽だったネ露天風呂

鳥取県 岩崎 みさ江

初耳の顔して母の話聴く

変身のとても上手な流れ雲

奥深く埋めた火種に悔いすこし

堺市 山本 半銭

残る旅もう鈍行の距離となり

ほめられた孫に自分をかさねてる

老犬がピンクのドレス着せられて

尼崎市 吉永 伊三郎

売れ残るリングが歌う早春賦

軽石で踵を擦る終い風呂

眠れない夜の隣ですやすやすと

尼崎市 湊 修水

一日がこんなに長い休刊日

リレハンメルもこちらもすごい雪景色

こころ重い日ダンマリ炬燵背が寒い

尼崎市 河津 正治

妥協せぬ決意の辞表胸に抱く

ため息をついて画廊の独り言

ひと事のような顔して策を練る

松山市 丹下 美津子

霜かんでおいしくなった冬野菜

聞き役に回るわたしもそんな歳

輸入米あの手この手のコマーションヤル

大阪市 三浦 千津子

今日の出来事ひとつの物語

饒舌な人に会釈をして過ごし

いつからか妻にマリオネットされる

島根県 森 茂美

無人駅キップを入れる箱ひとつ

試着室おなかへこませ着ています

消去法かけて残したいまの妻

愛媛県 久保 良子

長男のお下がりを着て野良へ行く

むきになると直球ばかり投げる妻

休耕田うちの与作も老いました

米子市 小塩 智加恵

夫がいるただそれだけでよく眠る

ごきぶりは怖くないのに犬怖い

引き出しにスナックマツチためたまま

岡山県 中嶋 千恵子

ときめきを残すメイクに老い忘れ

金婚へあと一足の歩調とる

知恵袋おだてに乗った今日の席

静岡市 増田 扶美

鉛筆が居眠りをして困ります

目薬をさしてまだまだ明日へ夢

「あら まあ」の奇遇にじっと手を握る

今治市 白石 サダ子

方言をまる出し集金親しまれ

度忘れへどうもどうもと頭下げ

いい目覚めやる気ふつつふつ熱いお茶

羽曳野市 芦田 絢子

それなりに生きたと思う豆の数

通り過ぎた嵐のことは忘れよう

チキンラーメンその素朴さがいいのだよ

河内長野市 印藤 智子

自分だけ老人でないと思ひ込む

広告になかった坂道ニュータウン

昨日はごめんなさいと結び文

米子市 鹿島 蘭

改札にお札をいって駅を出る

友を得て大正ロマンよみがえる

咳払いきこえマフラー締めなおす

松江市 佐野木 みえ

いち早く合格知らせる雪の道

早春賦聞こえて来るよ字び舎に

優しさと裏腹頼りなさ感じ

茨木市 島元 ふみ

鏡より妻の助言を信じよう

ふと出刃の手元ためらう魚の目

縁先のないマンションに引きとられ

岡山市 土居 ひでの

それぞれのリズムで送る朝の靴

孫からの注文相次ぐ田舎味噌

四季の花咲かせ迎える故郷の駅

尼崎市 中澤 向西

祝い酒愉快な祝辞座が和む

美しい嘘がやる気にさせている

飾り気のないかあさんで力もち

羽曳野市 福田 悦子

ご一緒にゆれませんかと春の風

新人が保険屋さんの的にされ

窓開けて春のうわさが飛んで来る

鳥取県 権代康女

旅立ちに母がお守り入れている

素晴らしいみどりに愛が芽ばえそう

見せたいと思ひ写真に撮ってくる

八尾市 村上 剛治

小さい春 恋する猫がふれまわり

耳許へ嬉しい返事そつとくれ

終点に向ってみんな駈けている

鳴門市 八木 芳水

なんだかとあれど日本は平和です

しきたりを一歩も退かぬ母がいる

敵持たぬつもりで敵の中に居る

今治市 越智 青園

目の鱗はがして名句読み返す

筈へ脱いでごらんと陽がまぶし

賞味期間切れた定年退職者

寝屋川市 土井 英明

あの時の君のひと言葉右の銘

そろばんが期待どおりに動かない

表向き研修会にしておこう

寝屋川市 後藤 黎之助

今日のこと世界がみてるぞ永田町

おい息子一度話そう人生を

勘だけでここまで来たが行きづまる

寝屋川市 宮崎 菜月  
すぐ本気 未だ大阪人になれず

この辺でお会いしましよかと未だ見ぬ彼  
ものの芽と競う火の粉を持っている

枚方市 前 たもつ

許すこと知って心が広くなる

B型のせいにしてますちらんぼら

見た夢の数で人間 幅ができ

寝屋川市 井 上 すみれ

初心に帰りたいが雑音多過ぎる

祖母の味高野豆腐とかぼちゃ炊き

五歳の孫英語会話に目を丸め

岡山市 大石 あすなろ

ふるさとに僅かにのこる四季の詩

昨日のこと忘れたふりの聞き上手

負けん気の強い相手で小うるさい

香川県 松 岡 遼 雲

犯人に妻と子があり友があり

パチンコヘベントに乗って行く男

親犬も仔犬も春の風が好き

広島市 元 林 光 子

寒い部屋シクラメンだけ春のよう

孫の嘘半分信じてだまされる

初孫を両家で祝う雛まつり

泉佐野市 稲葉 洋  
家中と言えど二間の探し物

なみなみと互いに酌いで身を案じ

新品のスニーカーだよ試歩の脚

尼崎市 岩 倉 キク子

森の下草やさし褥に樹樹ねむる

時間厳守きつと遅れる人が居る

地球儀を回せばどこも隣組

静岡市 浅 子 まつゑ

ボランテニア同じ話を聞いてやり

遅刻でも叱られず済む夜学の子

ちっげけな自惚れ抱いて生きて居る

兵庫県 森 脇 和 子

病院で生い立ちを聞く待合所

青空に憧れているシャボン玉

もう少しつづきの欲しい赤電話

高槻市 執 行 稲 子

はんなりの関西弁がとても好き

母さんがちよつと戸惑う声変り

春先の鏡わたしを過剰にする

大阪市 一 本 勇 太

自問自答低空飛行ばかりする

老いボツンと愚痴も供えて石地蔵

燃え尽きた線香花火の人嫌い

クラス会本音は顔に書いてある  
有田市 生馬 芙美子

輪の中の本音一つを信じてる  
さりげない対話で拾う人間味

松江市 松浦 登志子

寒い日は味付けよりも熱い汁  
ゆっくりと合格名簿みる平和  
風の音水の音にも春を待つ

熊本県 高野 宵草

縫いあげた羽織着てゆく針供養

若さとはいいなアなんでも美味しそう

頼られてみれば愚かな己が居る

熊本市 遠山 夏生

あてないが約束手形切っておく

じいちゃんと孫は折り合い良いけれど

花活けて待つ人がある窓開く

熊本県 増田 一乘

出る幕が出来て喜ぶ趣味講座

陽もうらら一家あげての潮干狩

双方が歩み寄っての改革法

十和田市 阿部 喜久江

口下手が上手に手紙書いている

上役の椅子がゆさぶりかけられる

尾ヒレつけ気ままな噂風に舞う

いつからか惹かれてたこと疎ましく  
拾い読みしただけの本積んである  
兵庫県 円増 純子

迷惑と気付いていないから困る

相生市 中塚 礎石

ふるさとの魅力が足を返さない

柱時計生まれたときから見て暮らし

リング嚙む音もさみしく独りいる

兵庫県 中野 とよ子

小走りが今日の私を変えてくれ

腰痛とも言えず気力で歩くだけ

何げない腰のおかげの汗うれし

羽曳野市 徳山 みつこ

童謡を歌い孫より先に寝る

朝刊も夕刊も見ず冬の暮れ

北風の公園孫を放さない

岡山県 江口 有一朗

貧しさが育てた心の温かさ

大正の香りも少し持つて生き

善戦はしたが惜しいと負け勝負

大阪市 川原 章久

また元の顔で夫婦の朝の膳

おじやま虫追われぬうちに寝るとしよう

やれば出来るすつくと今朝は靴が履け

姫鏡すこし淋しい春立つ日

大層な雪に姿を見せぬ鳩

雪の日の塔は無口になってくる

京都府 小林英子  
広島県 森川 拔智

買うまでは売場で子供の頑張り屋

人生は真直ぐばかり歩けない

瀬戸の海眺めて今日も医者通い

佐賀市 古川 かずのり

春一番聞き耳立てる花の種

空港で鱗を落すバスポート

頼られているから湧いてくる勇氣

出雲市 西尾 和子

暇な日に私の好きな本開く

ぶつきらぼうだけど心は温かい

春の音聞こえるかなと雪をかく

豊中市 田 中道胤

妻の留守切れない包丁研いでいる

乾し物の影が揺れてる磨り硝子

目覚めればあたり一面春の雪

尾崎市 向 井末貞一

惜しまれた会社を訪えば素っ気ない

いらだちが増す来ぬバスで寒い朝

朝まだき勝手に目覚む遠足日

大器とは見えぬ二代目温かい

故郷の話 大根吹きながら

親戚がこんな有った祝い事

綾部市 藤田芳郎  
鹿児島県 大山舞鳥影

落ちこぼれが秀才になる披露宴

墓碑銘の若い中尉は特攻か

借景の順でマンション予約済み

姫路市 小井里 兆

惚けぬよう子に心配をされている

野良犬が腹見せている良い日和

ニューヨークの息子に送る守り札

和歌山県 上岡 正直

定年後春の日ざしを部屋に浴び

山を削り谷を渡ってハイウエー

テストテスト学生時代懐かしむ

枚方市 濱田良知

頼まれもせず一肌脱ぎたがる

病床の友に気休め吐いて来る

役降りてまだ愛着のある名刺

宇部市 中村三良

こだわりも消えると餅も丸く焼け

弱点を突かれて俯返らない

肩書を外してからの気の弱み

亡友偲ぶ茶房の外は冬の雨  
短篇で終るすべなき友情よ

大阪市 江城 修史

ペラペラと不況にあえぐ顔でなし

吹田市 馬 淵 光子

石畳 踵気にするパリの町

モンマルトル未来のユトリロ買うてみる

いつ見ても特等席を占める猫

今治市 渡 邊 伊津志

溺れたいのに分別が邪魔をする

海に出て人の喝采ばかり聞く

海望む墓地で聴きたい風の歌

和歌山市 山 根 恵美

浴槽で胎児のように浮いてみる

イヤリング女の見栄を弾ませる

ノーマーク女の本音さらけ出す

唐津市 浜 本 治 幸

趣味一つ増やして惚ける暇がない

言わんでもええ事言うて悔い残り

子も孫も妻が留守では長居せず

唐津市 市 丸 晴 子

約束が果たせず小指折れたまま

自動ドア用ない人が風を入れ

両親の期待くいこむランドセル

里帰り三日で話題は夫のこと

安らかな顔にもどって灯が消える

まっすぐに見られうかつに下をむく

高松市 松 本 翠  
静岡市 柳 沢 た ま

花の名を誰がつけたか福寿草

めぐり逢う数だけ別れあるつらさ

どん底で知った世間の裏表

和歌山市 木 村 親 路

社のバッジ一つに個性しばれる

こちらから診察したい医者 の嘘

母さんのコピーのような嫁が来た

唐津市 山 門 幸 夫

沸きに沸く八〇〇号の誕生日

進学の子を指折る老い二人

合格の電話に母は絶句して

兵庫県 西 井 つや子

立春へ少し和らぐ冬木立

輪になると楽しい花が咲いてくる

平凡に暮してますと便り来る

寝屋川市 坂 上 高 栄

荷を出して部屋の広さにじっと立つ

栄転を送る乾杯ほろにがい

植木との対話ストレス消えてゆく

寢屋川市 北岡 波留吉  
急用をこなし新人見直され  
故里を恋しくさせた梅便り

内助の功改めて知る受賞の日

堺市 桜井 莊次

耳の痛い話半分切り捨てる

男と女の句詰め込むラッシュアワー

見所をつまみ食いしてバスツアー

大阪市 尾崎 黄紅

ピアノ買ったが日月の飾りもの

心労が増えて過労が減る不況

寒いだろ郵便受けも空っぽだ

藤井寺市 楠 昭子

見ないよな振りして見てるコンパクト

笹持って来いの神だけ不況知らず

古い二人果てしなく続く皿洗い

兵庫県 酒井 靖子

会食が友情の糸強くする

友四人旅の楽しさ追いつづけ

盛んだと聞いて私も燃えてくる

寢屋川市 瀧本 八十八

花街の口紅濃からず薄からず

馥郁と湯島の悲恋こぼれ梅

世相切る漫画笑いと皮肉混ぜ

松山市 竹田 さやか  
ふところの深さが森のような人  
青春の森で得たもの捨てたもの

主婦の座で家族をつなぐネジになる

箕面市 木村 天弘

婚約を知らせてくれた薬指

受けて知り掛けて分かれぬ迷惑度

出稼ぎも母国に帰る不況風

兵庫県 倉垣 恵美

ひとひらをむしられ咲いた寒牡丹

下手な嘘ついてとつくに見破られ

ふる里にぬくい炬燵が待っている

泉佐野市 内田 倫子

嫁姑その溝に孫 橋かける

二種類のお雑煮作る新家庭

見間違う晴着姿の隣の子

大宮市 新井 圭二

合併を出張先の宿で知る

不況風弱者に向って電車道

政治討論 生でなければ噛み合わず

寢屋川市 太田 とし子

鏡には映せぬ嘘をふところに

正直な鏡が少々にくくなる

違うこと考えている生返事

東大阪市 松山 隆  
早咲きも奥手もあつて花の里

此の詩には曲をつけたい冬の月  
いま一度一期一会の花の季に

島根県 福岡 博利

火葬場の点火の音の地獄音(母逝く三句)  
骨拾うげになきがらの音悲し  
日を追うて叱られた日の懐かしさ

沖繩県 杉谷 一栄

息切れに挑戦してる老いのペン

洗剤を替えてみようかコーマーシャル

腑に落ちぬ留守に受話器を置きしふる

川西市 田中 喜俊

石蹴つて足の力をためしみる

娘から好みの茶菓子宅急便

病みあがり知らん顔する友をさけ

高槻市 乙倉 武史

仲違いするのを待っている野党

冬山を甘く見ていた節がある

人の良い父は何時でも斬られ役

和歌山県 藤井 春子

呱呱の声胸撫でおろす笑い声

酒の席時々餌になる本音

人生は時々馬鹿になる平和

大阪市 中井 正秀  
まあ飲めに金の話が言いにくい  
札所巡り二ヶ所残して妻は逝き  
妻が逝き酒で済ませた三が日

出雲市 荒木 恵美子

不景気の風も吹かない番外地  
おめでとうはずんだ孫の電話口  
還暦を過ぎて手習いいろにはほ

泉佐野市 河原崎 礼子

出勤を見送ったさあひとりです

明日には芽が出てきそう土割れる

連立の不協和音が聞こえます

流山市 神田 治

もっとしっかりせんかい男やもめたち

ペンペン草愛されていることを知る

妻たちの病が増えている不況

柏市 上鈴木 春枝

恵まれた生活足し算しか知らぬ

沈黙もいいなあ君の鼓動聞く

野仏へ紅白の梅咲き揃い

岡山県 福原 悦子

受話器置くそれから迷い深くなる

沢山に欠点あるが好きは好き

躓いた石が縁故を強くする

香川 田 中 フ ミ

平穩に暮らし大空見える幸

弾んでる積りで何時か肩を張り

不況でも少し見栄はる熨斗袋

鳥取市 中 澤 正 恵

おだてにはまだまだ乗れる軽い足

外は雪 焼き芋フーフーしてあげる

欠席と決めた電話の低い声

和歌山県 中 後 清 史

年頭の決意が揺らぎだす日記

振り向いてほしい小石を投げ入れる

ロボットが完全雇用に起ち上がる

藤井寺市 川 端 六 たかし改め 点

入院の前夜引出し整理する

齒に衣を着せない美女でまだ独り

口開けて歯医者者の問いを持って余す

岡山県 牧 野 秀 香

曾孫のかるたのお相手老母の役

移る世に変わらぬ四季の詩に生き

しんしんと雪降る夕餉の鍋の味

唐津市 福 島 紀 一

三月月が刃物のように媚をみせ

桃の花セーラー服より紺がすり

砂浜が無くなってゆく街の地図

枚方市 八 田 敏

旅慣れぬ妻支度してもう疲れ  
若い娘に挨拶をされうろたえる

八尾市 大 内 朝 子

淋しくて私の心酒びたり

思いきり背のまん中を流したい

和歌山県 森 口 恵 子

ひとり来て募囲気変えている女

素面ではとても言えないコップ酒

青森県 加 川 栄 川

甘酒はもの足りないとお難さま

四月馬鹿女の嘘をけしかける

西宮市 岡 本 道 子

ひとつづつこぼしてからっぽになった

安全ピンで止めたわたしの迷子札

吹田市 古 川 喜美子

強力な味方というが重荷です

袷足の白さ会いたい人がある

岡山市 山 磨 行 子

次の波くるまで静かに茶を注ぐ

なりゆきで思わずハイが出たものの

吹田市 西 岡 豊

止まり木の右も左も無位無冠

名物に一目惚れする旅靴

静岡市 三浦つね  
回覧板ついでに噂聞いてくる  
献血で恩を返せるありがたさ

兵庫県 北川とみ子  
無意識に鼻唄が出る満ちた日々  
ささやきを聞いてときめく春の夢

豊中市 松岡久留美  
生涯を借家住いの子沢山  
負け嫌いな素直になれぬ老いの性

富田林市 山原昭水  
ライバルも頭痛薬をのんでいる  
趣味講座 講師昔の茶目生徒

兵庫県 安達厚  
糶殻をかぶせて大根冬衣装  
目覚めたら元の二人になっていた

鳥取県 山内芳江  
食べて寝て肥ると言って悩んでる  
あいまいな言葉に何か引っかかる

福岡県 本田忠男  
年賀状来るから湯宿近くなる  
気取るから自由が独り歩きする

寝屋川市 籠島恵子  
家族調査予備校生の欄が消え  
妹が手紙よこした久しぶり

河内長野市 妹背尽呂久  
在りし日のライバルと酌む温い酒  
なにもかもが一期一会の旅日記

和歌山県 村中悦男  
鬼は外妻真剣に豆投げる  
妻のうそ真顔で聞いてやるゆとり

島根県 児玉幸子  
霜柱ザクザク踏んで音高く  
チューリップ沢山生けて春ですな

徳島県 濱田白柳子  
浜風の中で薫風句碑にあらう  
出張の夫送り出し気が軽い

唐津市 岩崎實  
まだ読まぬ書棚の本がつぶやけり  
春の雲呼んでる土手の猫柳

大阪府 今西静子  
苦労の過去思えば涙流れでる  
お気のどくだけで片づく他人の死

岡山県 伏見すみれ  
争うて空しい心風が抜け  
希望通りにならない浮世だと悟り

八尾市 生嶋ますみ  
ライバルの作品ばかりほめる妻  
鯖半身猫とわけ合う老夫婦

年の功言葉の裏を読んでいる  
ランドセル背負い鏡にうつして見

静岡市 大村 正雄  
松江市 浦辺 静江

大空へ大声だそう冬ごもり  
海の幸舞込み囲む鍋料理

米子市 木村 春枝

病院の紹介状が手に重い  
旧姓の自己紹介で和む会

八尾市 村上 ミツエ

人の好い母にイライラしてしまふ  
川柳が治してくれた今日の鬱

兵庫県 玉田 三重

正直な男で敵に睨まれる  
柔らかな言葉を包む齢になり

姫路市 福島 姫女

女ひとり煙草くゆらす喫茶店  
宿下駄で外湯巡りの雪を蹴る

香川県 堀田 茂穂

子の気持聞き出す妻を見学す  
訥弁に一步も退かぬわけがあり

鳥取県 小西 五十鈴

母逝った坂たどりつく齡迎え  
ゴキブリがわが家にもいていがみ合う

羽曳野市 酒井 一壺  
先祖からの遺産墓と体だけ  
ベレー帽忘れて頭落ち着かず

神戸市 岩田 信義

喜怒哀楽みんなポストに吸いこまれ  
職退いて電話で遠吠え繰り返す

池田市 木村 一笛

目途の無い金策の夜無情なり  
口紅をつける具合で魔女になる

鳥取市 丸山 希久代

かた言に通訳がいる赤い靴  
オモチャ箱今度くるまで片づける

姫路市 丸尾 はる子

陽だまりに憩う幸せわび住い  
対岸の花なればこそ人は褒め

出雲市 中村 トク子

今年また届いた彼の年賀状  
廃校になるとか聞いたわが母校

岡山県 清水 悠貴女

いい夢を見たくてふとん干している  
逢うて来た余韻をたたむ帯たたむ

千葉県 大川 一雄

運のない道を変えてはツキを持つ  
梅まつり古希と喜寿とが鉢を持ち

島根県 菅 田 かつ子  
アベックの若さにこちら押され気味  
指切りをしたけどおもちやの名を忘れ

河内長野市 水 谷 正 子  
み仏にぼっくり願ひ医者通ひ  
調子よい返事しといて鬱と合う

鳥取県 橋 本 孝 原 孝由改め  
隣には似合ひの夫婦住んでいる  
気取りともとれる和服がよく似合う

香川県 高 橋 宅  
フリージア株分けて春を待つ  
方向を最後に変えてすねる独楽

島根県 三 代 朝 子  
温かい言葉ほしがる老いの耳  
預金通帳から旅のプランをたてている

高槻市 江 原 秀 夫  
二本目で親友になる縄のれん  
六面が鏡の中に居る孤独

島根県 安 部 美 恵 女  
手続きを終え年金の春楽しみに  
景気来い不況を飛ばす豆をまく

唐津市 野 田 旭 恒  
魚屋に釣銭忘れた釣り帰り  
懐炉抱き今日も大寒釣るマニア

天理市 飯 田 昇  
不景気に意欲出す人出さぬ人  
庭雀話がはずむ垣根越し

米子市 服 部 朗 子  
カラオケに遣り切れぬ身をぶつつけた  
町の奥 雪が薄ら別天地

大阪市 平 井 露 芳  
月見うどん最後は月をうのみする  
修整液で白い目かくしされた文字

岡山県 国 米 きくゑ  
私にも真つ赤な血潮流れてる  
藁ぶきの屋根につまっている民話

島根県 松 本 聖 子  
大雪にアヒルが一羽迷い込み  
部屋じゅうへ広げて一杯レモンティー

八尾市 平 川 幸 枝  
おみくじの結び目とけて縁が切れ  
お先へどうぞ私のペースくずさない

今治市 村 上 久 美 子  
気楽さの裏は佗しい無位無冠  
相槌を打てば火の粉がふりかかり

鳥取県 美 浦 美 代 子  
音痴だが宝塚<sup>つか</sup>にあこがれ夢を見る  
内緒金留守に数えて生きている

茨木市 久保田 惠美子

夕焼けや鴉切絵の中で啼く

じゃんけんのリズムに乗れぬ老夫婦

東京都 小寺 九

愛妻を自慢の種にはしご酒

少しなら俳句になった春の雪

香川県 宮内 沢 惠

豊かさになれておいしいものがない

間違ひ電話の声が聞こえない

出雲市 園山 かおる

やっと手が届いたとたん電話切れ

妥協するために打たない意地の杭

富田林市 欄 智 久

放課後の教室鍵っ子宿題す

ワンテンポずらして女はぐらかす

姫路市 服部 一 典

待たされて今来たばかりと時計見る

鼻毛抜く仕草で社長案を練る

香川県 たかはし たみ

夢ん中みんなが宇宙歩いてる

まがってる細いいっぽん道歩く

大阪市 中 橋 惠美子

雑巾をゆすぎ晩菜考える  
りんご描くただ置くだけに悩んでる

鳥取市 谷口 百合子

出勤に短い化粧から済ます

危ない橋一途に渡る女がいる

島根県 槻谷 仲子

冷静になって晴れの日を待とう

処世術それなりに今持っている

大阪府 八十田 清 造

犬苦手セールスそこは避けている

校友会御寄付を期待しています

青森県 諏訪 明 雄

Gパンをさっさと替えて読経する

雪しんしん女ひとりの小正月

唐津市 入江 喜久亭

古い独り路地の屋台で忍び酒

肩寄せて飲んだあの夜の恋の酒

岡山県 富坂 志 重

甘酒に女ばかりの笑い声

人一人許す言葉が見当らず

唐津市 江川 青 琴

大寒の言葉通りの寒い日々

愛着が沁みてガラクタ捨てきれず

河内長野市 柏本 靖子

装いのヒント アナウンサーから貰う  
銭湯で儲かる話耳にする

古傷をねちねち責める手酌酒  
障子張り後始末またひと波乱

松江市 安食友子  
広島市 中村要

正論が尻尾を巻いた政治力  
パラボラが聴いてる星のメッセージ

米子市 池尻保子

跡継ぎがじつと眺める父の山  
ランドセル雨のおむかえ待っている

海南市 谷口義男

責任は持たぬ聞くだけ聞いて置く  
不景気も不況もみんな窓の外

泉南市 坂根流水

高齢化 日向ぼっこはして居れぬ  
ねこ柳小川のほとりはや春を

羽曳野市 西村りつえ

調子づき仮面がずれた花の宴  
道草はトンボに蛙 理科が好き

豊中市 月原方郎

満員の車内で咳が止まらない  
お互いに幸せ犬と戯れる

島根県 岩田三和

枯木あつめたき火をしよう餅焼こつ  
海の泣く声が聞えてやかましい

藤井寺市 菊地繁男  
何を待つ郵便受けへそわそわと  
陰口でそすれば当人顔を出し

大阪市 池田一男

読んでない本 本棚で泣いている  
急ぐのに話し中とは腹が立つ

鳥取市 杉本孝男

お下がりの晴着で祝う慎ましき  
濡れてから庭石彩で招き入れ

鳥取市 谷口侑里

プライドを捨てたら敵がなくなつた  
夫婦でも夜毎の夢は違つてる

岡山県 福原辰江

ぶつつけて消火器になる相手  
言い訳は涙でわかる母の膝

静岡市 中西雅

キャップ付けちび鉛筆をいとおしむ  
老いた犬懸命に尾をふるいのち

和泉市 加山よしお

紅を買うあす逢うことの嬉しさに  
盃重ね徳利いよいよ艶を増す

島根県 武島ちよえ

近道をした気もないのに古希に会い  
老いて子に従うはずが頼られる

良い旅も薬お供に安堵感

和歌山県 吉田 武治

時間一パイあつて進まぬ匂の焦り

八戸市 島田 昭治

かくれんぼかくればなしになりたくて

無器用に生き貧乏に惚れられる

池田市 金崎 峰子

留守番の電話にしゃべる味気なさ

すき間なく詰めて詰めての宅急便

田川市 松元 寿永

愛情は言わぬ女にある打算

駆け足で来る定年にある不安

羽曳野市 山本 たけし

握手などしない男の意地ひとつ

クレームも言えず日陰の鉢の花

岸和田市 寺田 甚一

石橋をたたいて男魅力消え

天の声 天が聞いたら怒るだら

愛知県 吉本 菁風

計算が優先されて夢が消え

過去ばかり話す悲しい巡り合い

鳥取市 山本 正光

あご紐の伸びた帽子で口あけて

真夜中に妻の寝言で眼を覚ます

鍵だけは持っても中味のない金庫

鳥取県 橋谷 静江

主婦の座を卒業したい寒い朝

泉佐野市 大工 静子

あの日から裏切り通した人を恋い

年金は孫を笑顔にする秘訣

大阪市 乾 哲静

女子マラソン見下ろし惚ぶ天守閣

義理チョコも貰えぬ顔が飲んでいる

橿原市 西本 保夫

未亡人の孤独物干台にある

軍隊のメシ喰って来た正義感

大阪市 出山 美津枝

爺ちゃんも美人に弱いところ持ち

財産も肩書きもなく楽に生き

米子市 永井 三津子

背伸びする寡婦の本音を闇で吐く

白き顔 命の深さ教えてる

東京都 鮎川 魚神

席譲るいらぬと老鬼仁王立ち

鍋の中のはせた顔のネギがいる

◆ジュニアの部

香川県 田中 なみ子 (小6)

負けぬようこぶしで力つき上げる

玄関を一步出るなり後もどり

# 秀句鑑賞

同人吟 新家完司

—3月号から

氣を変えておかずの味を褒めてみる

榎本吐来

沈黙の気まずさを意識しながら、差し向かいで食事をするのはつらい。そろそろこちらから折れてやってもいい頃だ。今更「愛してよ」とか、「きれいだよ」とは死んでも言えない。ここは一番思い切って「おかず」でも褒めてみるか。ここにも優しい男がいる。叩いたら直るテレビを捨てられぬ。

三宅保州

わたしと同じだ。わたしのテレビは叩いた時だけ天然色になるが、五分ほどすると白黒になってしまふ。叱った時だけいい子になっている子供のように面白い。完璧に動いている時は只の機械だが、故障して初めて血の通ったにんげんのような動きをする。機械は捨てられるが、血の通ったものは捨てにくい。

誕生日うれしくないと言にくい

坪田紅葉

誕生日が嬉しくもなんともなくなるのは何歳ぐらいからだろうか。健やかな成長の過程を祝う「誕生日の御祝い」は、せいぜい十五歳ぐらいまででよい。しかし「家族ごっこ」にもルールがあつて、嬉しそうな顔をしなければならぬ時に「うれしくない」と言うのは、ルール違反である。

福井県丸岡町が募集していた、日本一短い

手紙コンクール「一筆啓上賞」の入賞作品が発表され、大きな反響を呼んだ。

NHKテレビでも特集を組んで主な入賞作品を紹介し、作者にインタビューして、その手紙の背景を聞き出していった。わずか三十五字以内の短い手紙であるが、いずれも胸が熱くなるほどの感動を受けた。上位入賞作品に共通していたのは「本当の気持を飾らずに書いた」ということである。「事実」「実感」というものの重さに圧倒されながら、川柳も同じだなと思った。

「事実」というものは、ただそれだけで人の心を持つ力を持っている。「実感」は「事実」とは異なるが、作者が「本当に感じたこと」であるから虚構ではない。

虚構の句が人の心を打たないのは、「うそくさい」もの、「うさんくさい」ものが必ず残っているからである。作者自身が感動せずに、言葉だけで捏ね上げた作品に読者が感動しないのは当然のことである。

その辺で買ってきたのに喜ばれ

小池しげお

手間をかけず、吟味せず「その辺」で買ってしまつたのが悔やまれる。「その辺で買ってきたものだ」と分かっているも素直に喜んでくれる人はやさしい。うしろめたい思いをしている人もやさしい。

しんみりと聞いている方も親がない

白石春嶺

しんみりと聞いている人の背中が見える。その背中から様々なドラマが想像できる。親とは死に別れたのか、生き別れだったのか、それとも生まれたときから……。親を偲ぶときは皆つなだれる。

笑いながら気絶しそうな傷見せる

江口度

小さな傷は自慢にならないが、大きな傷は自慢になる。「気絶しそうな傷」なら大威張りだ。見せられた人は、大げさに驚いてやるのがエチケットと言ふものであろう。にんげんは面白い。にんげんのすることは面白い。

病人の靴うつすらと埃被る

岸野 あやめ

病人の靴は悲しんでいる。主人の掃りをジツと待っている仔犬のように。靴は散歩をしたいと思つている。春の道を、元氣になった主人といつしよに。春の土を踏んでピョンピョンと歩いてみたいと思つている。病人の靴は祈つている。早く主人が元氣になつて戻つて来てくれるように、祈つている。

仁王さん めしはまだかと立っている

澤田 千春

思わず笑つてしまった。そう言われてみると、阿形は「ハラガヘッタアノ」と怒鳴つている顔に、昨形は空きつ腹を我慢している顔に見える。「腹減り男は腹立ち男」で「早いがゴツツオ」である。

ニュートンの法則通り墜落す

横田 英詩

笑つてはいけなないのである。笑つてはいけないのであるが、笑つてしまふ。死体が散乱している事故現場を想像すると、飛行機事故は悲惨である。しかし、墜落しても墜落しても、自然の法則に逆らつて空を飛ばつとするにんげんの姿は、滑稽である。飛んでいる飛行機は美しいが、墜落した飛行機は醜悪で、にんげんの知恵の限界を晒している。

留守番の電話へ小言いうておく

時広 一路

改まった口調で、留守番電話に小言を言つている姿が可笑しい。録音の小言を苦笑しながら聞いている息子（娘）を想像すると、また可笑しい。叱るとか叱られるという、極めてにんげん的な行為が、無機質な機械を介して行なわれるということの、滑稽さと寂しさと。文明の利器は、思わぬ喜劇を生む。

古里は達者なうちに帰るもの

工藤 吟笑

老後はのんびりと墳墓の地で、と願う人も多い。しかし、人情こまやかな古里の人たちとて天使ではないし、金の成る木で食べている訳でもない。みんな生活に追われ、必死に生きていく。病葉のようになつて帰つて来た人を、歓迎してくれるかどうか。身も心も疲れ切つた人にこそ、古里が必要なのであるが。

ときめいてはじめて出合うような海

坂口 公子

山や海が輝いて見える時。生きとし生けるものが愛しく思える時。見慣れた風景が、初めて出合うものの如く新鮮に見える時。それは、恋をしている時である。生活に疲れた目に写る海は、ただの水溜り。カモメが飛んでいることさえ気がつかない。

再就職 六十五歳の顔上げて

西岡 洛醉

何歳でリタイアしようかと、それは個人の自由である。しかし、働ける体力や社会に役立つ能力を持ちながら、毎日を無為に過ごすのは、単なるナマケモノである。厳しさに立ち向かおうとする男の顔は美しい。

手を叩く役にはるばる出かけよう

武田 帆雀

手を叩くだけの役も重要なのだ。花束を貰う主役だけでは式典にならないし、主役も張り合いがない。いつか、拍手をしてもらう立場になる可能性なきにしもあらずだ。

ぼつくりと逝けばよろこぶ子がふたり

吉田 笑女

親が子を「どんな姿でもいい、生きてさえいてくれたら」と願うのは当然の情としても子が親をどのように思うとは限らない。「寝たきりにならず、ポックリと逝つてくれたら」と思うのも自然の情であろう。

躡る親のしつげが出来てない

西村 黙光

羨の悪い子は猿より始末が悪い。その子が親になつて、羨が出来ない。ヒステリックに叫ぶ親と泣きわめく子供。そういう状況に出合わないように祈るだけである。

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—三月号から

山下 美津留

昭和一桁デコボコ道に慣れている

高田 美代子

昭和の大恐慌に始まり、満州事変・日支事変・第二次大戦を経て戦後の混乱期、好不況のくりかえし、ほしがりません勝つまでは、使い捨ては美德、正に昭和の道はデコボコでしたね。

風の子はいないブランコ揺れている

長 浜 澄 子

エアコンの部屋で、学習塾で、机に向かっている子供たち、なんとも佻しい世相、自然から遠ざかって行く子が増えていますね。

掘ればみなつながっているゼネ汚職

越 智 青 園

昔から汚職の種は尽きない。蝸々と疑獄事件は後を絶たず、蔓をたぐりあげるとそろそろ大物小物が出てくる。ゼネコン汚職は特にひどいですね。

齒磨きが確実に減ってゆくのち

永 田 暁 風

間違いなくすり減ってゆく命を真正面から捉えたきびしくて深みのある句。

核心に迫ると強い風当り

竹 田 さやか

町に新風か、職場の改革か。核心に迫ると村八分、首切等々。現状を守ろうとする側からの風当りはすごい。風圧に負けないよさに。

一方へ擦り減る靴よ人恋し

岡 本 道 子

愛する人への純粹な思慕の念が心の底からふき上がってくるような心温かい句。

妻の灯がとつても温い旅疲れ

森 安 夢之助

水府の句に「ぬぎすててうちが一番よいという」がある。旅から帰り奥さんの顔を見た途端やれやれ家はやつぱりええなとなる。

二次会の方へ木枯し背中押す

木 下 道 子

気の合う同士で二次会しましょうよ。背中を押しているのは素敵な男性でしょうか、やさしい女性でしょうか。とても愉しい句。

いたずらの始末を聴いている拳

杉 山 精 子

どんないたずらをしたのでしょうか。本人

が始末して来たのか、お母さんがして来たのか。拳を握って聴いている父親。近ごろ殴る親は少なくなりましたね。

しまい風呂一人相撲の夜が更ける

芦 田 絢 子

片付けを終えて主婦が風呂に入る。今日一日の出来事をふり返り、明日の予定を立てる。あれもこれもと、ついでに作句もしておられるかも知れませんね。

残された余生は未知のままで良し

江 城 修 史

いつ死ぬと解ってしまえば、じつに佻しく悲惨な事です。未知であればこそロマンが生まれ希望に夢が膨らむ毎日があると思います。うそ一つ涙も添えて子を叱る

小 塩 智加恵

猟銃のある奥の間で待たされる

田 辺 鹿 太

女蝶ひらひら春の子感へ香を放つ

流 奈美子

仏壇を開くどうにもならない日

児 玉 歌 子

癌告知 我がことなれば取り乱す

大 内 朝 子

悪い奴ばかりいるよなニュース聞く

朝 倉 大 柏

## 芽を食べる

林 荒介

今年も露の臺の季節が来た。故郷の従姉妹に電話を入れたら、二月上旬の雪がまだ沢山有るとの返事。去年は雪が少なかったことを思い出した。圃場整備事業とかで広い田んぼになり、少年のころの記憶とは様変わりしている。ドジョウが沢山とれた用水路は三面コソクリ、今では一匹のドジョウも捕れなくなっている。田んぼの畦も様変わりして、昔のように露の臺も芹も無い。それでも田舎のこゝと、減反政策で放置された山田があり、湿地の田にはこの季節、芹の赤ちゃんが地面に張り付いている。畦には露の臺があるはずだが今年も雪の下、ひたすらに雪解けを待つ昨今である。

農家の次男に生まれた父は、僅かの田は小作に出して村役場に勤めていた。家の南側の小川を挟んで七畝ほどの畑があって、お袋が花や野菜を作っていた。小学校に上がる前か

ら、露の臺や芹、ノカンゾウの芽、山椒やアケビの芽を摘んで回った。それが今も続いている。小学校の二年か三年生の頃に、父は役場から県の職員に変わり、家から一里ほどの根雨の地方事務所に通うようになったが、家族の生活に変化はなかった。秋には風が吹けば葉を拾いに裏山に行く。今と違って山は豊かで五、六升の葉は二、三時間もあれば拾え、茸採りもその頃お袋について覚えた。香茸採りは六年生になってやっと採れるようになった。近所は農家のこと、秋ともなれば猫の手も借りたほど忙しいから、山に入る人は少ない。そんな時に松茸の域に出会った。大も歩けばの譬そのものだった。何年かは独り占めだったが、誰かさんに見つけられて、先を越される年もあった。そうこうする内に茸が生えなくなってしまった。雑茸は手籠に一杯採るにはそんなに時間は掛からなかった。お袋と摘んでいた山椒は、芽が少し大きくなっていて、葉っぱが三、四枚にもなっていたから、量は捗るが煮たら香りはよくても、口の中で少しモサモサしていた。

今では、家の回りに植えた山椒の一種ほどの芽を摘んで煮ている。箆に一杯とつても、煮てしまえば小鉢に半分にもならぬ。だが光沢は絹、口に広がる風味は天下の絶品だと自惚れている。まだ若木で一番芽の作品は二日で消えてしまふ。二番芽、三番芽と摘むが三番目でお終い、これ以上摘むと木が弱つてしまふ。三番芽は花芽も一緒に摘む。だが、味は二番、三番と落ちていく。

ノカンゾウのみどりもこの頃に芽をだす。葉が三、四枚出たときに摘む。田舎暮らしのころは、家の回りに不断にあった木の芽、草の芽だったが、今では何を摘むにも車の世話にならねばならぬ。ノカンゾウはおひたし、酢味噌。アケビの新しい蔓も旨い。

春から初夏に掛けては、野も山も食料の宝庫だ。去年塩漬けにした蕨がまだ眠ったままだ。十数年前までは、近くの山で一年分の蕨が採れていたが、牧場やゴルフ場が出来たりマイカーも多くなり、一時間ほど離れた山まで車を走らなければならなくなった。目的の山の途中にコゴミがある。湯がいて山葵醬油もよし、天麩羅も良い。

今日は雲の切れ間から雪を頂いた大山が望めた。裾野の雪が消えれば春になる。

秋の山も好きが、食いしん坊の僕には春から初夏の季節が好きだ。ひたすらに雪解けの露の臺を待つこの頃である。

# 銀河系

## 河内天笑選

死にたいと生きたいベッド隣り合う  
良良犬が羨ましいと馬鹿なこと  
美面市 岩津 ようじ  
藤井寺市 高田 美代子

笑わせてくださる人とお茶を飲む  
桜満開なにかを期待してしまふ  
青森市 工藤 甲吉

志功館 女性の顔はみなまろし  
雪女すごい美人と聞いている  
鳥取県 鈴木 木公弘

酒たばこよりも女が恐ろしい  
片道のキップ握ったまま老いる  
米子市 中井 ゆき

銀シャリに別れ話は出来ませぬ  
安売りの羽毛布団に骨がある  
大阪市 尾崎 黄紅

あんな子にしたのは自動販売機  
心にもないことだからすぐ言える  
熊本市 遠山 夏生

新婚の白いカーテン引いて留守

ストライクゾーンがかわる新社長  
自由なら自由で不満訴える  
リボンの中の心頂くことにする  
西宮市 西口 いわゑ

騙される金がないから気が楽だ  
良心があるから反旗上げてくる  
鳥取市 美田 旋風

うれしくて首を短くして笑う  
母といった月日短いなと思ふ  
鳥取市 西原 艶子

運動のように貧乏ゆすりする  
年輪を誇らず大樹 無位無冠  
米子市 小西 雄々

学のある人ばかり居て噛み合わぬ  
友達に医者と弁護士入れておく  
五所河原市 對馬 一閃

皺しわになってますます味を出し  
巢立たせて夫婦の絆より直す  
鳥取県 西川 和子

怖くない人はこの世に居りません  
五時過ぎて鬼とおち逢う焼鳥屋  
倉敷市 田辺 灸六

小さい旅軽いジャンプをくり返す  
印象が変わって顔がつかめない  
米子市 野坂 なみ

ふるさとも開けたもんだパチンコ屋  
からからと笑ってみてもひとりきり  
旭川市 朝倉 大柏

ポケットのマツチ捨てるの忘れてた  
外圧がないと法案通らない  
岸和田市 田中文時

勿体ない勿体ないと胃を酷使  
金パツジ白を切ったりとぼけたら  
羽曳野市 芦田 絢子

エプロンを外す間のないまま傘寿  
軍配を一瞬探る力士の目  
大阪市 中橋 恵美子

味のある話に耳を欲せてる  
凶暴な男と犬は知っていた  
大阪市 清水 利武

痛いところよう知っているおばあちゃん  
すぐ惚れるのがわたくしのいいところ  
岡山県 小林 妻子

裏側を見せぬ笑顔がいじらしい  
意地悪な女に大らかさで耐える  
鳥取県 新家 完司

二時間の自由嬉しいお買物  
戸締りをしている父の咳ばらい  
香川県 渡部 さと美

道草を食べて大きくなりました  
しっかりと優しい妻を演じている  
鳥取県 土橋 螢

羽曳野市 吉川 寿美

池田市 岡本 吉太郎  
あの世まで気がばりもって逝きし母

鳥取県 土橋 はるお  
坊さんの脚にギブスが填めてある

枚方市 濱田 良知  
職安に老眼鏡が置いてある

岡山県 江口 有一朗  
アメリカの凱歌聞こえる米輸入

米子市 白根 ふみ  
税金の還付に頭下けている

茨木市 堀 良江  
弁解をすればふくれてゆく噂

堺市 高橋 千万子  
親と子の別な苦勞に春がくる

岸和田市 三輪 通彦  
新空港一足先に鼠住む

枚方市 海老池 洋  
日の丸を久しく見ない初日の出

和歌山市 山田 高夫  
窓際に去勢をされた生き字引

奈良市 米田 恭昌  
フルムーン中に一組ハネムーン

富山宮市 渥美 弧秀  
厨から少しはずれた妻の唄

米子市 小塩 智加恵  
チャックした口がむずむずしてきたぞ

倉敷市 小野 克枝  
積木よりかすかな音の夫婦にて

鳥取市 津村 静枝  
灸すえる肩いなくなり人恋し

鳥取県 土橋 睦子  
極楽はどちらでしようか坂登る

米子市 政岡 日枝子  
ドタドタと母来て温み置いてゆく

西条市 片上 明水  
老夫婦おんなじ色を干してある

大阪市 岡田 ふみ  
心配をおかけてます生きてます

綾部市 藤田 芳郎  
火を継ぎに故郷行きのバスに乗る

松江市 松浦 登志子  
大正の父にひとりグラニュー糖

倉吉市 奥谷 弘朗  
お人好しだけの人柄かも知れん

鳥取県 ささき やえ  
阿吽の呼吸 金のはなしで切れました

高知県 赤川 菊野  
ひとり酒ひとりの刻を深くする

鳥取市 武田 帆雀  
留守役の猫とおいしいものを食う

大阪市 今西 静子  
一斉にものの芽が吹く春はよし

弘前市 蒔苗 果林  
よも山の話も春に焦れてる

唐津市 久保 正剣  
合格をほうり上げてる春の空

倉吉市 最上和枝  
葱坊主音符の形して並ぶ

大阪市 町田 達子  
おひなさまばちばち娑婆の風を恋う

鳥根県 岩田 三和  
美しい桃の花から実をしのぶ

米子市 新 正子  
トンネルの先にサクラが咲いている

米子市 鹿島 蘭  
顔見世のような人形店の棚

大阪府 一本 勇太  
寒い夜の星はしらふで盗めない

大阪市 榊本 落児  
旅人に冬の花火が凍りそう

尼崎市 春城 年代  
知るかぎりの人から心かけられて

米子市 青戸 田鶴  
うろこまだ落ちず鏡も不透明

今治市 月原 宵明  
無視されて無視して女対女

八尾市 山下 美津留  
除くには惜しい美女だが和を乱す

兵庫県 遠山 可住  
親類もホッと男が一人死ぬ

米子市 木村 春枝  
家の秘を他人から聞く恐ろしさ

吹田市 山本 希久子  
妻の目のとどかぬ空の青いこと

大阪府 榎山 隆  
ハットトリク人生に逆転あり  
広島市 中村 要

打ち上げの火薬が足りぬ自己主張  
大阪府 井上 白峰

七癖の一つが妻の眼を盗む  
唐津市 浜 本 久仁於

一日空白 財布も空っぽ  
鳥取市 植田 一京

結論を早く出さねば鐘が鳴る  
米子市 茂 理 高代

まだ役に立つ釘だから職探す  
尼崎市 春 城 武庫坊

アイロンをかけてみようか僕の影  
枚方市 森 本 節子

またお出かけ そんな目でみるうちの犬  
和歌山市 堀 畑 靖子

アンラッキー続いて肩がこつてくる  
静岡市 小 木 久子

強かさやんわり包む低い腰  
八尾市 片 上 英一

一見に如かずと妻にナタ・デ・ココ  
柏市 上鈴木 春 枝

たけなわの宴で遠慮のない訛り  
鳥取県 谷 口 次男

血圧をゲートボールで上げるなよ  
大阪府 中 西 兼治郎

入院をしてもローンは容赦せず

有田市 松 井 かなめ  
あげまんて尽した果てに疎まれる  
大阪府 板 東 倫子

大好きの人をだましたのは悪魔  
岡山県 清 水 悠貴女

世渡りの仮面まだまだ捨てられぬ  
八尾市 村 上 ミツ子

札びらのようにカードをちらつかせ  
姫路市 中 塚 遊 峰

青竹の世話になつて土踏まず  
大阪府 上 田 柳 影

白い杖握つてこけんどこけんどこ  
岡山県 富 坂 志 重

曾孫にオシッコ草の芽に気付き  
青森県 加 川 栄 川

前方不注意轍に嵌つた契約書  
流山市 神 田 治

三月になれば冬物買うつもり  
西宮市 亀 岡 哲 子

ぼくんちの上クレインの影回る  
羽曳野市 徳 山 みつこ

アメリカへたまにはノーと言うてよい  
豊中市 田 中 正 坊

流水のきしむ夢見た啄木忌  
枚方市 八 田 敏

デパートで見つけた故郷の姿態  
静岡市 沢 田 きん

悠々とすました顔でくる遅刻

寝屋川市 籠 島 恵子  
クイズ番組母も一緒に試される  
和歌山市 細 川 稚代

友達が三人寄ればカラオケ屋  
川西市 松 本 ただし

減税の撒き餌で鯛を釣るつもり  
枚方市 前 たもつ

当然の如く差し引く所得税  
和歌山市 池 永 正雄

ビル街で絵になつて焼き芋屋  
和歌山市 青 枝 鉄治

無造作にヌード画がある子供部屋  
広島県 田 村 新造

ガンシヨック腹を据えるに日がかかり  
鳥取市 杉 本 孝男

音痴でも自分の歌を持つ誇り  
美面市 椎 江 清芳

親も娘も揺れる釣書が二つ来る  
岡山県 土 居 ひでの

明晰を売り物にしてまだ迷い  
河内長野市 植 村 喜代

山枯れてマッチ一本怖くなる  
寝屋川市 坂 上 高栄

九官鳥一つ覚えのマイドマイド  
唐津市 山 門 幸夫

着ぶくれの肥満の妻よ転ぶなよ  
鹿児島県 大 山 舞鳥影

墓参りする度坂がたらくなる

島根県 今 若 草 子  
義理ひとつかえすに財布しんどがり

兵庫県 酒 井 靖 子  
栄転の素顔独りの米を磨く

和歌山県 田 中 み ね  
和解するチャンスを手を棒に振る頑固

十和田市 齊 藤 焔  
農継ぐと言われて父が慌て出す

香川県 成 重 放 任  
挨拶をするまで酔えぬ披露宴

鳥取市 谷 口 百合子  
温もりを貰って花が生きかえる

今治市 渡 邊 伊津志  
番犬が吠えるるとすぐに窓が開き

寝屋川市 堀 江 光 子  
本よりもビデオカセット並ぶ部屋

有田市 生 馬 芙美子  
一行を増やして本音書く日記

鳥取県 石 谷 美恵子  
相談の結果やっぱり金包む

大阪市 神夏磯 典 子  
エプロンに包む子の愚痴夫の愚痴

宝塚市 丸 山 よし津  
計報欄夫の年と見比べる

姫路市 大 原 葉 香  
貿易黒字儲けた金の行方など

笠岡市 松 本 忠 三  
外米がわたしの口に入るとは

寝屋川市 平 松 かすみ  
ビデオレンタル一泊させて名場面

芦別市 齋 藤 房 子  
帳尻が合わないままでひた走る

米子市 澤 田 千 春  
掃除機がビタミン剤を飲み込んだ

泉佐野市 河原崎 礼 子  
友情のはずが一線越えました

倉吉市 淡 路 ゆり子  
遺族年金の胸算用をしています

守口市 結 城 君 子  
精力がつくと太字で書いてある

姫路市 北 条 てる代  
角とれたところから惚けが始まった

堺市 山 本 半 銭  
煩惱のほむらを抱いて寝つかれず

大阪市 大 河 未佐子  
言うたかて飲みはるなあと見放され

香川県 川 崎 ひかり  
居ながらに草津 指宿 登別

和歌山県 山 根 恵 美  
ストレスも一緒にとばす大くしゃみ

静岡市 柳 沢 た ま  
背伸びせぬ友の誘いがあたたかい

和歌山県 楠 見 章 子  
生きている証にしとく偏頭痛

静岡県 菌 田 猿 杏  
老母の手のタコがいつしか消えている

青森県 諏 訪 明 雄  
地吹雪の底を生き抜く露のとこ

鳥取県 山 内 芳 江  
寝たきりをいたわる言葉見つからぬ

鳥取県 権 代 康 女  
せせらぎの奏でる春を聞いてます

和歌山県 杉 山 精 子  
凶作へこだわりだした米の味

茨木市 藤 井 正 雄  
ベランダの鉢にも欲しい嫌煙権

八尾市 大 内 朝 子  
日曜の朝の心は紙ふうせん

藤井寺市 川 端 六 点  
年寄りと言う切り札で攻めてくる

大阪市 龜 井 円 女  
やがて喜寿時を惜しんで夢を見る

和歌山県 宮 口 克 子  
しょうもない悩みと人は笑うけど

大阪市 津 守 柳 伸  
飼主の訓練したい犬の私語

八尾市 高 橋 夕 花  
啓蟄の虫もわたしも花を恋う

広島市 流 奈美子  
核家族老人村となる団地

和歌山県 福 本 英 子  
思案する間に焼き芋屋が帰り

泉佐野市 稲 葉 洋  
うつむきの人生もある糸柳



木綿針探し歩けど売ってない  
愛しくて優しく足の裏洗う

心にもおしゃれ詩集を食べている  
年女なんと吠えたらいいものか

かくれんぼうすっかり鬼に返事する  
大屋根のリズムわたしで終ろうと

破れ傘 静かにたたむかくれんぼ  
水割りもワインも動くアクセサリー

結び目がちよつとずれてるのも運命  
胸騒ぎ郵便受けに何もなし

愚かさをこぼしながらも生きていく  
どうしても見ておきたくて途中下車

わたくしの振り子早くと急ぎ立てる  
消しゴムの要ることばかり梅匂う

過去という絵を銀色で葬ろう  
毬つきを一寸休んだだけなのに

お隣と今日は一度も会ってない  
切り捨てた言葉がひとり歩きする

向い風ペダルを意地のように漕ぐ  
凍雪の雫ばたりと首に乗る

反省の型で靴が脱いである  
守られたわが表札に星の降る

かごめかごめ困んでほしい鬼である  
約束の重さをしらすうすけむり

這い上がる男無口で笑わない  
黄水仙思ひすこしをたしなめる

米子市 茂理 高代

藤井寺市 高田美代子

新居浜市 原 ますみ

米子市 鹿島 繭

八尾市 村上ミツ子

米子市 白根 ふみ

岡山県 矢内寿恵子

岡山県 杉山 精子

岡山県 土居ひでの

西宮市 奥田みつ子

八尾市 高橋 夕花

広島市 森田 文

米子市 木村 春枝

鳥取県 石谷美恵子

和歌山市 福井 桂香

米子市 野坂 なみ

芦屋市 黒田 能子

米子市 光井 玲子

和歌山市 古久保和子

姫路市 福島 姫女

大阪市 津守 柳伸

米子市 林 瑞枝

西宮市 門谷たず子

岡山県 富坂 志重

鳥取県 さえきやえ

人恋し四月の風に帆をあげん  
通勤の流れに添うて女たり

大根の乱切り心しずめねば  
いい音色だろ鳴らしてみたい鐘

婚約を母喜んで居ぬ如し  
鏡の中の今日の自分がとても好き

葉牡丹の逢わねば渦となり炎える  
陸橋を渡って行ったスノーマン

あの男は流水だったかも知れぬ  
以心伝心夢のつづきを旅先で

まだ少し光っていたいけもの達  
世間体脱いでこの川渡ります

ゆっくりと渡る残り火消さぬよう  
劣等感声が尻込みしてしまふ

美しい眉がひとこと止め刺す  
少し利口になりたい本を買いに行く

踏んでも踏んでも雑草の饒舌  
一歳のジャンプ台ですママの膝

種袋振って未来の音を聞く  
甦る光眩しい眼の手術

胸のうち明かせなくても側が好い  
姑と猫とても密なるお話を

眠る母の献立神に問いながら  
ふり返る花道影がゆれるだけ

八尾市 高杉 千歩

東京都 山口 新子

京都市 山海 友熙

富田林市 片岡智恵子

寝屋川市 岸野あやめ

西宮市 西口いわゑ

熊本市 永田 俊子

弘前市 佐治千加子

八尾市 大内 朝子

和歌山市 福本 英子

岡山県 清水悠貴女

大阪市 大河未佐子

宝塚市 丸山よし津

大阪市 日坂 秋子

寝屋川市 堀江 光子

愛媛県 久保 良子

芦別市 齋藤 房子

寝屋川市 平松かすみ

寝屋川市 坂上 高栄

姫路市 中塚 遊峰

米子市 永井美津子

神戸市 向井 泰子

米子市 服部 朗子

鳥取県 植田 一京

投句先 〒683 米子市花園町14

八木 千代

# 初歩教室

題一 弾む

吉岡美房

今回は役句者が急増したため、一人一句ずつ取り上げるのが精一杯でした。

弾みすぎ元に帰らぬ毬もある (柳章子)

(平安の優雅な蹴毬靴の音) 一壺

見栄を張り一寸弾んだお雛さま (お雛様実家の見栄がはずませる) 操

弾んでも上には上が袖の下 (袖の下弾んだつもり桁違い) 太一郎

若さ故悩み持ちつつ弾んでた (青春の悩みの中に弾むもの) 芙蓉

愛弾みころげ落ちないよう止める (弾む恋ころげ落ちたりせぬように) (備恵子)

差し出しの名前で胸が弾み出す (胸弾ませて角封筒の封を切る) 三津子

(待っていた便り弾んで封を切る) 秀香

弾みつき井戸端会議恣しい (立話弾んで鍋を焦げつかせ) 義男

姉が来て朝まで話弾む妻 (姉が来て朝まで話弾む妻) ミツオ

給料日今夜は弾むレストラン (給料日家族ではずむレストラン) フミ

初恋の人夢に見て弾む胸 (初恋の人夢に見て弾む胸) ふさ子

家事をするスイッチ押す手弾んでる (新婚の家事をする手が弾んでる) 宅

うれしさにチツプを弾むひとり旅 (親切がうれしいチツプはずませる) 孝

澄んだ空妻と弾んで手をつなく (旅の空妻が弾んで手をつなく) 武治

留守電の弾んだ声にはげまさる (留守電話一瞬声を弾ませる) 方子

あれこれとまわりが弾む初節句 (じいちゃんが一番弾む初節句) 旭

昨夜から弾んでいます孫が来る (孫が来るだけで二人で弾んでる) 嘉子

ピカピカに声足弾むランドセル (ランドセル届き家中弾み出す) りつえ

初孫が男と聞いて祖父弾む (初孫が男と祖父の弾みよう) 三重

節料理よろこぶ孫に妻弾む (誕生日孫の料理に弾む妻) 忠男

幸せに弾むミシンは届くかに (幸せは産む子へ弾むミシン踏む) 康子

合格よ弾む電話の孫の顔 (草も木も弾む合格通知来る) 幸夫

弾む声残して孫子帰りに行く (弾む声残して孫の去んだ部屋) 桂子

ケレンデの歓声弾む華やかに (ケレンデに飛び交う声が弾んでる) トミエ

小春日の弾んだ声が飛び回る (春を待つ外には子等の弾む声) 一雄

おやすみと言っても電話よく弾む (春を待つ外には子等の弾む声) 孝原

長電話お国訛りは弾む声 (方言で母の電話がよく弾む) フク子

日々弾む心大事な靴磨く (春を待つ心弾ませ靴磨く) 美寿子

花の季の思い出くって気が弾む (花の頃思い出たぐり弾む胸) 美静子

三味線の音色が弾み腕上る (三味線の稽古はめられよく弾む) 隆

若い娘の会話が弾む昼食事 (O.Lの口食べながらよく弾む) とよ子

裏庭に雀遊んで何食べる (庭へ来る小鳥と弾む刻を持つ) 芳水

(一日のリズムが蛇口から弾む) 瑠美子

よく弾むピンポン玉と五歳の娘  
 (よく弾むピンポン玉に遊ばれる)  
 弾みずく社長はマイク放さない  
 (社長だけ弾んでマイク放さない)  
 幼な友ヤアヤア弾むクラス会  
 (止らない会話が弾むクラス会)  
 趣味が合う男と弾むコップ酒  
 (同じ趣味持つて弾んだコップ酒)  
 話弾む心許せる親友と飲む  
 (古希一人話弾んで友と飲む)  
 脚はずむ桜花賞まであとすこし  
 (桜花賞近づき馬の脚弾む)  
 車庫入りに気づかず話よく弾む  
 (乗り越してしまった話よく弾む)  
 節分会福豆まきに弾む声  
 (豆まきの人気力士に弾む声)  
 弾みつけ老いの力で餅を切る  
 (餅を切る老いの力に弾みつけ)  
 爺婆の陽だまり声が弾んでる  
 (小春日が祖父母の声を弾ませる)  
 唇と手話で会話がよく弾む  
 (通学の電車で手話がよく弾む)  
 冬の旅心が弾む雪景色  
 (旅の朝心弾まず銀世界)  
 スクープへ新聞記者のペン弾む  
 (スクープで時々記者の弾みすぎ)

静枝 春風 タミ たもつ 保夫 真一 幸夫 幸子 幸子 幸枝 侑里 姫女 春枝

待つ人が来る最高の花はずむ  
 (待つ人が来るから弾む花を活け)  
 ねぎの香に弾むまない冬の朝  
 (葱きざむ朝から妻が弾んでる)  
 一枚の写真に弾む出逢い旅  
 (一枚の写真に秘めた弾むもの)  
 自信つき弾んで学びほつとする  
 (一浪でやつと勉強弾みつき)  
 弾む娘と沈む父との旅立つ日  
 (嫁ぐ娘が弾んで父の沈みよう)  
 弾みたいのに足腰が邪魔をする  
 (まだ女弾む心は持っている)  
 美女に会いうれしや未だ胸弾む  
 (美女に会い弾む若さが残つてる)  
 お若いですネお世辞と思いつつ弾む胸  
 (お世辞でも若いと言われ弾む胸)  
 着想・表現ともに立派な句  
 新しいレインコートで弾む夫  
 お揃いのレインシューズで弾む妻  
 弾みすぎ傘は垣根を越えて行き  
 君とならホップステップジャンプまで  
 雨上がり散歩をせがみ弾む犬  
 バストゥアー知らぬ同士でよく弾み  
 支持率の高さに弾みすぎた穂  
 春風にさそわれ弾む万歩計  
 退院へ弾みをつける三分粥

さち子 義子 ひでの 備弘子 君枝 きぬ 辰男 仲弘子 園郁子 園寿馬 志重 方郎 よしみ 絢子 ますみ 武春

五重丸息弾ませて見せに来る  
 スキップの音が弾んで孫が来る  
 弾みすぎ押えて君に逢いに行く  
 フルムーン少女のように弾む妻  
 一日を弾まず朝のいい電話  
 親の手を離れて傘は弾み出す  
 夢一夜弾んで消えた手毬唄  
 若返る気持ちで弾むレオタード  
 調子よく乗せられ若い気が弾む  
 雨だれが一つ弾んで輝いた  
 元少女燃えて弾んだクラス会  
 いい話貰つて弾むイヤリング  
 アルバムに弾んだ夏の夢の跡  
 恋の子感こころ弾ませレモン買う  
 なれそめはほんのはずみとれてる  
 子ども孫も揃つて弾む喜寿の膳  
 和やかな陽ざしに弾む車椅子  
 減税で弾ませねらう消費税  
 解き放つ犬は弾んだ鞠となる  
 義理チョコにうっかり胸を弾ませる  
 通夜の席弾む故人の艶ばなし

一乗 清美 泰子 行子 みつこ 三千子 はる子 高栄 惠美 半量 円女 彩子 ひろ子 志華子 君枝 あすま

題「破る」—4月15日締切(6月号発表)  
 宛先 〒533 藤井寺市道明寺2丁目11-4  
 吉岡美房

歯

村田善保選



歯車になるのかうちの王子さま  
歯に衣を着せて核心突いてくる  
歯が抜けて寂しいことになられる  
歯入れ歯替えるといが深くなる  
歯切れよい話は少し身構える  
歯に衣を着せない医者でよくはやり  
歯車を合わせて丸い家族です  
ふれ合わぬころ歯車軋ませる  
税務署で絶対金歯見せぬよう  
爽やかな受付 白い歯がこぼれ  
若い気で居ても奥歯が語る齡  
一つ知り三つ忘れる歯がゆきよ  
ダイヤ嵌め口を開けるとキンキラギン  
外出に入歯忘れて引き返し  
歯切れよい返事実践伴わず  
自惚れを衣を着せぬ歯に噛みつかれ  
歯に衣を着せぬ若さを吐く本音  
歯に衣を着せて波風たてぬ母  
美しい歯からぼろりと嘘が出る  
可愛いと言われて見せる糸切り歯  
歯に衣を着せぬ男で敵が増え  
入れ歯でも食べられそうな土産選る

正子 サワ子 洋子 寿永 悦男 俊子 とよ子 美美子 美美子 正坊 ちかし 高代 一花 義美 白光子 晋 玉恵 章久 甚一 紀一 里兆 雄々

トンカツの堅きに入れ歯の愚痴を聞き  
かたくなな妻の話に歯が立たぬ  
歯を磨く今日一日を感謝して  
残る歯を必死に磨きかけている  
人間に歯止めがきかぬ殺し合い  
美辞麗句歯の浮くような褒め言葉  
この人に歯が立ちませندだまりこみ  
白い歯を見せよう優勝語る汗  
歯車がびったり合った上り坂  
ふるさとの味噌ごたえで思いだす  
蟻の抗議 歯牙にまかけられず  
歯ざしりも寝言も妻にかなわぬ  
敗北を知って奥歯が疼きたす  
歯に衣を着せない友を憎めない  
歯に衣を着せぬ言葉を衝く世相

愛論 三重 重人 旋風 凡々子 義男 拔智 正雄 典子 智加恵 有一朗 保州 螢 諷云児 鉄治 白峰 久仁於 ツネ あきら 高栄 明雄 正剣 花匠

ビデオから死に体ですと言っ裁き  
後ろ姿自分のビデオが恥すかしい  
決着はスロービデオがつけてくれ  
出稼ぎへビデオで届く故郷だより  
押すだけのビデオへ監督気取る夫  
録画録音何でもござれ孫五歳  
僕やろかビデオが見せるわがショット  
いつかいつか見えないビデオを撮り溜める  
このシーンがビデオに撮られているとはね  
勝敗のビデオに茶の間まもめる  
軍配を変えるビデオが憎らしい  
スタートの一瞬を待つビデオアイ  
スクープへビデオカメラは出番待つ  
ビデオでは勝っていました土俵際  
肉体の自信ビデオに撮っておき  
臨終のビデオは撮って欲しくない  
三人目育兒ビデオの数も減り  
子習するビデオで趣味が高くつき  
客席にさくらも入れてビデオ撮る  
凜とした書棚にあった裏ビデオ  
リレハンメルビデオ晩酌長くなる

洋美 勝治 鉄治 愛論 良江 直次 英子 四郎 狸村 孝男 雄々 明水 武史 重人 未佐子 彩子 英千子 波留吉 恭昌 宵明

ビデオ

宮本欣史子選



集 路

負けている試合もビデオ遠慮せず子の部屋に何やら怪しい貸ビデオ口約束ビデオに撮っておきたいよ国会の欠伸ビデオに捉えられ  
宮参りビデオオカメラが鼻をかみ阪神が勝ったビデオはとってある優勝のビデオ傲慢にする我が家ゆつくりとビデオを回す勝ち戦  
モンローのスカート停めて観るビデオ巻き戻しのビデオ私もチャップリンクーパーも元氣わが家のビデオ棚懐かしのガルボに逢っているビデオ意地悪なビデオオカメラが見た現場ライバルの癖をビデオで覚え込みお葬式のビデオを嫁が持っている

夙校のビデオ記念樹がゆれる寝たきりの祖母にビデオの挙式見せ金出しに行つてビデオに監視され親切を胸のビデオに受けておくもう一人の僕と対面したビデオ

永久保存したい一コマの画面

見逃してくれずにまたも巻戻し

寅さんのビデオで終るバスツアー 川島諷云児

早送りのビデオテープのように生き

寿馬 倫子 あやめ 希久子 しげお 路 児 兼治郎 可住 英一 洋 正雄 正坊 克枝 佳雲 正子

サンドイッチ彩よくはさむママの愛よい噂 小耳にはさんで軽い足パーマ屋で耳にはさんだ艶ばなし艶ばなし小耳にはさむ縄のれん一寸した艶話もはさむ通夜の席留守番の挟み将棋が縁となり正誤表はさんで町史発刊し一駅の長さスカートはさまれてCMをはさんで暗転するドラマ鍋の底光らせ口をはさませぬ口はさむ余地を下さい脳死論リハビリの箸へ黒豆逃げ回る国賓の箸をすりと逃げた豆将棋盤はさむと戦う顔になる柿の種類蟹はさんでからの修羅紅一点右も左も男です姑と嫁そのまん中にある私一応は疑いはさむ儲け口OBが口をはさんだ社の人事火の中の栗を上手にはさみだすはさまれた恩と義理との荷が重いあのひとはさんだメモが迷わせる

よしみ 有一郎 洋 狸村 寿馬 哲静 寛 未佐子 大柏 英子 保州 芳郎 重人 圭一郎 正剣 多賀子 典子 通彦 鉄治 隆 俊路 かのる

はさむ

竹治ちかし選



返本に意味深長なメモがある  
自叙伝にはさんだ嘘がよく喋る  
ぼろい話耳にはさんでから狂い  
両の手にはさむ女の暮らし向き  
止まり木に受賞の人がはさまれる  
理路整然すぎて疑いはさまれる  
きれいな葉はさむ余生の日記帳  
書にはさむ花に昔の恋慕情  
やんわりとピタリと妻が口はさむ  
口はさむことを控えている平和  
ほめ言葉はさんで返事待っている  
押し花をはさんだ遠い日の真  
通訳をはさんでぎこちない会話  
ひと言をはさむ間もない多数決  
花びらをはさむ四月の日記帳

宵明 あずま 洋 英壬子 帆 雀 俊子 忠男 可住 文子 しげお あずき 甚一 諷云児 正坊 艶子 きみえ 可住 雄々 正子

自信過剰を箸ではさんで食べている

寒椿はさむ言葉がさむすぎる

栗はさんで第九条を確かめる

疑いをはさまぬ子等の眼に負ける

受賞句

川島 諷 云 児

百の修羅越えて静かな夫婦の絵

評 選とは難しいものです。天の句を推薦された選者の方に敬意を表します。そしてその中から一句を推薦する私たちも大変なことです。互選論者である私としてはこれを通じてよかったと感じております。(水粉千翁)  
 ご存じのように、映画にカットバックがあり、カットを積み上げて手に汗握らせ、最後に快い幕にします。この百の修羅がカットバックで、夫婦の絵の静けさで幕になります。絶妙な手法に参りました。(矢野佳雲)  
 課題吟という枠の中で選ばれた三十六句の秀句は、いずれも味わいのある句です。その中でも枠を感じさせないで五七五の中にすっぽり納まるのは技です。句の内容で題を浮かばせる作品を望んでおります。(河内月子)



川島 諷 云 児

第十七回全日本川柳愛媛大会の川柳大賞受賞に引き続きこのたび伝統ある「一路賞」に選ばれ身に余る光栄に感動しております。これからもこの受賞を励みとして、心新たに研鑽を重ねてゆく所存であります。今後ともよろしくご指導ご鞭撻を偏にお願い申し上げます。ありがとうございました。

佳句 (七句)

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| いちにちをゆつくり生きてみませんか | 高田美代子 |
| それなりのシナリオがある朝のパン  | 高田美代子 |
| のびのびと育ってほしい紙かぶと   | 田中 正坊 |
| アヒルたちひらたい足で坂上る    | 山門 タミ |
| 魂は私だけの非売品         | 三宅 保州 |
| 暇になることが一番恐ろしい     | 三宅 保州 |
| 働いている楽しさに齢はない     | 椎江 清芳 |

柳 歴  
 昭和六十年十月 高槻川柳サークル卯の花に入会  
 昭和六十一年十月 川柳塔社誌友  
 昭和六十二年十月 川柳塔社同人  
 昭和六十三年十月 川柳塔社理事  
 川柳塔社常任理事

事



柿花紀美女

受賞句

柿花紀美女

頭打つ度に男の顔になる

評 人生街道は平坦ではない。起伏あり喜怒哀楽あり。句中の人物も失敗し、たたかれ、反省、そして人間性を体得する。まさしく一編のドラマを彷彿させる。人間風詠、川柳の醍醐味ここにありと共感する。(藤井明朗)  
冬彦さんと言う流行語を生んだご時勢ゆえにこの句が光るのかも。生きるに真剣な男が少なくなり、男性化粧品が売れ、胸にペンダント、加えてイヤリング。これを口にすれば時代錯誤と笑われるのがおち。(舟渡杏花)  
まともに生きよ、とする人間の心のプロセスを見事、十七音字で表現した。失敗・挫折のない人生はない。要は如何にそれを乗り越えるかだ。ややオーソドックスながら銜のない素朴な穿ちの句である。(榎本吐来)

このたびは、思いもかけぬ受賞のご通知を頂きまして驚いています。昨年二月、堺川柳会の席題「頭」の入選句が受賞句となりました。喜寿を越えまして、このような賞を頂きますと、ますますフアイトが湧いてまいります。今後とも健康に気をつけ、一日一日を大切にしていっそう作句に励んでまいりたいと思います。

佳句(十一句)

他人ほめる眼鏡にかえている老後	海老池 洋
生きのびて十指に余る恩を受け	稲村三千代
終生を味方と信じ合う夫婦	安永 暁子
西行と同じ想いの花に佇つ	林 荒介
生きるとはいいなあ西瓜胃にとどく	中井栄美子
父に勲章きつと来る筈酒屋から	渡部さと美
和むまで心の扉開け放つ	幸家 單車
老いてゆく頭撫でたり叩いたり	吉原 辰子
そして朝もう白紙には戻れない	宮口 克子
邪魔な石うまく生かした庭づくり	塩満 敏
賄賂とは書いてないけど判るはず	小林 一閑

柳 歴

昭和五十六年

川柳塔和歌山吟社同人

昭和五十九年度

日本川柳協会作家賞受賞

昭和六十年

川柳塔社同人

昭和六十年

堺川柳会誌友



カレンダー眺め形の不安  
カレンダー積もる話を聞かされる  
仏滅へ神様しばし息をくれ  
妻逝つた日から進まぬカレンダー

川柳塔おつぱご吟社 木村あきら報

三猿の教えにそむく罪一つ  
師に甘え自分に甘い日を悔いる  
竹藪を取られた雀姦しい  
掃除機に追い出されてる粗大ゴミ  
夢に会う亡夫の笑顔顔いまま  
不況でも炬燵囲んで雪見酒  
新婚を肴に酒がよく回る  
居るだけで心安らく夢がある  
サツパリと片付けたのに孫がくる  
まだ孫にかじらす脛でやせられぬ  
運命の一寸先は判らない  
松と竹の夫婦が越えた幾十年  
天の声 警察には通らない  
同窓会肩たたき合う春日和  
平穏な暮らし大空見える幸  
凧作り子供は側で見てるだけ  
空を突く枯木が春の夢を抱く  
暗闇で人の気配を感じとる

川柳化粧槽 植村客遊子報

おふくろの味を引き継ぐ匙加減  
試着室少し派手目を問う鏡  
はじめてのスーツは父のお古です

親路 美智子  
鉄治 章子

放迷親子 くに子  
かおり あきら  
チカエ 正雪  
よしみ マサエ  
吟笑 マツエ  
放任 いさむ  
治延 文仙  
ふみ 迷貫  
ひかり 小なみ子

童謡を唄うて競う竹トロボ  
家元の卒寿が渡す舞扇  
晩成もならず未だに無位無冠  
ワープロの文字とは知らず胸おどり  
善を積み残り少ない日に感謝  
立ち直る機会掴んだ師走風  
一言を欺き通す口寒し

減税も消費税アップ芸が無い  
年末に子等が氣遣う宅急便  
ギャンブルへ負けた財産を増やし過ぎ  
財産を増やす心算で馬券買う  
かずファン老いの血も湧くJリーグ  
戌年で狛犬にも手を合せ  
恵比寿さん福を分けすぎ財布から  
活発なギャルも暗着でおしとやか  
現役の思いさまざま賀状かく  
春よこい願ひ頼むと鈴をふる

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

われは旅人なればしたたかにひとり  
したたかに生きて春の花秋の月  
節目には朱書きが見える日記帳  
十年を節目に夫を取り替える  
節目には小豆の粥で邪氣払う  
節目など気にする暇もないくら  
亡母の葉が入れてある寒い節目  
声変りしたのを審査見のがさず  
天の声札束積めば出るのかな  
お役所は声だけ聞いて動かない

奮水 三青 葉香 礎石 遊峰 治夢 里兆 美峰 光起 八悦 雄花 風花 佳風 幸風 須磨 流水 霧水 霧水

薰 杜的 蕨杏 惠美子 英子 節子 森子 白溪子 よ志子 彰一

佳句地十選 (3月号から)

奥田 みつ子

仲直り猫撫で声が背に寒い  
正直でいつも地声が出てしまふ  
声のする方へ歩けば迷わぬ  
声かけて一息入れる坂の道  
原稿がもう一息という夜明け  
子の意見主張が通り夜が明ける  
夜明けまで語りつないだ通夜の酒  
今日の無事祈り夜明けに手をあわす  
シベリアの夜明けは遠い核廃棄  
初孫の知らせ夜明けのベルが鳴る  
人間の無欲の顔は美しい  
久し振りに寄り添う妻が美しい  
足音に八百号の花吹雪  
本心を明かさず重い幕を引く

松芳子

艶子

二南

紫香

庸佑

東雲

一閑

スミ子

武庫坊

瀧小

あきら

波留吉

静江

ひでお

物真似の笛に個性がでてきたぞ  
無心にはなれず無心と書いてみる  
人に生れて祈る言葉を与えられ  
初孫を飾って見たい雛祭り  
寒風に晒して欲を削ぎ落とす  
産声もまじりほのぼの年が明け  
あと一歩ゆずれば風のおだやかさ  
歳月の流れうわさを消しながら  
飛べない孔雀があんなに美しい  
奥さんに話せばすぐにカタがつき

夕子

青琴

文子

フクヨ

完司

能子

貞子

英一

ゆかり

重人

福寿草長いトンネル抜けて春  
人知れず拭いた涙に明日がある  
不器用に生きております亡父に似て

富柳会(削片分) 池

森子報

心眼で歩く運命の白き杖

紅紫朗

冷凍のまま故郷の味が着き

一三子

共嫁ぎ冷凍室に匂を置く

登子

ふんばって降りし雪中登山なつかしむ

花子

滑り降りし雪中登山なつかしむ

トシエ

うつぶんを一気に晴らす途中下車

絹子

幕が降り生きた答の会葬者

敦子

百円で昆沙門天に運を買

和樹

運を天 貴方に賭けたわたしなの

昭水

不況風ケチなサンタで漫画本

智久

まだ降りる気配を見せぬ老会長

(四) 勇

モナリザは笑ったままで凍ったか

美代子

また一人男が降りた冬の駅

透太

解凍の魚に時差惚けなどはない

文治

雪ときて雪と帰っていくサンタ

欣之

朝風呂につかり幸運追っかける

維久子

来年はサンタも外米考える

柳太

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

健康な歯を抜かれてたシヒレ薬

ふさ子

酔っぱらい都合の悪いこと忘れ

青琴

白い肌紅く色づく恋模様  
体力の限界知らず万歩計  
みかんの皮蹴ってけつても一人なり  
ベッド避け炬燵に座り夫午睡  
物干して独り星見る次男坊  
乳房吸う愛し児抱いた母強し  
月が追い陽が追い三百六十五  
一番はどれも呑んで語る課長さん  
ちゃん呼びでも知らなくて文部省  
国語などやたらとかえて文部省  
護身術役に立てたい夜の道  
老春や対のマフラーで列車待ち  
起承転結はじめ良ければ終り良し  
磨練りの万札はさむ広辞林  
地方発送東京行と書くりンゴ

京都塔の会

松川 杜的報

悠々と歩こう終点もう近い  
悠々と外輪で歩く晴着の娘  
子の宝のぞいて見たい玉手箱  
子の宝小さな亀を飼うている  
サンクラス外すと宝見えてくる  
ここまでは誰でも出来るプロの道  
初夢はわが家に着いた宝船  
子宝の五人がくれたチャンチャンコ  
十年日記読み返してる初心  
暇とカネ出来るとチョット阿呆になり  
ポケットのふたはマークは錆びぬよう  
初心な娘の笑いが吾家とませる

喜久亭

治幸

紀一

ちよ

高明

タミ

久仁於

四郎

虹汀

晴子

幸夫

旭恒

朴竜

正剣

川柳ささやま社 酒井 靖子報

墨すって初心に戻る筆を取る  
初心の灯消すまいひとり逝く日まで  
ふり返っても初心の頃に帰れない  
犬つれてわたる橋なら風もよし  
都市砂漠 初心貫き通せない  
单身赴任 初心ときどき陽へあてる  
白梅の白さに初心洗われる  
実ほど初心忘れぬ芸の道  
まだ初心定規に印付けておく  
嬌声も小母さんたちの露天風呂  
深爪を切つてた亡夫想い出す  
巨大ツリーがまるで溜息吸ってるよう  
甘栗の温みを抱いて終電車  
湯かげんもほどよくなじむ老夫婦

喜久亭

治幸

紀一

ちよ

高明

タミ

久仁於

四郎

虹汀

晴子

幸夫

旭恒

朴竜

正剣

求芽

真柳

川柳ささやま社 酒井 靖子報

宗悟

水客

紫香

百合子

圭坊

倫子

しげお

笑女

達子

武庫坊

年代

恵美

純子

とよ子

ふゆ子

つや子

素水

とみ子

市三

合併で栄えるはずの過疎に古い栄転の素顔が独りの米を磨ぐ

川柳はまだら

井上

喜報

一輪の花の素顔へ和む朝

辻褄を合わせて嘘が一つ増え

子の視力低下するのでも世界一

定年後一人角力を取ってます

一年の計へ元旦の福笑い

一喝で怒りをぶつけ吹き飛ばす

サツカーに溺れ一浪するつもり

一番に成りやと言っただけの父

一代で築きひっそり住んでいる

釘一本刺され政治が揺れてます

南大阪川柳会

金井

文秋報

きれいに手を洗って千羽鶴を折る

抜け道はなかった亡父の道しるべ

嫁姑むこが苦勞をしています

前へしか進めぬ歩にも意地がある

そもそも苦勞はあなた知ってから

姑となる心の刺を抜いておく

棒グラフ抜き喜びを知っている

運のよい男にされている出世

運勢の悪さは名前前のせいにする

鶴の恩何日か来るやろ助けとこ

マスコミに騒がれ恋は進まない

托鉢の素足が進む雪の道

可住 靖子

三四郎 宙宙

凡人 兵

広人

しげお

源五郎

酔舟

与呂志

笑風

喜醉

楓楽

寿美

直子

庸佑

重人

智子

度

文秋

千里

東雲

恒明

章久

七福神巡って運を寄せ集め  
生き抜いて明治の父にある気骨  
素っぱ抜くペンをいてる週刊誌  
千羽鶴みんな飛ばした退院日

控え目が生命線を変えさせる

子を思い食事進まぬ夫婦箸

運勢が良くてニコニコしてしまふ

年一度掛軸の鶴床に舞い

振り返るゆとり苦勞を懐かしむ

進む程奥の見えない習い事

決断へ取越し苦勞が先にたち

苦勞人らしい言葉がやわらかい

取越し苦勞に終りホッとする日記

あの時に買った苦勞が生きてくる

肩書が取れて運勢冷えてくる

鶴を折るその指先にある祈り

川柳岩出

児島与呂志報

ゆつたりと二人で点す余生の灯

堂々と路上駐車のかい顔

忠犬と思っただけの犬

ゆつたりと二人で渡る浮世橋

神頼み自分の進路絵馬に書き

休日とも日曜もない犬散歩

広い路車が走る赤信号

湯豆腐でゆつたり味わう旅の酒

この路を遠くへ行こう二人連れ

ゆつたりと仕切る貴禄貴ノ花  
猛犬と書いてもらった座敷犬

志華子 真砂

頂留子

凡子

勝美

咲

久子

明星

柳伸

ハル子

智久

シメ子

文江

三男

悟郎

トミ子

昌子

紳一郎

幸子

綾子

千鶴子

保子

英子

重徳

正直

悦男

ゆつたりと構えきれない蟻の列  
主守りひたすら尽くす盲導犬  
裏切りを覚えてからの小犬の瞳  
写経してゆつたり浸る無の心

ゆつたりと心静める高級車

よろこびは顔にも出さぬアルドッグ

埋み火に餅ゆつたりと焼けてくる

ほたる川柳同好会

井上 直次報

親の名を問えば咳こむ親不幸

欠勤の電話に咳を一つ入れ

咳がまだ聞こえてきそう亡母の部屋

反対と言わぬばかりの軽い咳

赤道下咳もくしゃみも日本並み

待ち合せ小さな咳で固さ解く

咳一つ出来ない皇室レセプション

医者へ来て咳を貰ってしまったそう

真夜中に大きく咳いている孤独

あの咳はコーヒーやお茶やろか

咳ばらい亡父にそっくり立ちすくむ

流行り咳バリトン・アルト・バスもあり

南天の眼が暖かい雪達磨

エスカレーターで内緒話が降りて来る

降りそうねと言いつづつく立話

雨降りも日和も変りない暮らし

知らぬ町勇気を出して降りてみる

銀世界夢の降る街リレハンメル

外人の身振り手振りで解けてくる

愛子

春子

精子

和子

瑞穂

忠雄

与呂志

福一

博史

吉太郎

純次

直次

馬洗

祥司

英子

保子

しずえ

桂子

澄子

眞郎

万之助

喜美子

昭子

洋子

紫水

明光

誤解とけ不仲の友の年貫くる  
雪解けに振袖草履足とられ  
国会の答弁曖昧意味解けぬ  
雪解けて新芽顔出す山の里  
羽織解く亡母の縫目は美しく  
攻めあぐむいつか野次馬いなくなり  
攻撃は花に浮かれた隙間より

川柳クラブわたの花 片上 英一報

優しいのは私の母が世界一  
母の居るだけで茶の間は温うなり  
別れ際の母の言葉が気にかかり  
繕いを母に任せて老いさせず  
ふるさとに料理の好きな母がいる  
てのひらに母とおんなじしわがある  
干渉をしすぎてこまる母もいる  
満開の野草ジャンプの風を待つ  
ジャンプした父のハードル低くなり  
水溜りジャンプで越して跳ねかえり  
三代の夢を守つてのれん継ぐ  
早トチリ連鎖おこした不快感  
ジョークでの友の退院近いだろ  
冗談のあのひと言が痛かった  
家計簿を開くと夫いなくなり  
お年玉ひらいて大きなありがと  
酒を酌む鏡びらきの餅をやく  
年金の財布をひらく孫の顔  
もみじの手ひらいて結ぶ歌が好き  
開かぬふり見ぬふりをして鳩時計

一 笛  
竹 二  
正 安  
清 史  
敵 子  
方 郎  
幸 子  
シマ子  
一 風  
友 甫  
初 子  
千 枝子  
しのぶ  
雅 恵  
君 江  
剛 治  
花 子  
龍  
晚 子  
隆  
英 一  
春 子  
道 子  
トシエ  
ますみ  
明 子  
幸 枝

開かれた厨子のみなかにあるかげり  
極楽へ行く道ひらく蟻になる  
雑魚なりにひらき直つてみたけれど  
鬼遊  
弘直  
美津留  
鬼遊

岸和田川柳会 田中 文時報

誰知らぬ金欄緞子に包む疵  
近道をさせてくれなほ縄のれん  
子に残す地図に近道など書かぬ  
近道の足に絡んだ鳥かづら  
追放の噂話に花が咲く  
定年ぬ離婚ねえと妻が言う  
濡れ落葉追放だけはまぬがれる  
弁財天に追放された素寒貧  
追放をされて反旗をひるがえす  
追放の噂呑み屋で聞いている  
親が決めた出会い養子にするつもり  
悲しみを秘めた出会いに沸く拍手  
メーキャップ彼と出会ったあの日から  
年の暮れ債鬼と出会う戎橋  
就職の夢を抱いている答案書  
方言を妻が通訳してくれる  
家中に回覧簿の答案紙  
核満載答案何と出るだらう  
貝塚山荘すんなり佳句が出てこない  
野良犬の意地だ卑屈の尾を振らぬ  
炭焼コーヒーまるやかに飲む古傷と  
そんなものの私の人生はずれくじ

川柳後楽吟社 従野 健一報

ひよつとこかおかめになつて老い楽し  
あかぎれの手から出てゆくお年玉  
人間の欲であちこち灯をつける  
ばん鐘の余韻つくり人許す  
上を向いて歩こう新年期待する  
足跡も指紋残さずドロンスレ  
負け犬の遠吠えとなる酒の愚痴  
老体に注意信号点いて消え  
喜寿めざし古希の祝いの宮詣り  
新春の光に向けて軍手干す  
同性の声の若さを読む女  
糟糠の妻になれよと茄子を漬け  
大猿の仲で修羅場を切り抜ける  
新任の教師肴に参観日  
砂かけて猫は素知らぬ振りで行き  
耳底に両親からのほめ言葉

岩美川柳会 羽津川公乃報

柿の種吹いて素朴な遊びする  
不況風吹いて閑古鳥がなく  
忘れたい過去思いきり吹き飛ばす  
おーい雲笛が吹きたきや降りてきな  
口笛を吹きスキップしてる円い月  
口笛を吹いて小鳥と対話する  
吹く風が一番いやなすきま風  
吹く風が芸術を生むガラス工  
仏壇の線香吹いて叱られる  
損得に生きる寒い風が吹く

たけ志  
博 友  
正 秀  
桃 風  
哲 郎  
柳 五郎  
青 銅  
金 吾  
佐 加恵  
道 博  
吉 則  
邦 季  
玉 水  
鮫 虎狼  
秋 月  
照 路  
き み子  
希 久代  
嘉 津江  
八 千代  
芳 江  
單 車  
大 漁  
孝 由  
幸 枝  
公 乃  
忠 良

僕の絵がトランペットを吹いている  
 今日を吹く風に明日を夢見よう  
 言い勝った心空しい風が吹く  
 からだの中を木枯らしが吹き抜ける  
 愛という合流点で火を吹いた  
 火を吹いて好きな男を焼いて食う  
 睦子  
 はるお

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

ボケベルに振りまわされて今日も暮れ  
 ひと押しのところへボケル邪魔を入れ  
 今日もまた仕事があるので起きられる  
 呑むことも仕事のうちという男  
 終列車無口な顔がよりかかり  
 忘れたいことが夜長をねむらせぬ  
 世相かな猛烈社員の家話秘話  
 不発弾かかえたままの終列車  
 終列車聞きたいことも乗せて去に  
 としよりの仕事と今朝の庭をはき  
 仕事から帰ると仕事が残っている  
 好栄  
 ちよえ  
 英子  
 歳栄  
 はるみ  
 博利  
 清泉  
 白汀

川柳東大阪

森下 愛論報

一代で築いた財に謎がある  
 謎のない妻でシャボンの匂する  
 真夜中のポストに謎を閉じ込める  
 貸しビデオ昔のこは貸本屋  
 往年のスターが生きているビデオ  
 キツネ目のビデオ捜査の一途な目  
 もの言いの一番ビデオでもう一度  
 脇役で生涯終えたデスマスク  
 湖風  
 信治  
 洋子  
 文秋  
 恒明  
 晋吾  
 史子  
 恭昌

喜与志  
 美代子  
 美恵子  
 蝨  
 睦子  
 はるお  
 鈴江  
 かつ子  
 聖子  
 好栄  
 ちよえ  
 英子  
 歳栄  
 はるみ  
 博利  
 清泉  
 白汀

脇役が雪のシーンの雪まみれ  
 脇役の妻がブレーキ踏み過ぎる  
 脇役がいたので世の中うまくいく  
 痛いところ握って妻が武器に取る  
 痛く目にも数もへこたれない社長  
 痛くない腹さぐられてる不倫  
 ほっとした詰めで出て来た痛い嘘  
 古い二人おおくくなってきた土鍋  
 鍋みんな光らせ主婦の心足る  
 姑の目線が痛い欠け茶碗  
 立谷勇次郎報

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

口ごたえなくして孫は大学生  
 口封じされると女熱を出す  
 プロポーズで誓った事が重くなり  
 なりゆきで誓った事が現実  
 誓っても止めても論吉居つかない  
 二世誓った妻は一世かも知れん  
 神かけて誓うと言った嘘もあり  
 渡らねばならない橋へ雪しきり  
 その口が私口説いた憎い口  
 土橋

川柳塔鹿野みか月

土橋

巢立つ子をはさみ一夜の席温い  
 上したにはさまれてきた我慢の道  
 人生の余白へはさむ詩の道  
 迷惑と思わぬ風が口をはさむ  
 天井と地べたで慶びをはさむ  
 香ばしく鬼のよろこぶ豆を炒る  
 作二郎  
 度  
 春男  
 太一  
 頂留子  
 文子  
 信博  
 勝美  
 孤舟  
 愛論

作二郎  
 度  
 春男  
 太一  
 頂留子  
 文子  
 信博  
 勝美  
 孤舟  
 愛論

豆鉄砲くらって国会またさわぎ  
 疑いははらし祝いの豆を煮る  
 豆でつぼう受けた平和の鳩ぼつぼ  
 豆礫くらった鬼はもう来ない  
 もうすこし時間がほしい朝夢に  
 待たされて貴重な時間空にする  
 後編の時間女として生きる  
 待ったなしの時間を抱えている命  
 越えてきた苦しい坂も今は夢  
 鉢巻をしめて不況の坂登る  
 敵も白髪も生きた証と誇りもつ  
 愛という証の要らぬ宝なり  
 千鳥逃げ普段の海の顔になる  
 リハビリへ一役犬も散歩連れ  
 坂道で足腰鍛えくたばらず  
 虹の坂妖精雨を連れてくる  
 許さねばならぬか自問自答する  
 コーヒー豆と離れられない日が続く  
 孫が描く絵いつも円い顔になる  
 千鳥舞う浜でわたしも羽伸ばす  
 力はないが母の根気に負けました  
 息止めて針の穴まで眼が通う  
 目を向けて欲しい大きな嘘を言う  
 一番好きな男とは女とは  
 サークル檸檬  
 小林 一夫報  
 美  
 美  
 みさ子  
 智恵子  
 はるお  
 久枝  
 かつ乃  
 きみ子  
 隆風  
 静江  
 信江  
 富恵  
 しげる  
 孝男  
 孝由  
 実満  
 節子  
 明美  
 汲香  
 弘子  
 喜与志  
 睦子  
 正恵  
 和子  
 登  
 千代  
 正坊  
 楓楽

人妻と声交わさずに擦れ違う  
 空の青みなご破算という如し  
 襟巻に秘密を埋めている孤独  
 生きている自愛と自虐の中縫うて  
 満員車の扉 信頼されている  
 ピリツとした冬の寒さもうれしいな  
 階段の下で誰かが泣いている  
 薄氷を猫とびこえて去りにけり  
 猫の方が私を知っている素振り  
 野良猫のなんと自由な目と出会う  
 愛と欲猫のかなしい目に溶ける  
 水汲んでくれそうない猫飼っている  
 握手して猫ほど柔らかな手あり

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

お互いに我慢しあっている余生  
 幸つすい余生独りの米洗つ  
 余生でも化粧忘れぬ三面鏡  
 余命表めくって今日は赤を着る  
 妻の分も生きる余生の数珠を繰る  
 余生では川の流れにゆだねよう  
 重宝にされて余生の温い春  
 ほどほどの距離に本音が落ちていた  
 本音には本音でせまる外はなし  
 なにげなく本音を洩らす曲り角  
 多数決本音飲み込み拍手する  
 タク酒で男本音を喋り出す  
 美しい夕陽に本音見すかされ  
 男には女の冷え性わからない

薫 いわゑ あずき 喜美子 みつ子 雅子 ゆかり 一夫 希久子 慶子 智恵子 薫風 満江 邦代 茂美 早苗 知恵子 清志 蛭 静江 清子 房子 一葉 淳

ライバルに追われて冷える尾氈骨  
 起きがけの仕度に冷えた腕時計  
 ボランテイエア孤独の冷えを温める  
 冷えてゆく仲だど気づく落椿  
 冷え切った二人が辿る離婚劇  
 神様のお疲れほぐす天の邪鬼  
 集団がとても苦手な天の邪鬼  
 天の邪鬼雲の行方を追っている  
 天の邪鬼髭割ってから行く床屋  
 天の邪鬼自分の考え持っている  
 のど仏をくすぐる白魚のおどり食い  
 白魚のものがきも知らぬおどり食い  
 白魚を病んでる母に玉子とし  
 踊り喰いなどと白魚に惨い春  
 白魚が旬山里へ電話する

はびきの市民川柳会

櫻本

吐來報

少しずつずれるモラルに汗をかき  
 船頭ばかり何処へ行くのか日本丸  
 初仕事自転車みがきに精を出し  
 ウィンドーが季節先取り春を着る  
 天下り官僚どのの姥捨てか  
 三夫婦 安近短の旅に出る  
 お祝いの袋必ず透かす癖  
 おめでとつ今年もたんと言えました  
 父さんはすぐ祝杯挙げたがり  
 年の暮れ一ぱいつめたごみ袋  
 生きてゆく義理が重たいのし袋

雄々 草丘 多賀子 秀子 妻子 長三 与根一 静恵 友子 みえ 畔 鶴丸 芳枝 米子 寿美子 叮紅 六 昇 夏秋 繁男 敏 扶美代 美代子 泰子 シマ子 重人

袋帯亡母の形見の似合う年  
 カンガルー袋の中は別天地  
 装ってまだまだ捨てたものでない  
 桜色に染めて装い春や春  
 着飾った女に年は聞かんとく  
 装いへシヤネル五番は控え目に  
 プロアマの違いを知って夢が消え  
 アマチュアと違いをみせるプロ初段  
 インタビューアマとは見えぬ受け答え  
 アマチュアが甘く見過ぎた冬  
 秋祭りアマが気を吐く村芝居  
 アマチュアが本職やめて意地になり  
 野次馬もさくらもいます叩き売り  
 野次馬の期待空しくボヤが消え  
 野次馬も後ずさりする事故の跡  
 野次馬をがっかりさせた仲直り  
 野次馬の声援弱い方へ飛ぶ  
 何や何や人が人呼ぶ橋の上  
 同情のふりで見にくる火事のあと

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

語り部が減っていくさが遠くなる  
 婉曲に断ってきた女文字  
 平穩に馴れた眠りの眼が覚めぬ  
 せめぎ合う男が減らす靴の底  
 朝食が減らして女細くなり  
 肩書が減って真価を試される  
 一つずつ欲を減らして生き延びる  
 病んでいる地球へ蝨も蟬も減る

ケイ子 一壺 辰子 悦子 敦子 一屯 キミ子 かつみ ひろ子 聡 昇 与呂志 たけし 吐来 昭平 志洋 晋 みつこ 絢子 稚代 柳宏子 高夫 豊太 保州 栄美子 千寿子

親と子の愛の目減りがかくせない  
 減る靴の裏だけ徳を積んでいる  
 娘が嫁ぎパンもミルクも買い減らす  
 返信に梅が咲いたと書いてある  
 筆まめがすぐ返信の二三行  
 返信へ好きな切手を貼る慕情  
 不参加と書く返信の気が重い  
 北からの返信寒い事ばかり  
 返信の行間温い情け浮く  
 返信のマナーへ心相和み  
 平穩になれて男の骨抜かれ  
 平穩で妻と二人のティータイム  
 平穩に赤い夕陽へ歛洗う  
 可も不可もなく欠伸の出る役所  
 平穩な春ぬい返す針を撰る  
 気兼ねない暮らし三食満ち足りる  
 世界地図 平穩な地に住んでます  
 平穩へ地に足が着く妻でいる  
 平穩を掴むと消える夢の塔  
 平穩無事子らはなんにも言うて来ぬ  
 風雪を越えた平穩噛みしめる

いずも川柳会

園山多賀子報

佐代子 惠美 輝子 紫香 射月芳 鉄治 政一 紀美女 光代 綾子 三男 吞天 正博 忠雄 寿子 紀子 紀久子 信子 精子 英子 克子 ちかし 義良 清子 三代 茂美 房子

爽やかな愛のことばは凍らない  
 爽やかな顔にベツトも笑顔出る  
 爽やかな風爽やかな里に吹く  
 疑いが晴れ今日一日の爽やかさ  
 風葬にさせぬ傷あときのこ雲  
 行雲流水今日も果てない頭陀袋  
 老漁夫もつ花も見ず雲も見ず  
 灰色の雲を絵に描く自閉の子  
 病室に雲の早さと日の長さ  
 自画像は酒に溺れた影をつれ  
 自画像はタンスの奥に寝せてある  
 耳朶の大きな像の目が細い  
 仏像の前で余生を組み立てる  
 仏も鬼も行間に住む日記  
 初孫に決めた名前も書く日記  
 点滴で延びた命の日記抱く  
 仏像にそつと触つた淋しい日  
 懺悔する日記の文字が丸くなる

西宮北口川柳会

丸山よし津報

蘭水 まこと 代仕男 律子 祥庵 多賀子 青湖 寿美 章峰 しみえ れいじ 満江 裕 文子 流石 みよ女 しま子 ちえ 澄子 正とし いわゑ 房子 たず子 べ女 英子 紫香 道胤

傷口をかくすりポンは赤にする  
 旧姓も書き添えられてあるリボン  
 エレクトーン 囲み分校春の歌  
 エリートは同期の嘘に囲まれる  
 掌で囲むくらの欲はある  
 冬野菜土で囲って子等待つ  
 三四人囲み草書の軸が読め  
 杉の香の焚火を囲む貯水場  
 女王蜂囲みの中で孤独感  
 なにげない振りしてきつと怒ってほる  
 なにげない仕草に女匂わせて  
 隙間風女一人を置き去りに  
 バレンタイン本命一個買う律儀  
 迷わずに着ぶくれ脱がす梅だより  
 ああ言えはこつ言う孫が頼もしい  
 ふる里に雪しんと降るテレビ  
 猫の子がのびて見せる自己主張  
 起きたときの絵本そつと置いておく  
 法律にふれぬ程度の野心抱く  
 冬空の月が欠けてる通夜帰りに  
 駅員に文句も言えず雪しきり

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

武庫坊 正坊 哲子 ひろ子 富喜子 てる しいお 春蘭 佳秋 キク子 杜的 芳子 ルイ子 義子 江美 トミエ 絹子 史朗 白漢子 まさお 涼子 隆 柳宏子 恒明 弘直 かつみ 欣之

北国の石炭くべる始業式  
 FAがストローブリーグかつさう  
 つまらない意地ストローブに遠くいる  
 ストローブを囲んではず青春歌  
 立春も名ばかりストローブ離せない  
 落ちぶれた男にぬくいかけっどん



老いてなお時間を無駄に木版画  
大吉も平穩願う年齢となり  
一行の添え書胸を熱くする

富柳会

池

森子報

嬉しさの余りに酒を酌ぎこぼし  
声変わりしてから母を遠ざける  
嬉しいな何がほしいとポーナス日  
登り坂後押しされてしてる愛  
登りつめやがて悟ったかたつむり  
女性には巡査やさしい声で聴き  
童唄聞えず猫の声しきり  
千羽目の鶴と登った初春の峰  
嬉しいと妻は母を買ってくる  
登るなら金剛山にしておくれ  
天の声捨てて庶民の声に聴け  
嬉しくて夫の名前呼んでいる  
五十の坂登る峠に初春の風  
亡父の声きいて昔を巻きもどす  
あの女金運までも持ってゆき  
生きている証に登る火の山よ

川柳たけはら

森井

青居報

一番をいつも夢みて走ってる  
ストープのそばがいちばん大好きで  
神の樹も夢を見ているのだきつと  
滅塩も退院すれば無茶苦茶で  
福袋今年の幸を開けて見る  
ふとんとじ私も亡母の歳となり

亮太 涌一 一步

小6千枝 中2史子 蘭幸 ヤスエ 規代 比呂子

新聞をたたんで今日のドラマ終え  
寒の入り行者の太鼓しみじみと  
作句十年いまだ色紙の句にならぬ  
いつか橋架けよう夢という川へ  
同窓会普通の妻の貌でゆく  
考える鬼と暢氣な鬼が住み  
水仙の気高さが好き冬が好き  
孫二十歳古い諺聞かせとく  
雪のない冬に山茶花淋しそう  
ふるりの満天の星立ち尽す  
絵の中の花が語りかけてくる  
死ぬ事がまだ気にならぬ罪重ね  
職退いて放牧牛に似て来たり  
めでたいな成人式の孫もいる  
心得ていきますと娘正座する  
時どきはのぞいてくれる若夫婦  
正月の話題にされたエキストラ  
金持ちの国に貧乏神と住む  
マンネリを促す風の果し状  
一つ得る何かをひとつ捨ている  
さようなら決して先に言わぬ木偶  
送られて幸せそうに娘が帰る  
雪降らぬ里の自慢も北港  
ロマンチストの俺に終着駅は無い

遅くとも今年中にと親あせる  
遅いのも早いのもいる蟻の列  
寒村に漸く遅い春芽吹く

翠洋会

渡部さと美報

麻代 喜久恵 夏喜 笑子 千代美

美佐雄 菁居 一路 綾子 兼治郎 志華子

遅刻して一番前で居眠れず  
猫の恋巡り会えたか鎮まれり  
酔覚めの水が深夜の喉に鳴る  
眠られぬ夜はひき算ばかりする  
お月様ひとりぼっちの冬の底  
ファミコンを知る子双六知らん顔  
双六のさいの目にある運不運  
ゆっくりと行こう双六上がるまで  
すごろくの罰のゲームが楽しみで  
孫が去に笑い袋が見当らぬ  
人ごみに側迷惑な大袋  
顔見世にとりの席の袋裏子  
年金の幅で包んだのし袋  
こまぎれの愛に満ちてる頭陀袋  
花の咲く袋小路も老いてゆく  
銀行振込み袋の重み忘れさせ  
連れだって道を問うのは妻の役  
妻だけが外の空気を持ち帰る  
俺よりは先に死ぬなと粥を吹く  
そのうちに帰って来ますうちの人の

割り切ってハハハと笑えばすむものを  
美しい話が好きでよく届く  
意地はって見ても歯痛には勝てぬ  
仲人の話半分うそだった  
嘘もある手柄真顔で聞く礼儀  
ためらいもなく嘘がでて恐ろしい  
真心が届くきれいな水中花

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

千歩 秋子 楓楽 さと美 登志子 真砂 宣司 東雲 恭昌 久峰 絹子 正雄 凡子 英一 蛙 光子 みつ子 ひろ子 鬼遊

邦俊 みおき 佳女 野草 善政 玲子 勝見

鼻ぐすり届いたららしい効いている  
 真白い雪よあなたに嘘はない  
 お豆腐の臍が片意地はついている  
 お歳暮のお札電話ですみません  
 意地を張るより可愛がられる方がまし  
 かゆいところに何時も夫の手が届く  
 意地もねじも緩んで好々爺  
 嘘ひとつ言えぬ男のちびた靴  
 人助けする一粒の種を播く  
 歳月の苦勞刻んだ金のあと  
 色即是空ヤッパリの欲抜けぬ  
 あいまいな返事を慈悲と聞きわけ  
 師の影は大きく深くまだ残り  
 ブランドの服で女の七変化  
 坊さんが坊さんの説教聞いてはる  
 七坂を越えても届く苦い塩  
 隙間風ガス中毒になりはせぬ  
 可愛くば心を鬼にするも親  
 女房が恐くて嘘をよう言わず

喜与志 ひさ子 とみお 螢一 信子 幸子 節子 よしえ 孝恵 仙岳 喬水 柳風 松盛 原兆 杜的 雄々 早苗 猿杓 弘朗

川柳ねやがわ 高田 博泉報

いつまでも小犬のままで居て欲しい  
 ご馳走は点滴精力つきまへん  
 こんな時飛んでくるのはいつも友  
 白粉も紅もつる古希の肌  
 もっと犬の世界へ帰れないベツト  
 全精力出したがノルマとどかない  
 ペンフレンドだけでよかつたなと思  
 散歩する犬に引かれて腰が伸び

精力のかぎり張りきる新社員  
 鬼も仏も友にしている太っ腹  
 大好きを犬が知ってる垣根ごし  
 精力を貯めて謀反くわだてる  
 いっぱいいっぱいともだちつくれランドセル  
 飼い主に似たか雌犬ばかり追つ  
 精力はもりもりあつていま無職  
 仲人をする友妻を借りに来る  
 精力のつづく限りをボラランティ  
 趣味に生き精力なんか気にしない  
 負け犬がだまってる傷をなめている  
 苦い酒一緒に飲める友がいる  
 精力の限界を知る下り坂  
 仲直り更に親しくなつた友  
 蓄えた精力出番なく終り  
 負け犬が猫にも尻尾巻いている  
 顔見たら気が済み友はすぐ帰る  
 過勞死を思う精力セーブする  
 迷つてる友の背中を押してやる  
 野良犬が三匹わが家夜警する  
 米寿近し精神的に歩かねば  
 なわ張りへ友寄せつけぬ鮎あわれ

頂留子 たもつ 弘直 ルイ子 恵子 勇太朗 時弘 一鬼 光之 黎之助 黎之女 一途 房子 庸佑 一芳 俊夫 シマ子 洋 欣史子 柳宏子 紫香 度

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

ありがたい事と布団を敷いている  
 大の字に布団の中でなる自由  
 夏の日に亡母に習うたふとん縫い  
 猫用に可愛い布団縫うてやり  
 座布団の前列空いてるお通夜

ある日ふと妻の冷たさ見てしま  
 冷えた手を温めてやると放さない  
 図書館の冷えに耐える受験前  
 指の先から冷えてゆく愛の終り  
 完璧なアリバイ冷えた耳で聞く  
 特急が過ぎて冷えたしたホーム  
 満ち足りて児はずやすと夢に落ち  
 眠りばな隣の軒倦怠期  
 一生の不覚鬼の不眠症  
 好きなだけ眠る暮らしとなって 冬  
 遺言を書いて眠りが深くなる  
 悪で言えなければ父ちゃんよく眠る  
 鉛筆を削る やがては醒めない眠り  
 新芽吹く鉢は窓辺へ置いてやり  
 芽が出ない角なら出ます女です  
 雑草の芽にも情けをかけてやる  
 小雀よ来い来い新芽伸びている  
 花の芽と春の話をしています  
 寝てる間に看板変えた消費税  
 大根煮るコツも覚えてまだひとり  
 隣の子歌も上手で器量よし  
 ストレスの種年中少し持ち歩く  
 落ち着いた入れ歯鏡に笑うて見る  
 できるだけ身軽にしたい荷を下ろす  
 学問にほど遠くいる梅だより

福一 勇次郎 萬的 英子 石舟 紫香 一笛 澄子 澄子 園歩 伊三郎 美江子 芳子 杜的 正坊 正一 智栄子 吉太郎 尚利 行隆 鹿太 孝男 しげる

川柳塔とつとり 武田 帆雀報

感激にくちびる震え謝辞を述べ  
 くちびるを大きく開けて福笑い

我慢して噛んだくちびるの傷残す  
酒臭い息くちびるは横を向き  
くちびるを手真似で会話よく弾み  
くちびるを閉じてわたしの道を行く  
脱ぎ捨てた晴れ着のローンまだ続き  
妊婦でも晴れ着で友の式へ行くと  
真白な晴れ着が似合う頭陀袈  
成人の晴れ着にわが娘まぶし過ぎ  
荒海へ漕ぎ出す晴れ着炎えにもえ  
金婚の晴れ着涙の染みもある  
親と子の希望をつなぐ護り札  
希望のない男どの色にも染まり  
糸口の摺めぬ希望雨になる  
希望捨て止まり木にいる年男  
希望捨て止まり木にいる年男  
望松の希望空しい日が過ぎる  
人さし指の向うへ逃げてゆく希望  
両の手を自然に合わせ初日の出  
病んでいる地球を照らす初日の出  
初日の出無信心でも手を合わせ  
初日の出古希のロマンをふくらます  
初日の出敵味方なく年が明け  
元日の日の出にこころあらたまる

むらくも川柳句会

藤井 明朗報

一枝 粗粒 侑里 艶人 山人 孝由 輪多朗 一京 黙光 帆雀 正恵 銀嶺 大漁 静生 余志身 喬水 崇 俊路 圭一郎 由多香

降るほどの縁談好きな人が居て  
節約で耐えてきました戦中派  
星降る夜ロマンチックな夢誘う  
カラオケでこの頃妻は若返り  
飽食のツケがこの頃回り出し

正朗 鶏生 秀子 義良

母の顔見たさに急ぐ里帰り  
針穴がいそぐ指先狂わせる  
降る雪をみどり貯えたる根っこ  
節約が昔話になった今  
この頃は変な言葉で現代っ子  
飽食に慣れ節約も口ばかり  
降り積る雪で美術の工芸展  
ドカ雪が降ってあわてるドライバー  
わが家にも平等に降る雪うれし  
この頃の服装 年がわからない  
成年へドラマ始まる三世代  
梅の香を静かに包む細雪  
雪しきり桜だよりを待つ炬燵  
節約が本気になって来た不況

城北川柳会

吐田 公一報

ぬり絵にも個性あふれる子の世界  
本当の恋よといわれ落ちた穴  
ぬれぎぬとハッキリ言えぬ脛の傷  
今日もまた犬の散歩のお供する  
空の旅地球が狭くなりました  
祝い膳妻の料理は衰えず  
叱られて母のぬり絵につのを描く  
悪の根を色あざやかに塗りつぶす  
ボンネットバスに詩あり白い雲  
思いよう一つで差がつく幸不幸  
そのままの貴女でよしと初鏡  
したたかに傘寿を迎え春を待つ  
底知れぬ沼は魔性を秘めている

林蔵 幸夫 ヤス子 久仁 島子 仲子 定子 朝子 和幸 幸子 美恵女 芳子 明朗

雑巾を絞った程の知恵で生き  
とろとろ粥火にかける寒い朝  
ぬれぎぬを晴らす刃を研いでいる  
子のためぬれぎぬなれば母は着る  
ぬれぎぬに左遷の椅子のあたたかさ  
真つ黒い太陽塗った子へ詫びる  
お煮は嫁に任せて大晦日  
犬の春らしくペットと初詣  
つぎはぎの人生ながら生きてます  
ピストルが座席で光るロスのバス

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

春らしい日差しお寺に笑い声  
退院に日差しまぶしき靴をはく  
神様の微笑のような日が差して  
内幕は何も知らない同居人  
内暮を探ると見える嘘の皮  
ハミングが少し狂った通り雨  
眠りばな雨戸がきしむ通り雨  
裏町を通ると楽しめたこやき屋  
豪邸の並ぶ通りは無風帯  
七難をかくし通した丸い鼻  
迷いからさめて通ると広い道  
梅の香にひかれて通る散歩道  
ときどきは呆けてみたいと思つ日々  
とときどきはちりめんじゃこで昼にする  
へソクリをとときどきくれる祖母が好き  
折る気はないがときどき掌を合わす  
再会の話がぬくいおでん鍋

ただし 昭子 白峰 柳影 典子 政子 頂留子 静子 公一 博史 真柳 寿美子 主坊 きく子 ただし 一笛 つえ子 慶子 福一 武庫坊 知香子 吉太郎 紫香 正坊 是枝

散歩する犬にトイレの位置がある  
もっ少しもつすこおしと鞭を振る  
亡夫の声遠くに薄れ今日五十年  
仏壇のいもつとへ置く豆の数

堺川柳会 河内 月子報

人間に触れてみたくて周五郎  
生き方を考えさせる本と会う  
パートして背伸びの跡を埋め合わす  
一冊の辞書に夜通しにくられる  
定年の余白を埋める本を読む  
疑問符がひとつ銀河にまぎれ込む  
もう背伸びするのは止そう肩のこり  
首を伸ばして掴めぬものを凝視する  
前髪が伸びたらパートに出て見よう  
淋しさに銀河鉄道の切符から  
伸ばすだけ伸ばしぽい捨て輪ゴムの座  
平成元禄犬にもあった美容食  
銀河から星の王子が降りてくる  
背伸びした分だけ寒い風になる  
ピカソの絵とてもわがままでと思う  
遠のいて行く愛追えば天の川  
息子には聖書一冊だけ残す  
わがまを言うて下さい遠い人  
大気汚染銀河は姿現わさず  
飼いだに人間並みの生活費  
銭湯の帰り二人で見た銀河  
伸びる芽を過保護の水で腐らせる  
わがまを反省だけはしています

明 光  
小 英 子  
登 代 子  
薫  
寿 美  
博 子  
晋  
芳 水  
金 三 郎  
美 代 子  
昭 子  
美 子  
途 子  
頂 留 子  
春 蘭  
福 一  
勝 晴  
紀 美 女  
道 胤  
千 万 子  
半 銭  
小 雪  
か り ん  
春 香  
菜 々  
一 二 三

銀河系イカ釣り舟の多いこと  
天の川泳ぐ水着を探してる  
望遠鏡の中でさまよう冬銀河

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

紙コップいらぬ掬って飲む清水  
出番待ちズバリ並んだ紙コップ  
湧き水を木の葉で掬い掌で掬い  
空の旅薄緑の紙コップ  
同権の町にはびこる紙コップ  
紙コップ期待はしないお茶の味  
議論白熱握り潰した紙コップ  
初日の出我が戸口にも国旗揚げ  
初日の出一番先に孫が起き  
初日にはベストスポット巨大ビル  
雲海の初日拝みに富士の山  
てのひらで囲うように子を育て  
オーイお茶だれかが返事してくれる

東 雲  
摩 耶  
天 笑  
正 晴  
弘 直  
清 芳  
光 子  
あ ず き  
田 実 子  
欣 史 子  
暁 子  
千 枝 子  
香 住  
留 吉  
豊 子  
シ マ 子

本社句会の日程決まる

5月6日(金) 6月6日(月)  
7月7日(木) 8月8日(月)  
9月5日(月) 10月2日(日)  
11月7日(月) 12月7日(水)

第66回 奈良川柳大会

とき 4月24日(日) 正午開場

ところ 橿原市商工経済会館大ホール

(近鉄橿原神宮駅東出口すぐ)

おはなし 片岡つとむ氏

席題 (当日出題) 宮口 笛生選

兼題 「小説」 杉本 節子選

「写経」 東元 良顕選

「凌ぐ」 黒川 正之進選

「近い」 吉田 美紗子選

「駅」 吉本 十方選

「癖」 稲葉 長生選

◎各題2句・午後1時締切

会費 1500円(発表誌呈)

投句料 1000円 4月15日必着

投句先 〒636 奈良県生駒郡三郷町

立野南3-6-16

古川 一 高

主催 奈良県川柳連盟

# 川柳と映画・演劇

川柳こぼれ話

田中正坊

「俳句は絵画、川柳は音楽」と言った人がある。俳句は絵画―は納得できる。それも、油彩画ではなく、水彩画である。しかし、音楽はむしろ短歌こそが似つかわしい。川柳はやはりドラマ―映画・演劇ではないかと思つた。3月号の「川柳と固有名詞」の中で、映画・演劇に関する固有名詞をあげなかったのは、今回、それらを中心に取り上げる魂胆を持っていたからである。

頬かむりの中に日本一の顔

虫壳のうしろ姿は菊五郎

歌舞伎座の余熱を抱いて通る町

こよなく道頓堀を愛したご存じ、岸本水府の句である。彼の盟友であった劇作家の食満南北にも、芝居を詠んだ句が多い。

写楽にも一度見せたい鴉治郎

紙屋うち おさんの寝言聞きとがめ

腰元のどれがどれやら塗っている

戦前にはこのほか、演劇にちなむ川柳が多く、集めれば一巻を編めるだろう。しかし、現代は非常に少ない。世の移りというものだろう。そして、これにかわるものが映画である。今から九年前に行われた西尾栗喜寿・金婚記念川柳大会における磯野いさむ選「太陽」で、「太陽がいつぱい男同士のだるい午後」が天の句に選ばれた。正に映画の一シーンを切りとつたような名句である。この句に逢つて以来、映画にかかわる句に注目してきた。

しかし正直なところ、その数はかつての歌舞伎ほど多くはないし、詠む人も限られているように思う。何よりも映画を愛する私としては残念である。まず、前回にも取り上げた中尾藻介さんには多く、特にマリリン・モンローにご執心のようである。

モンロー忌聖なるものは遠くなる

ゲーブルの顔が汚い原始林

夏まつり一人の無法松がいず

橘高薫風さんにも、すこしある。

モンロー忌飯田蝶子も死んだれど

映画ほど静かではない恋終る

岩井三窓さんは、それに比べると多い。

チャップリンの墓を暴いた奴がいる

キートンもロイドも逃げたひたすらに

アナベラという女優あり青春記

芦田伸介アリバイが崩れたぞ

何と言つても圧倒的に多いのは関水華さん

で、句集「終りなき旅」に「映画抄」という

一章を設けている。その中から十句―

飴いかが子育てごっこ鞭いかが

咯血や野麦峠のホトトギス

天国と地獄の四季の八甲田

影武者の髭つけかえて反主流

苔の墓 輪廻音なし野菊咲く

少年の盃浮かべ泥の河

典子は今 まだ脚がある鶴彬

不可解はみな神とするブッシュユマン

E・Tと握手をした道祖神

鳥葬が日本にもある檜山さ

さてどんじりに、例によって例のごとく、

私の『映画集』十句でジ・エンド。

公園に志村喬はもういない

笠智衆うなすくだけで芸になり

モノクロの映画に若き原節子

寅さんの港にいつもあるさくら

糸紡ぐ娘の悲話がある峠

しみじみと小津安二郎見る文化

ボワイエが夜霧に消えて行くシーン

帽子から雫したたるジャン・ギャバン

女神逝くああ青春のヘップバーン

ヒロインになった気出る映画館

# 本社 三月句会

三月七日(月)午後五時半

メゾン・ファッションセンター

三月は、ひなまつりの月とあって、恒例により栗主幹を除く兼・席題の選者はすべて女性陣という花やかなムードの中で開幕、司会は河内天笑さんが珍しく食中毒で欠席し、寺井東雲さんがピンチヒッターをつとめた。おはなしは野村太茂津氏。「ごんなうまい句も、人間的でない人の句は心を打たない」と、路郎の人間陶治論を展開した。

初出席は、田辺鹿太氏(尼崎市) 太田とし子さん(寝屋川市)の二人、月間賞は、山本希久子さん(吹田市)が初受賞した。

(司会―東雲) (受付―みつ子・希久子)  
(記録―ダン吉・月子) (清記―楓楽)

席題 「いびる」 稲葉冬葉選

可愛さにいびつてみたくなるお人 房子  
アメリカのいびりに耐えることはない 正坊  
いびるのが上手になってきた野党 鬼遊  
靴下と嫁が強うて姑いびり 章久

姑にいびられ包丁研いでいる  
膨らんだ蓄をいびるおくれ霜  
いびられる事にも慣れてまるく住み  
いびられて女だんだん強くなる  
いびるのをやめたら次は呆けはじめ  
大手衛いびつた嫁の血をもらう  
いびり合いどっちもどっち言う夫婦  
いびるには少し足り来ないエネルギー  
女の子に泣かされて来た幼稚園  
丁寧な言葉ですこしいびられる  
丁零られた話が人気呼ぶ自伝  
農民をいびり招いた米不足  
いびられる人の噂をきく隠居  
低金利いびり過ぎてはいませんか  
いびられるかたちに風向きが変わる  
いびられた話が風に飛つてくる  
いびるなら大阪弁に限ります  
いびられていびられ強くなるピエロ  
いびられたことも懐かし慕流う  
いびられるたびに大きくなりました  
やんわりと嫁がいびりの京説り  
いびる気は誰も持たない焼却炉  
いびられてからの人生観がまた変り  
本心を掴み取りたいからいびる  
はんなりと男をいびる京言葉  
苦しめられた過去よ流れに逆らわず  
いびられた過去を知つてる飯茶碗  
ライバルをいびる時から負けている

利武 恭昌 文秋 典子 良知 欣史 笛生 吐来 正坊 とし子 希久子 森子 重人 保州 希久子 英子 昭子 一二三 柳伸 柳影 千秀 朱夏 寿子 稚代 笛生

女がいびるおんなの花が枯れている  
いびられる方のお髭が立派です  
忠告とみるかいびりとみるかだか  
人  
空き腹でいびるとあとに根が残る  
地  
利口にもなれず猫の仔をいびる  
天  
不器用な男に通じないいびり  
軸  
チクチクといびるほど弱者ではない  
兼題 「愛」 木本朱夏選  
百度石 女の愛が蹲る  
愛は地に満ちて草にも花が咲く  
淋しいか愛の谷間を越えるとき  
たくさんの涙を流し愛という  
スカレットの愛のその後が気にかかる  
愛すれば応えてくれる土に生き  
腹の子に声かけながら編む毛糸  
雪しんしん愛の遍歴聞く困炬裏  
そこそこの愛でも二人子が育ち  
雪解けへ口には出さぬ父の愛  
平手うちもらつた愛は忘れなない  
菜局へ寄つてと愛妻から電話  
ソクラテスの妻ほど夫愛せない  
愛憎の狭間で揺れるつづらな眼  
運命線だけが知つてる愛一途  
幻の愛かも知れぬ青いケシ

森子 狸村 洋 欣史 美代子 保州 冬葉 薔児 緑良 文子 正子 三男 美津留 三男 鹿太 (岩)美智子 一風 楓楽 柳伸 典子 みつ子

愛という言葉に弱みやこぐさ

素手素顔 愛が始まる森の風

小さな愛に飢えたあの日のコッペパン

猫の求愛腥き春の闇

差引いてゼロの愛ならつまらない

燃える愛へバイオリズムは下降線

肉じゃがをうまくつくって愛担う

愛さずま会えはけんかになる二人

愛情のカタチが変る余命表

組板のリズムは妻の愛だろ

愛という川の深さは測れない

一人居の午後の香華と交わす愛

愛だとは気付かなかったかくれんぼ

いつの間にか愛は主役を降りていた

方円の愛を小出しに励む母

おしめ洗う十指に愛を込めながら

これも愛 野菜をたんと食べさせる

あれも母の愛やったんか七回忌

ゆるぎない愛で仏滅こたわらず

起承転結 愛の終りの鍵返す

葉書一枚 師弟愛にはかわりなし

炊き出しに愛衰えぬ街がある

相思相愛おんなじ頃に腹が空く

無理したらあかんと母は口癖に

無理したらあかんと母は口癖に

無理したらあかんと母は口癖に

無理したらあかんと母は口癖に

鬼遊

岳人

一二三

射月芳

恵子

雅文

隆

希久子

千歩

希久子

保州

吐来

森子

楓楽

柳伸

たもつ

月子

寿美子

昭子

道胤

智子

ダン吉

しげお

智子

智子

智子

智子

針の筵に愛のかけらが落ちていた

兼題「やんわり」 奥田 みつ子 選

やんわりと母の一言効いてくる

やんわりと私は言うたつもりです

やんわりと初孫抱いている笑顔

妥協癖ついてやんわり老いていく

やんわりと急所に刺さる京言葉

断りに京都訛りの母を連れ

口べたがやんわり突いてくる急所

やんわりと心の傷に触れてくる

雑草にやんわり意見されました

骨抜きにする気やんわりツボを押す

やんわりと位牌の前で意見され

褒め言葉にやんわり厭味しはせる

やかましい妻がやんわり言う怖さ

漢方のようにやんわり効く叱言

きついことやんわりと言うお師匠さん

少し世間が分かりやんわりものを言う

その先をやんわり拒絶した小指

やんわりと返す言葉にふくみ針

やんわりと無口な人がきつい事

やんわりとほめれば心開けてくれ

やんわりとふんわりとして寒の餅

やんわりとベンに切っ先向けられる

やんわりと叱るわりにはとげがあり

やんわりとひねって最後力入れ

やんわりと下手に出られ油断する

朱夏

み仏の瞳がやんわりと宝物展

花言葉やんわり胸をしめつける

ブランド米やんわり旨く炊けるかな

聞き上手やんわり本音喋らせる

好きだからやんわり拒否をしまっ

やんわりと流れを愛えるお茶を出す

三日ほど経ってやんわり責める妻

匂わせてやんわり口を封じとく

傷口には触れずに酒を注いでやり

ゆき平でやんわり老母の粥の味

やんわりと言えず強くはなお言えず

やんわりとして平手打ちより痛し

魁夷の森ならばやんわり眠れそ

これからはやんわり泳ぐことにする

やんわりといつも叱ってくれる人

兼題「スマート」 西出 楓楽 選

スマートな恋 春愁をひとりじめ

スマートな政治家腰がゆるる癖

プロポーズ スマート過ぎて受けられぬ

スマートにVサインする金メダル

スマートに行かずお手つきばかり

スマートに妻が断わるドアの外

スマートに口説く稽古をしています

み仏の瞳がやんわりと宝物展

花言葉やんわり胸をしめつける

ブランド米やんわり旨く炊けるかな

聞き上手やんわり本音喋らせる

寿美

いわゑ

柳弘

庸佑

金太

保州

希久子

射月芳

美代子

寿美

柳宏子

文子

楓楽

重人

みつ子

螢

四郎

信義

かすみ

寿美

月子

一二三

一二三

一二三

一二三

一二三

一二三

スマートに私を振った憎いひと 洋  
 スマートに好きと言えない戦中派 保州  
 スマートに断わっている生き上手 智子  
 スマートな式辞 酒まで美味くなる 三男  
 スマートにワルツを踊る共白髪 佳秋  
 心配は垢ぬけしすぎ帰省の娘 洋  
 スマートに別れ愉しむ恋上手 朱夏  
 スマートに生きてさくらの散る様に 美房  
 スマートになったつもりのベレー帽 吐来  
 生き方もスマートでした流れ星 千歩  
 スマートに男の手からもらう鈴 シマ子  
 スマートと言っても要は金のこと 房子  
 スマートと言えば言うほど嘘くさい 欣史子  
 スマートなコマージュルから春の彩 とし子  
 スマートな口説き文句を聞くピアス 稚代  
 スマートに逃げられました金と恋 美智子  
 スマートにことわる術もお仲人 かすみ  
 スマートに薔薇一輪を贈られる 英子  
 スマートな脚に踏まれて痛くない 狸村  
 スマートな婦警なんだか頼りない 白溪子  
 スマートな言葉で体をかわされる 寿子  
 このスカートが穿けてた頃に戻りたい 千秀  
 スマートな誘いに弱いおぼろ月 柳伸  
 スマートに生きて美田を残さない 正坊  
 佳  
 スマートに生きて夕陽とすれ違ふ 文子  
 スマートに軌道修正できないか 太茂津  
 スマートなビルに囲まれ寒い街 希久子  
 魂をスマートにして聞くソナタ 正子

スマートに見えて冷たい四捨五入 保州  
 人  
 スマートに訣れて濁る春の川 鹿太  
 地  
 スマートな謝り方で怒れない みつ子  
 天  
 ありがとだけでもスマートに言おう 美代子  
 軸  
 実年の坂スマートに転ばねば 楓楽  
 兼題「励ます」 福本英子選  
 七人の敵 励ましになつてくる 花梢  
 拳骨の父の励まし待っている 緑良  
 うしろから励ます母の声がした 螢  
 母からの励まし宅急便で着く 金太  
 励ましのことは酒に酔っている 狸村  
 飴と鞭 励ますコツを心得る 庸佑  
 どこまでも励ましてやる握り飯 しげお  
 草の根に励まされて耐えている 正雄  
 励ましてくれたが貸してはくれぬ金 正坊  
 新札に添えた言葉に励まされ 英千子  
 何よりの励まし応援席の女 庸佑  
 励ます会などとみんなでよいしよする 柳宏子  
 試験場まで念力を送るから 寿美子  
 葉書一枚 励ますことはすぐ出来る 智子  
 プライドを持ってと鏡に励まされ 女  
 好きだから励ましたくと言いきる 恵子  
 来年があると背中をたくやしく 寿美子  
 七転び八起き励ます福寿草 柳伸

桜前線 老いも若きも元気づけ 隆  
 励ましに失敗談も打ちあける 千歩  
 頑張れと励ましているハネムーン 鬼遊  
 励ましのたびに女は涙を抜く 雅文  
 励ましを受けるとその気になって来る 欣史子  
 うなだれた首を励ます掌がぬくい 寿子  
 励ましを聞いた気がする闇の中 美代子  
 励ましがとつてもうまい第三者 保州  
 職安で諦めるなど励まされ 保州  
 貧乏を励まし合つていい夫婦 愛論  
 後ろばかり見るなど影に励まされ みつ子  
 受験生励ます言葉とおこづかい 正博  
 回診のたびに病床励まされ 二南  
 佳  
 励ましのつもり一緒に泣いたげる 月子  
 振られてもかまへん一度誘うてみ 女  
 これ以上励めと言わぬ妻が好き 稚代  
 励ましに一升瓶で注ぎにくる しげお  
 はんなりとした励ましがイッチ効く 鹿太  
 人  
 過労死が怖い励ましほどほどに 久峰  
 一番の励ましそつとしてくれる 楓楽  
 天  
 励ましの言葉 男は飾らない 美房  
 軸  
 励ましの声 逆境を這い上がる 英子

伝統を背負い続けた座り胼胝  
 精進の伝統守り春惜しむ  
 伝統という校長に解けぬ謎  
 千の矢を受けて伝統守る簾  
 伝統の灯 絶やせぬ城下町  
 あざやかな襦紗さきりに寂を知る  
 伝統の味 前垂れをきりに締め  
 伝統美 無名の腕にささえられ  
 伝統の技法に生きる草木染  
 伝統の美を舞う花の父子鷹  
 伝統を守る踊りは文化財  
 伝統芸 時の流れに逆らえず  
 長持唄 村の伝統などれぬ  
 伝統の鑿が守ったアイヌ彫り  
 伝統に尺貫法が生きている  
 伝統があり税金を誤魔化せず  
 おばあちゃんの知恵伝統のカゼ薬  
 伝統を守れば食べて打ちぬ職  
 伝統の技で名を売る手打ちそば  
 伝統に抵抗した三代目  
 五重塔守る鎌映ゆ斑鳩路  
 藍がめの藍 伝統を守り継ぐ  
 伝統へ女系家族にある火種  
 伝統の重さに堪えている此  
 ひっそりと阿国を守る綾子舞  
 伝統を継ぐ孫在りて千五郎  
 伝統は大福帳を気にしない

文子 螢  
 四郎 炎川  
 英子 いわゑ  
 絹子 美房  
 美太 勇太  
 一風 三男  
 とし子 シマ子  
 千秀 保州  
 しげお 弥生  
 文秋 諷云児  
 保州 美津留  
 寿美 岳人  
 久峰 森子  
 英千子 英千子  
 しげお

卒業式 帽子高々放り上げ  
 伝統を聞く竹山の津軽三味  
 伝統を継ぐのに学歴邪魔をする  
 伝統と言うから重い血脈だ  
 タコヤキのソース伝統など言わず  
 伝統のしごきに耐えた涼しい目  
 火の車うちとは違つ二月堂  
 伝統の味が妥協を許さない  
 伝統を守るか愛を貫くか  
 人  
 伝統が花柄を着て家に居る  
 地  
 伝統美 留学生を弟子にする  
 天  
 しきたりと伝統ノラになり切れず  
 軸  
 式部官の判がもらえぬままかえる  
 栗  
 岳人 道胤  
 千歩 冬葉  
 朱夏 吐来  
 鬼遊 諷云児  
 希久子 希久子  
 鹿太 希久子  
 たもつ 希久子

第十四回ときせん賞決まる

ときせん賞

辞書一つ持たずに喜劇ばかり書く

古笹原芳子

準ときせん賞

尽くし足りぬ尽くし足りぬと雪の高

吉川 寿美

カップ麺やっぱり春もひとりだな

上島みち子

佳作は、本社同人の大橋政良氏はじめ、朝

倉大柏・遠山あきら・佐藤寿美子・佐野美知子・尾上八重・江尻麦秋の7氏。

eiの会 創立5周年記念川柳大会

とき 5月22日(日) 午前11時開場  
午後零時半締切

ところ サニーストンホテル  
(地下鉄「江坂」駅7番出口すぐ)

宿題と選者(各題2句)

「重ねる」 小出智子選

「火」 柏原幻四郎選

「はがき」 森中恵美子選

「すかたん」 岩井三窓選

「朝」 橘高薫風選

事前投句「卑弥呼」 片岡つとむ選

◎所定の用紙で4月20日までに

〒590-01 堺市桃山台2-15-10

長江時子方 eiの会へ

会費 2000円(合同句集・記念品呈)

懇親宴 6000円(子約制)

主催 川柳eiの会

後援 朝日新聞社



# 松村迷観子氏を偲ぶ

木村 あきら

の句碑を白鳥神社境内に建立されました。  
句集『観』には、迷観子さんの心情を吐露した句が多く収録されています。

生かされているとは知らず愚痴を言う

せて子の荷物にならぬ日がほしい

用済みと言えど明治も捨てられず

駅前に住んで遅刻が多くなり

一枚を脱いで南の旅に出る

そして、死去される約九時間前に病床に付

き添う孫娘の髪型を見て詠まれた句

アデランス 顔の座にあまえてる

を残して柳界はもとより各界の人たちに惜し

まれながら、観音様と夫人が待つ世界に旅立

たれたのでした。

法名、心鏡院義光證道居士。心からご冥福

をお祈り申し上げます。

合掌

弔 吟

迷観子句碑に魂宿らせる

成重 放任

恩師逝き心の中を風が吹く

川崎ひかり

川柳が幾度命を繋ぎ止め

辻上よしみ

五七五 終焉かざる迷観子

新川マサエ

十七字夢に描きつさようなら

工藤 吟笑

安らかに旅立ちゆきし師の寝顔

岩倉 文仙

また一つ師の計に出会う旅半ば

山地マツエ

歌子さんと手を携えて花見する

木村あきら

「川柳塔おっぱい吟社」の前身、「おっぱ

い川柳会」の創始者であり、初代会長の松村

迷観子氏は、慢性リンパ性白血病で数年にお

たつて闘病生活を送っていましたが、二月十

七日、ついに長逝されました。永年にわたつ

て同氏に寄せられたご厚情に対し、御礼申し

上げるとともに、会長亡き後、微力を結集し

て吟社を守ってまいりたいと存じますので、

格段のご指導をお願いいたします。

迷観子さんは本名信夫、通称安哲で、心鏡

庵迷観子と号し、若かりしころ、実兄が経営

する大阪の天下茶屋にあった大川薬局支店に

勤務中、相宅英二氏の紹介により「実穂（み

のる）」の柳名で『川柳雑誌』に投句を始め、

路郎の門下に名をつらねました。召集されて

れて面目をほどこしたということでした。

戦後は復員して昭和二十二年、白鳥町で松

村薬局を開店するとともに、「大内あぐら川

柳会」に入会し、香川雅人・大場青瓢氏らと

活動されましたが、両氏の死後、昭和六十四

年におっぱい川柳会を結成しました。その間、

保護司をつとめる傍ら町商工会副会長、大川

法人会理事、青少年育成センター副会長、神

社総代などの要職を歴任、また、詩吟をよく

し、臥風流準師範として活躍されました。

昭和五十六年に夫人歌子さんに先立たれて

からは令息真良氏ご一家と同居して薬局経営

にあたり、特に漢方薬の権威として知られま

した。一家をあげて観音信仰に篤く、昭和六

十三年、喜寿を記念して川柳句集『観』を出

版するとともに、復員時に詠んだ作品

古里の山は黙って見てくれる

# 柳界展望

★川柳塔わかやま吟社では

平成5年度の各賞を次のとおり決定した。

〈葵水賞〉

生き抜いたおんなの四季  
が動き出す 田中 輝子

〈あおい賞〉

割箸で車窓の秋をつまん  
でる 黒瀬登記夫

〈たちばな賞〉

本心を隠しきれない喉仏  
三宅 保州

〈課題吟賞〉

念入りに塞いでおこう隙  
間風 福田 和子

★大阪川柳人クラブは2月  
11日、総会を開き、次の新  
役員を選出した。

会長 磯野いさむ▽副会  
長 永田帆船・橋高薫風▽

幹事長 西田柳宏子▽会計

〓竹森雀舎▽幹事 榎本信

治 小川速水・川島颯云児

小出智子・坂本晴美・志水

浩一郎・田中正坊・西川景

子・波部白洋・山本翠公・

米沢俊夫

★川柳噴煙吟社の第22回清

明賞B賞の受賞1・2・3

席が次のとおり決定した。

一度は渡る橋だ息子を信

じよう 大場 可公

炎のおもい伏せてかしの

と締めくくる 香月治子

魔法からの電話か父が若

がえる 伊川登美男

★日川協の平成7年度・第

19回全国川柳大会は長野県

同8年度・第20回大会は香

川県で開催の予定。

★岐阜川柳社は3月13日、

岐阜市文化センターで創立

40周年記念川柳大会を岐阜

新聞社・岐阜放送の後援で

開催した。

★むらくも川柳会では、創

立45周年記念川柳大会を4

月12日(火)午前10時から

チェリヴァホール大会議室

(JR木次駅前)で開く。

兼題は、祝・道・艶・福・

話・顔・花(各題2句)で

投句は80円切手8枚同封の

上、4月10日までに到着す

るよ。〒699-13 島根県大原

郡木次町里方878-13・

藤井明朗方・同川柳会へ。

★第25回川上三太郎賞の募

集要項が決まった。審査は

時実新子・大野風柳が担当

雑詠5句(未発表作品)に

投句料千円(小為替)を同

封して4月20日までに〒956

新津局私書箱15号・柳都川

柳宛に送ること。表彰は総

合成績により三太郎賞1名

(副賞3万円)、準賞2名

(副賞1万円)を贈呈。

▽出版△

■『鳥取県川柳作家名鑑』

(平成5年度版・鳥取県川

柳作家協会刊・A5判34

## 新同人紹介

寺田甚一  
—柳宏子・狸村・勝晴推薦

高瀬霜石  
—栗・甲吉・五楽庵推薦

八十田洞庵  
—薫風・太茂津推薦

2ページ)県内の会員32

7名の各10句を収録。

▽住所変更△

■本田恵一朗氏

■3月号P2(目次)の

秀句鑑賞へ水煙抄 執筆者

「新・新子」↓「新・正子」

▼計報▲

■天正幸太郎氏(本社理事

天正千梢さんの夫)3月1日、胃ガンのため死去、82歳。告別式は同4日、奈良市の西方寺で行われた。

▼訂正▲

■2月号P55下段の末尾

から4行目およびP72中段

8行目「柏木靖子」↓「柏

## 4 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(金)午後1時から ややこしいいきさつ・ねばる・鉛筆	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西入り 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	1日(金)午後1時から 春・歩く・雑詠A・B	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 まつえ	9日(土)午後1時半から 肌・淡い・魅力	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	10日(日)午後1時から 幕・守る・満腹	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	10日(日)午後6時から 咲く・雲・中心・時効	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 学生・告げる・軽い・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時から 誓う・望む・生きる	豊中市立蚕池公民館 阪急蚕池駅西へ150米 〒560 豊中市蚕池中町3-10-28 井上直次
南大阪 川柳会	15日(金)午後6時から 平静・めし・遠慮・例	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸和田 川柳会	17日(日)午後1時から 直感・都合・手落ち・当然	(吟行)五風荘 南海岸和田駅南西歩15分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	17日(日) 正午から 調査・ジェラシー・知恵・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時から 看板・焼く・システム・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	21日(木) 正午から 矛盾・溝・蹴る・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島凧云児
富柳会	21日(木)午後1時から 順番・袋・誘う	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
京都 塔の会	22日(金)午後1時から 堀・悩む・歩道	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
はびきの 市川柳 会	24日(日)午後1時から 会社・誰、アルバイト・別居・自由吟	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
東大阪市 川柳 同好会	23日(土)午後6時から 古都・わがまま・浮く・窓	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。



# 川柳塔誌寿古希記念

## 合同句集 『川柳塔』

「川柳塔」は、大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて七十年、めでたく古希を迎えました。そこでこれを記念して、同人・誌友を中心とする合同句集『川柳塔』を発刊いたします。合同句集は、第一回の昭和四十九年、誌寿還暦記念の同五十九年につづく第三集、十年ぶりで平成初の刊行となります。次の要領により一人でも多くのご参加をお待ち申し上げます。

★刊行 7月7日 ★締切 5月6日(金)

★句集 B6判・約500頁・レザック表紙美装本

★参加費 5000円 ★掲載句 1人15句(自選)

(同人・誌友を問わず、誰でも参加できる)

★申込 所定定用紙に掲載句(昭和五十九年以降発表句、または未発表句)を記入し、参加費を添えて川柳塔社事務所へ。

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

### 第6回

## 時の川柳交歓川柳大会

とき 5月8日(日) 午前10時半開場

ところ 神戸市立福祉センター5F  
(JR神戸駅、地下鉄神戸駅徒歩5分)

兼題と選者(各題2句)

「湖」	林 荒介 選
「柵(さく)」	辻 一弘 選
「乾く」	小島 蘭幸 選
「そろばん」	安川 一醉 選
「狂う」	田頭 良子 選
「奥」	浜野 奇童 選
「看板」	小松原 爽介 選
「声」特別課題	小笠原 双城 選

講演 「川柳って何だろう」 田口 麦彦  
会費 1500円(記念品・昼食・発表誌)  
表彰 知事賞・市長賞ほか

### 創立65周年記念

### 去来川巨城会長賜盃受章記念

## ふあうすと川柳大会

とき 4月24日(日) 午前10時開場

ところ 神戸市立勤労会館7階大ホール  
(JR三宮駅前・神戸新聞会館東隣)

宿題と選者(各題2句・欠席投句拝辞)

「迷」	小松原 爽介 選
「笑話」	大野 風柳 選
「月日」	橘 高薫 風 選
「小説」	池田 可宵 選
「屋根」	北川 絢一朗 選
「前」	渡邊 蓮夫 選
「旗」	磯野 いさむ 選
「昇」	去来川巨城謝誌

会費 2000円(記念品・軽食・発表誌)





## 作品募集

6月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選  
水煙抄 (10句) 黒川 紫選  
銀河系 (3句) 河内 天笑選  
茴香の花 (3句) 八木 千代選  
課題吟 「梯子」 西田 柳宏子選  
「はしゃぐ」 川上 より子選  
「膝」 初歩教室 「破る」 (3句) 吉岡美房担当  
「山」 藤 隆選

★川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友 (誌代半年分前納者) 茴香の花欄は女性に限ります。

7月号 課題吟 「葉」「ページ」「配る」  
初歩教室 「満足」

## 本社4月句会

日時 4月7日(木) 午後5時半  
会場 メンズファッションセンター3階  
中央区内本町1-1 電06・941・1918  
地下鉄(谷町)4丁目下車(3番出口)交差点南西角  
平成五年度一路賞・各地柳壇賞表彰  
おはなし 高杉 鬼遊  
兼題 「予定」 松原 寿子選  
「悩む」 西口 いわゑ選  
「訳(わけ)」 川島 諷云児選  
「はやはや」 西田 柳宏子選  
「植える」 橘高 薫風選  
席題 1題 当日発表 各題2句以内  
投句費 500円  
投句料 400円(80円切手5枚)同封のこと

## 本社5月句会 6日(金)

兼題 「渋い」「戸籍」「リング」「かなり」「視野」

## 夜市川柳募集

第11回「贈る」 橘高 薫風選  
ハガキに3句 4月末締切  
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

5月の常任理事会は4月30日(出)

## NHK川柳作品募集

課題 「迷う」 森中恵美子選  
ハガキに3句 4月10日締切  
投句先 〒540-01 NHK大阪放送局  
「文芸部」川柳係  
発表 4月23日(土) ラジオ第1放送  
午前11時5分から(予定)

## 西日本文字放送作品募集

課題 「電話」 森中恵美子選  
ハガキに3句 4月15日締切  
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
大手前ウサミビル3階  
西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元(送料71円)  
半年分 三千八百円(送料共)  
一年分 七千五百円(同)  
平成六年四月一日発行  
編集兼 西尾 心社  
発行人 藤原 童心社  
印刷所 藤原 童心社  
大阪市阿倍野区三好町二一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06)261-1691 四番  
振替口座大阪81-33368番

# “貴石画” 個展

川柳塔 吐田公一

4月19日(火) - 4月24日(日)

(A.M.11時 - P.M.8時 最終日はP.M.5時まで)

ところ ギャラリーミウラ

神戸市中央区中山手

1-8-19

☎ 078-322-0668

JR 三宮駅から

徒歩5分



二十有余年の宝石研磨の集大成として、貴石画の個展を開催する運びとなりました。一度ご来駕の上、ご批判賜りますことを心よりお待ちいたします。

〒675-01 加古川市平岡町新家2006-18

吐田 一三

(0794) 22-3681

■ 自分史・句集自費出版

■ 小・中・高・大学の教科書

■ 各種本の製作・出版

いろいろな

# 本

# 製作専門!

◇ 句集・詩集・自費出版等の  
ご相談に応じます。

- 部数の少ない本も  
取り扱っています。

書籍・図書・印刷・電算

ミヤケ プランニング

## MIYAKE

planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514

FAX 06-652-2928

図書出版・ジェイパブリッシュ

電話 06-658-8741